

靈界物語 第一二卷 靈主體從 亥の卷

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第十二卷』愛善世界社

1995(平成07)年04月02日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

～
～
～
～
～
～
～
～

目次

序文 じよぶん

凡例 はんれい

總説歌 そうせつか

第一篇 あまのいはとびらき
天岩戸開（一）

第一章 せいしんじやれい
正神邪靈（四九七）

第二章 直會宴なほらひのえん〔四九八〕

第三章 蚊取別かとりわけ〔四九九〕

第四章 初蚊斧はつかふ〔五〇〇〕

第五章 初貫徹はつくわんでつ〔五〇一〕

第六章 招待せうたい〔五〇二〕

第七章 覺醒かくせい〔五〇三〕

第二篇 天岩戸開あまのいはとびらき〔二〕

第八章 思出の歌おもひで うた〔五〇四〕

第九章 正夢まさゆめ〔五〇五〕

第一〇章 深夜の琴しんや こと〔五〇六〕

第十一章 十二支じふにし〔五〇七〕

第一二章 化身けしん〔五〇八〕

第一三章	あきづきのたき 秋月瀧 (五〇九)
第一四章	をろちがはら 大蛇ヶ原 (五一〇)
第一五章	のりなほ 宣直し (五一二)
第一六章	くにたけまる 國武丸 (五一三)

第三篇 天岩戸開 (三)

第一七章	くも 雲の戸開 (五一三)
第一八章	すぬぎう 水牛 (五一四)
第一九章	くれ 呉の海原 (五一五)
第二〇章	すく 救ひ舟 (五一六)
第二一章	たちばなじま 立花島 (五一七)
第二二章	ひとつじま 一島攻撃 (五一八)
第二三章	たんぺいきふ 短兵急 (五一九)

第二四章 言靈ことたまの徳とく〔五二〇〕

第二五章 琴平丸ことひらまる〔五二一〕

第二六章 秋月皎々しうげつ かうかう〔五二二〕

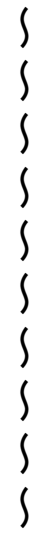
第二七章 航空船かうくうせん〔五二三〕

第四篇 古事記略解こじきりやくかい

第二八章 三柱みはしらの貴子みこ〔五二四〕

第二九章 子生こうみの誓ちかひ〔五二五〕

第三〇章 天あまの岩戸いはと〔五二六〕



序文じよぶん

教祖御筆先と靈界物語に就て、少しく所感を述べて置きます。

抑も教祖の手を通して書かれた筆先は、到底現代人の智識や學力で之を解釋す

る事は出来ぬものであります。如何となれば、筆先は教祖が靈眼に映じた瞬間の

過現末の現象や、又は神々の言靈の斷片を惟神的に録したものですから、一言一

句と雖もその言語の出处と時と位置とを靈眼を開いて洞觀せなくては、其眞相は

判るものではありません。之を今日の演劇に譬て見れば、良の金神の筆先の名の

許に、鹽谷判官高貞の言語もあれば、高野師直、大星由良之介、大野九太夫、千

崎彌五郎、早野勘平、お輕、大野定九郎、加古川本藏、桃井若狹之介などの役者

が各自に臺詞を使ふのを、由良之介は由良之介一人に對する臺詞、九太夫は九太

夫一人のみの臺詞を集めたのが、教祖の筆先であります。所謂芝居の下稽古の時

に、各役者が自分の扮すべき役目の臺詞のみを讀み覺ゆるための拔書のやうなも

のであります。故に、實際の靈界にある神劇を目撃したものでなければ、筆先を

批評する事は出来ませぬ。例へば大星由良之介の臺詞の筆先を見れば、實に感心

も爲し忠臣義士の模範とする事も出来ませんが、之に反して九太夫の臺詞を記した

筆先を見る時は、實に嘔吐を催す而已ならず、實に怪しからぬ筆先に見えるのであります。故に神様は、三千世界の大神居であるぞよと、筆先に書いて居られます。其各自の臺詞書を集めて、一つの芝居を仕組むのが緯の役であります。故に靈界物語は筆先の断片的なるに反し、忠臣藏の全脚本とも云ふべきものであります。筆先の中にも、智恵や學では此筆先は到底判るもので無い、因縁の靈魂に世界の實地が見せてあるから、其者と直とでなければ筆先の精神は判らぬぞよ、と記してあるのを見ても判りませう。又時と處と位置とに因りて、筆先の文句に異同あるのも當然である。輕々しく筆先は人間の論評すべきものではありませぬ。筆先は決して純然たる教典ではありませぬ。

要するに、太古の神々の活動を始め、現在未來の神界の活劇を、断片的に示した臺詞書きに過ぎませぬ。之を一つに取まつめてその真相を劇化して、完全に世人に示す様にするのが靈界物語編纂の大使命なのであります。右様の性質の筆先を一所に集めて、神劇の真相を世に發表せむと努力する緯役の苦心をも覺らずに、緯役が完全な筆先をワヤに作りかへたなぞと批評する人は、筆先の眞の價値なり

又神の御意志を以て、自分の意志と同一に見做した人々の誤りであります。教祖の書かれた筆先（臺詞書）の九太夫の巻を見た人は、キット良の金神の教は悪であると言ふであらう。由良之介の臺詞書を見た人は、定めて良の金神の教を立派な結構な教であると云ふであります。この臺詞書を整理して立派な神劇を組立てた上、始めて平民教育の芝居ともなり、バイブルともなるのであります。九太夫一人の臺詞を見たり、由良之介一人の臺詞書のみを見て、善だの悪だの忠だの不忠だのと批評するのは、批評する人が間違つて居るのであります。故に緯役は大正十年舊九月十八日、教祖の神靈の御請求に由つて、病軀を忍び臥床の儘靈界の物語を口述することと致しました。然るに靈界物語は簡明を缺くとか、冗長にして捕捉する事が出来ないとか、複雑之を讀むの煩に堪へないとか、神劇としても俗化して居て神威を冒瀆するものだとか、甚だしきは緯役の精神そのものの發露だとか、種々雑多の小言を聞きますが、緯役として靈界物語を口述し始めたのは、今迄の信徒の方々が筆先の臺詞書而も九太夫の臺詞を眞の神の教の如く輕信された結果、昨春の様な事件を突發する様になつたのだから、過失を再びせざらしめ

むとして、病中を忍び本物語を著述する事に成つたのであります。決して道樂や物好きでコンナ事が出来ませうか。

馬琴は二十八年間を費して八犬傳を作りました。この靈界物語は、僅かに一年足らずの間にて口述日数は百五十日、而も八犬傳の三倍を超過して居る大部なものであります。何れも人間の頭腦の産物でない事は、少し著述に經驗ある文士なれば一目瞭然たるべきものだと考へます。又中には、靈界物語は神幽現三界の歴史であつて、家庭の寶典たる教化的價值なきものだと云つて居る布教師があるさうですが、未だ靈界物語を讀了せないからの誤りであります。第一卷より第四卷迄位を讀むだ人は、教訓的よりも歴史的方面の多いものと思惟されるのは寧ろ當然だろつと思ひます。併し靈界物語は歴史でもあり、教訓でもあり、教祖の筆先の解説書であり、確言書であり、大神劇の脚本であります。この物語に依らなければ、教祖の筆先の斷片的（臺詞書）のみにては、到底神界の御經綸と御意志は判るものでは無いのであります。

靈界物語の文句の中に、一旦歸幽した神人が時代不相應の後世まで生きて居て

種々の活動をしたり、又アルサレムの都が現今の小亞細亞の土耳其であつたりするなどは、現代人の尤も疑ひの種を蒔くものと豫期して居ます。併し何を謂つても數十萬年前の物語であり、又靈界を主として口述したのですから、不審の點は澤山にあるでせう。口述者自身に於ても不審、不可解の點は澤山ありませう。筆先と靈界物語とは經緯不離の關係にある事を考へて貰ひたい。また今まで發表した神諭は、由良之介や千崎彌五郎の臺詞のみを教訓として發表したものであります。たまに九太夫の臺詞のやうに人に依つて感じられる點がある様なのは、其人が神劇の全體を見て居ないから起る誤解であります。由良之介でも七段目の茶屋場あたりでは、一寸見ると九太夫式の言辭を弄してゐる。されど彼の心中は決して悪ではない。緯役として今まで發表した神諭を、九太夫式の點がある様に解するのには、靈界の真相が解らないからであります。何れも緯役として解決の着かない様なものや、悪言的の筆先は決して發表はして居ませぬ。精神のゆがみたる人が見たら悪く見えるであらうが、緯役として神界の實地に觸れ根據ある點のみを選抜して神諭とした迄であります。悪く見ゆるのは神靈の活劇を見ないからであ

ります。故にその蒙を啓くために、本書を發表する事となつたのであります。中には「筆先は一字も直すことは成らぬぞよ」とあるのを楯に採り、緯役が直したのが不都合だと謂つて居る人がある。是も一を聞いて二を知らぬ人の誤りである。變性女子は緯役だから書き放題に出口直に書かしてあるから、女子がよく調べて直して出して下さいと示してある。是が緯役としての使命である。「一字も直す事は成らぬぞよ」と示されたる意義は、變性女子以下の當時の筆記者に對して示された筆先の詞である。之と混同して緯役を云々するのは少し早計でありませう。

凡例

一、本巻の巻尾に收められたる「古事記略解」は、大正九年十月十五日東京婦人會發會式の席上において、瑞月聖師が御講演になつたもので「天の岩戸開」と題して、大正九年の「神靈界」十一月號に發表されたものです。

一、本卷の口繪「蓄音器吹込中の瑞月聖師」に就ての詳しい事は第八章の「思出の歌」を参照して下さい。

大正十一年九月

編者

總説歌

葦原の瑞穂の國の中津國
その眞秀良場や青垣の
山を四方にめぐらして
流れも清き小雲川
淵瀬と變る世の中は
めぐりめぐりて二十四年
地の高天原も治まりて
鬼の姿もみずのえの
大蛇探女も戌の春
干支もめぐりて如月の
今日の八日は三めぐりの
月日の車後にして

梅が香薫る月の空 高く輝く瑞月は

八重黒雲につつまれて 浮世のなやみ覺りたる

神のめぐみの幸はひて 心の岩戸開きつつ

明れば二月九つの日は西山に傾きて

月照る夜半の獨寢の夢を破りし芙蓉山

神の使の現みたま 五六七の御代を松岡の

使の神に誘はれ 千歳の松の繁り合ふ

堅磐常盤の巖窟に さしこもらひて天地の

神の教を受繼し 名も高熊の岩の前

天津御空に月照の神はわが身を照しつつ

鎮魂や歸神 審神の道も授けられ

現界、神界、幽界を 産土神に伴はれ

須彌仙山に攀ぢ登り 宇宙の外に身を置きて

過去と未來と現在の世の状況を悟りたる

十二の干支も三廻りの
いよいよ今日は村肝の

心洗ひて靈界の
奇しき尊き語り言

十二の干支に因みたる
十二の巻の筆始め

【松】の大神の【村】
彌【仙】の山を仰ぎつつ
（松村仙造）

天地【造】化の物語り
月は【外山】の頂に
（外山豊二）

【豊二】かがやき【岩田】
かく夜も【久方】の【太】御空
（岩田久太

郎）

隈無く照れる【谷村】や
【藤津久子】や【高木氏】
（谷村眞友・藤津

久子・高木鐵男）

【中野祝子】や【武郷氏】
【眞】の【友】の寄り合ひて
（中野祝子・

同武郷）

神世に進む【加藤】時代
【新】月空に【明】らけき
（加藤新明）

梅の花咲く今日の春
めぐりめぐりて【北村】の
（北村隆光）

神の稜威は【隆光】る
本宮【山】の【上】下に
（山上郁太郎）

もちはなちばなふく【郁】と
咲き匂ひたる【太】元の

神の教の名【西】負ふ
本宮【村】の眞秀良場に

(西村徳治)

神の御徳もいやちこに
清く治まる五六七の世

松の常磐の心もて
神の教を説き啓く

【松雲閣】の奥の間に
嚴の御魂の開きたる
(松雲閣)

神世を經の御教言
うまらに委曲に説き別くる

錦の機の緯絲の
横たはりつつ緯の役

つとむる今日ぞ芽出度けれ。

大正十一壬戌年三月六日 舊二月八日

於松雲閣 王仁

第一篇 天岩戸開（一）

第一章 正神邪靈（四九七）

高天原の神司 神伊邪諾の大神の

任しのままに海原に 漂う國を治めむと

速須佐之男の大神は 千々に心を悩ませつ

御靈幸ひましまして 天津御空に月照彦の

神の命や足眞彦 教を四方に弘子彦の

神の命を遣はして 大海原に群集る

百の神人言向けて 直日の道を諭せども

まつらふ神は少名彦 豊國姫の活動も

大海原の潮沫と なりて消え行く浅猿しさ

八束の鬣は胸先に 長き年月世を憂ひ

神を思ひて泣き給ふ 荒振る神の訪ひは

五月蠅の如く皆湧きて 萬の妖ひ悉く

むらがり起り青山は 枯山の如泣き涸し

海河ことごと泣き干しぬ 國治立の大神の

心を千々に碎かせつ 固め給ひし海原の

國の八十國八十島は 日の出神や木の花姫の

神の命の活動に 一度は聖く平けく

浦安國と治まりて 神人歡ぎ樂しめし

その祥代も夢の間の 夢と消え果て醜神の

伊猛り狂ふ世となりて 天足の彦や胞場姫の

魂より出でし曲津神 八岐大蛇や曲狐

醜の枉鬼八十曲津 天の下をば縦横に

荒び疎びて常暗の
世とは復びなりにけり

神素盞鳴の大神は
地教の山を後にして

魔神の巢喰ふコーカスの
峰に現はれましまして

正しき神を招集へ
兩刃の劍抜き持たし

枉言向けて天の下を
浦安國と平らけく

造り成さむと思召し
千座の置戸を負はせつつ

世人を救ふ瑞靈
深き恵みを白瀬川

一二三四五つ六つの瀑布
心筑紫や豊の國

磐樟彦の珍の御子
高光彦や玉光彦

國光彦に言依さし
清めますこそ尊けれ。

常世彦の後身なるウラル彦は、八岐大蛇の靈に憑依されて、自ら盤古神王と詐
りウラル山に立籠り天が下四方の國を體主靈從の教に歸順せしめむとし、百方心
力を盡しつつあれども、ウラル山に接近せる大江山に鬼武彦數多の眷族を引伴れ

て、固く守り居れば流石の邪神も、跋扈跳梁するに由なく、一方常世姫の後身ウ
ラル姫は大氣津姫と現はれて、アーメニアの野に神都を開き、東西相應じて體主
靈従の神策を行はむと、數多の魔神を使役して筑紫の島を蹂躪し、瀬戸の海、呉
の海を根拠と定め、縦横無盡に活躍せむとしたるも、エルサレムの舊都に在る橄
欖山（一名黄金山）下に埴安彦神、埴安姫神現はれ給ひて、天教、地教の兩山と
共に相呼應し麻柱の教を以て清き言靈を詔らせ給へば、流石の曲神も進退維れ谷
まり、第二の策源地としてコーカス山に根拠を定めたりしが、又もや三五教の宣
傳使の爲に追ひ拂はれ、今は殆ど策の施す所なく、アーメニアの都を捨て、八百
萬の曲神は四方八方に散亂し、筑紫の島を初め高砂島、常世の島、豊秋津島、龍
宮島等に死物狂ひとなつて、惡逆無道の限りを盡すこそ歎てけれ。

地上は復び妖氣に充され、天日暗く、邪氣發生して草木色を失ひ、鬪争所々に
起り、惡病蔓延し復び常世の闇と一變して、諸神、諸人の泣き叫ぶ聲は、天地に
充滿するに至れり。然るに惡神等は、アーメニアを死守して勢ひ侮るべからず、
ウラル山又看過すべからざる形勢にあり。變幻出沒極まり無き魔神の活躍は、日

月に猛烈となり收拾すべからざる惨状を呈するに至りたれば、神素盞鳴大神は
大に之を憂ひ給ひて、母神の在します月界に還らむかとまで、心を痛め給ひつつ
ありける。

あゝ此の闇黒の世は如何にして、再び元の理想の神世に復るべき道のあるべき
や心許なき次第なりける。

(大正一一・三・六 舊二・八 外山豊二録)

第二章 直會宴〔四九八〕

千歳の老松雲表に 聳えて高き萬壽山
堅磐常盤の松の世を 知す磐樟彦の神
花は紅葉は緑 花の都の緑の流れ

フサの國をば後にして 聖地を越えて茲に兄弟三人は

住江の國を跋渉し イホの都ものり越えて

愈筑紫の島に着く 心つくしの益良男が

純世の姫の鎮まりし 其國魂を清めむと

神の教を白瀬川 一二三四五つ六つの瀧

水音高き宣傳歌 歌ひ歌ひて進み行く。

高光彦、玉光彦、國光彦の三人は、イホの都に宣傳歌を歌ひながら進み行くの

であつた。

日は黄昏れて長き春日の旅に疲れたる三人は、とある森林に蓑を敷き、露を凌ぎ、一夜を明かしけり。

此處には小さき國魂神の祠あり。三人は祠の後に身を横たへ眠つて居ると、夜半と覺しき頃大勢の人聲聞え來たり。三人はこの聲に目を醒まし、耳を傾け、其話を私かに聞き居る。群集の中より一人の男が選ばれたるが、祠の前に立ち現は

れ燈火を獻じ、神酒を捧げ何事か祈願を籠め終つて直會の宴に移りしと見え、人々の聲は刻々に高くなり、歌ふもの、飲むもの、踊るもの、泣く、笑ふ、怒る、種々の活劇が演ぜられつつありける。

三人は祠の蔭より床しげに人々の話を、耳を澄まし、息を殺して窺ひ居る。

甲「ヨウ、酋長さま、御苦勞さまでしたが神様は何と御告げがありましたか」

酋長「有つたでもなし、無かつたでもなし。マアマア皆の者が心を一つにして善

と悪とを辨へ、善の方へ進むより仕方がないなア」

乙「膳飽と云つたつて、此頃の様子に百日許り日天様の御顔もろくに見えず、お月

様は曇り勝ちで夜は殆んど眞の闇、晝と云つた處が今までの朧月夜の様なものだ。

これでは五穀も實らず果物は皆蟲が入つて食へる様になるまでにバタリと地に落

ちる。病氣は彼方此方に起る。大勢の人間の食べる米はなし、果物はなし、どう

して膳に飽く事が出来るものか」

甲「オイ、貴様は間違つてゐるよ。善と云へば正直な心を持つて神様を敬ひ、我

身を捨てても人の爲めになる事をするのだ。悪といへばその反対だよ」

乙「そんな事は三歳児でも知つてるワイ。善い事をすれば其時から気分が良くなる。悪い事をすれば何となしに気分が悪い。何物かに叱られる様な心持ちになつて来る。然し乍ら肝腎の生命の親の食物がなくて、可愛い女房や子が、骨と皮とに瘦衰へ渴命に及ばうとして居るのに、これを見乍ら何うして人の事處か。どうしてもかうしても利己主義になるのは止むを得ぬぢやないか」

甲「そこを辛抱して、人を助けるのだ。それでなければ善と云ふ事が出来ぬよ」
乙「さう偉さうに理窟を云ふのなら、貴様の家の倉をあけて町中の者に其米を施してやつたらどうだい。言ふべくして行ふべからざる善は偽善だ。貴様は飢ゑた味を知らぬからそんな氣樂な理窟や大平樂を竝べるのだ。どうだ善と悪とが解つたか」

一同「贊成々々。初公の云ふ通りだ。神様のお言葉通り善悪を立別けて困つた者を助ける様に、春公さまの倉を開けて町中の者に善の鑑を出して貰はうかい」
春公「イヤ、俺も皆の者を助けてやりたいと思つて、三杯食ふ處は二杯にして貯めてあるのだ。然し乍らこれは「まさか」の時に助ける爲めだ。未だ俺の處の米

を出して町中へ分配する時期ではない。今出してやると、誰も彼も宜い氣になつて毎日毎日飲み食ひに耽り、終ひには喧譁計りする様になつて、お天道様に冥加が悪いから、反つて善が悪になると俺も困るから、マアマア働ける丈けは働いて、愈世界が眞暗がりになる様な事が出来た其時こそ、世の中は相身互ぢや。お前達が勝手に倉をあけて食ふ様にする」

丙「それも一つの理窟だが持つとる奴は穢いものだ。何の彼のと理窟を付けて出し惜みをするものだ。末の百より今の五十と云ふ事もある。先になつて善をするより善は急げだ。今の内に倉を開け放して町中を助けたら、どれ丈け春公さまの光が輝くか知れまい。ナア春さま、悪い事は云はぬ、人氣の立つた時にホツ放り出すのだぜ。それがお前の身の爲めだよ」

春公「皆の人達、よう考へて見てくれ。斯う百日餘りも日は照らず、闇の夜は續く。山の木は枯れる、毎日々々地響きはする、病人は澤山出来る、先が案じられて仕方がないぢやないか。今の間は、木の葉でも根でも、草でも噛んで生命を繋いで置くのだ。木の葉は枯れ、地の上に何一つ食ふ物がなくなつた時に初めて倉

をあけて、米や麥や、粟、黍、稗などを搗いて各自が粥にでもして、世界の大峠を凌ぐ様にしなくては心細いからな」

丁「木を食への、草を食へのと餘り人間を莫迦にして呉れるな。蟲か牛馬か何んぞの様に人間が木や草を食はれるものなら誰も働きはしない。へん、餘り莫迦にするな」

春公「お前達は、難儀だ！困る！と口々に悔んで居るけれど、毎日酒を飲み、米が美味い、味ないと小言云つてる間は駄目だよ」

初公「そんな理窟は止めにして不言實行が大切だ。有る者は無い様な顔をするし、無い者は有る様な顔をしたい世の中だ。兔も角酋長さまに明瞭と神様に伺つて貰つて、春公の倉を開けたが宜いか開けぬがよいか判断して貰はう。モシモシ酋長さま、もう一度神様に右の事を伺つて下さいな」

酋長「神の言葉に二言はない。善悪をよく辨へて正直にするが一番だ」

乙「酋長様は三五教ですか、よう善とか悪とか仰有いますな」

酋長「さうだ、俺は三五教だ。此のイホの人間は八分までウラル教だから秘して

居つたが、もう斯うなつては神様に對して畏れ多いから、明瞭と三五教だと言明して置く。お前達が毎日日ウラル教に呆けて仕事もせず酒計り飲んで、利己主義を行つて世の中を曇らすものだから、地の上は一面に邪氣が発生し、山は枯れる河は干る、五穀は實らず果物は熟さず、日月の光も黒雲につつまれて皆見えぬ様な世の中になつて了ふたのだ。それでもまだ改心が出来ねば、どんな事が出て来るか分つたものぢやない。ちつとは俺の云ふ事も聞いて貰ひたい。お前達の爲だ。酋長は床の置物だとか云つて、何時も俺を莫迦扱ひして聞いて呉れぬものだから、天地の神様が吾々を戒める爲めにこんな常闇の世界を現はしなされた。もう今日限り今までの悪い精神を立替へて善に立歸りますと此神前で誓つてくれ」

初公「ヨシ分つた。酋長と春公とは腹を合せて神様を楯に、自分計り安樂に暮して、俺達の苦しむのを高見から見物すると云ふ悪い量見だナ。オイ皆の奴、酋長と春公の首ツ玉を抜くのだ。ヤイヤイ酒に喰ひ酔うて、吠たり笑つたりして居る場合ぢやないぞ。俺達の一身上に關する大問題だぞ」

と唼鳴り付ける。一同は初公の號令の下に立ち上り、酋長と春公を目がけて各自に棍棒を打ち振り乍ら、四方八方より酒の機嫌で打つて掛る。嗚呼この結果は如何に治まらむとするか。

(大正一一・三・六 舊二・八 藤津久子録)

第三章 蚊取別〔四九九〕

イホの都の町外れ、國魂の祠の森に集まりたる群集は、直會の神酒に酔ひ、終に酋長および春公に向つて、棍棒を振つて四方より飛びかからむとする其時しも、闇を透かして宣傳歌聞え來たる。

☞ 神が表に現はれて 善と惡とを立別ける
此世を造りし神直日 心も廣き大直日

唯何事も人の世は
身の過は宣り直せ

直日に見直せ聞き直せ

と聲も朗かに唄ひながら、群集の中に悠々として進み來る一人の宣傳使、篝火に照されて、茹章魚の様な赭い顔に禿頭、腰つき可笑しく其前に現はれ、又もや以前の宣傳歌を繰返すのであつた。初公は大に怒り、
初公「コラ、何處の奴か知らぬが、善も悪も有つたものかい。章魚の様な面付しやがつて何だツ。折角の我々の面白い酒宴に茶々入れるのか。サア、マ一遍吐いて見る、量見ならぬぞ」

と右の肩を無理に聳やかし、凹目をギロつかせ、ヒヨロリ、ヒヨロリと宣傳使の前に現れ、ウンと許りに突き當つた。宣傳使は體を躲し、
宣傳使「ヤア、お前さんは此町のお方と見えるが、お酒は餘り上らぬが良からう」
初公「ナ、何だツ。お酒を上ると上るまいと、放つときやがれ。何も貴様の酒を飲むだのでもなし、俺の酒を俺が勝手に飲むだのだ。此辛い時節に、自分の酒迄

かれこれ云はれてたまるかい。貴様は何處の馬鹿者だ。オイオイ皆の奴、此奴は
あななひけう 三五教だぞ。酋長も春公も同腹だ。二人叩くも三人叩くも同じ事だ。此奴が親分
らしい。是から先へ、疊ンだ、疊ンだ

宣傳使 朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも 誠の力は世を救ふ

救ひの神の御教に 心を覺せ目を醒せ

黒雲四方に塞がりて 黒白も分ぬ闇の夜に

人の心を照さむと 神の御言を畏みて

朝な夕なに山河を 渡りて此處にイホの森

人聲高しと来て見れば 初めて會つた初彦が

酒の機嫌で熱を吹く 吹くは吹くは法螺の貝

二百十日ぢやなければも 吹いたる後は良くないぞ

早く静まれ風の神 弱い奴ぢやと付け込みて

肩臂怒らす可笑しさよ
酒を飲むのはよけれども

酒に飲まれた初公の
その足附は何事ぞ

恰も家鴨の火事見舞
腰はフナフナ目クルクル

今に心を直さねば
天地は暗く揺り動き

五穀實らず果物も
残らず蟲に落されて

眩暈が来るは目の當り
頭を土に足上に

のたくり苦む憐れさを
誠の神は見捨て兼ね

コーカス山に現れて
此世を照す朝日子の

日の出神の御教を
天地四方に宣べ玉ふ

ア、人々よ人々よ
一日も早く速けく

酒に腐りし腸を
天の眞奈井の玉水に

洗つて神の御爲に
誠を盡せ皆盡せ

三五教は世を救ふ
救ひの船は今此處に

我も昔は自在天
大國彦に使はれて

あらぬ罪をば作りたる
曲津の神の住の家

腸を腐らす酒好み
瓢を腰にブラ下げて

ウラルの教を開きつつ
生血を絞りし蚊取別

わけて尊き朝日子の
日の出神に救はれて

心も魂も澄み渡り
筑紫の島の守り神

純世の姫の神使
悪を退け善に付き

身の罪科を天地に
謝罪り悔いて元津祖

神の賜ひし眞心に
一日も早く歸れかし

畏き神の御教は
水を洩らさぬ三五教

あな有難や尊しと
共に手を拍ち皇神を

稱へまつれよ百人よ

初公「何だ、ベラベラと氣樂さうに、譯も分らぬ事を吐きやがつて、それほど酒が喰ひたいのか、喰ひたければ此處に爛冷しがある。是でも一杯喰つて、もう一

切り歌つて呉れ。貴様の姿は氣に入らぬが、聲と歌が氣に入つた。サア、この爛冷しでもグツと飲むで、もう一切り歌つたり歌つたり

蚊取別「イヤ、私は三五教の宣傳使、神様の神酒は戴きますが、皆様の飲みふるした餘り酒は、平に御免を蒙ります」

初公「ナ、何を吐しやがるのだ。ド乞食奴が、贅澤を云ふな。貴様の様な贅澤な奴が、此世の中にうるつくものだから、春公の奴、澤山に米や酒を倉にウンと持つて居やがつて、まだ御前らは贅澤なとか、世の中が其處まで行詰まつて居らぬから、倉を開くは早いとか吐きやがるのだ。悪い智慧をつけよつて、量見ならぬぞ」

蚊取別「それは大變な間違です。我々は贅澤を戒めに歩いて居るもの、聞き違つて貰つては困りますよ」

群集の中より又もや一人の泥酔者が、行歩蹒跚として此場に現れ來り、男「コラコラ、初公、コンナ奴に相手になつて居るものだから、肝腎の酋長や春公の奴、知らぬ間に逃げて仕舞ひよつたぢやないか」

初公「ヨウさうだ。風を喰つて逃げ失せたか。イヤ、ナニ、彼奴の家へこれから押しかけて行かう。小さくなつて、倉の中へ逃込むで、鼠の様に俵に喰ひ附いて居やがるだらう。サアサア是から春公征伐だ。酋長も巻添だ」

蚊取別聲を張り上げて、

「ヤア、皆の方々しばらく御待ちなされ。我々が申上げたい事がある。キット悪い事は云はぬ。御聞きになつたが皆様の爲だらう」

初公「エー、何を愚圖々々云やがるのだ。此棒で貴様の頭を蚊取別と胴突いてやらうか、貴様は爛冷しは嫌ひだと吐きやがつた。何ぼ爛取酒でも、こんな處で立派な爛酒が飲めると思ふか。冷酒でも結構なのに、何を不足さうに愚圖々々云ふのだい。オイオイ皆の連中、行け行け、春公の家へ」

蚊取別は聲も涼しく天の數歌を歌ひ、最後にウンと群集に向つて靈を送つた。初公、斧公の二人は化石の様になつて、其場でピタリと倒れた。群集は口を開けたまま、手を振り上げたまま、足を踏んばつたまま、立かけたまま、千種萬態、化石の様になつて、目ばかりギロギロと動かし居る。此時祠の後より、

神かみが表おもてに現あらはれて

善ぜんと悪あくとを立たて別わける

家いえを破やぶるも酒さけのため

喧譁けんくわをするも酒さけのため

泣なくも怒おこるも酒さけの爲ため

酒程さけほど悪い奴やつは無い

蚊取かとりの別わけの宣傳使せんでんし

今いまや此場このばに現あらはれて

酒さけに狂くるへる里人さとびとを

各々おのもおのもに靈縛たましばり

ア、勇いさましや勇いさましや

神かみの力ちからはまのあたり

四邊あたり輝かがやく篝火かがりびに

照てらして見みれば三五あななひの

神かみの教をしへを傳つたへ行く

雄々ををしき姿すがたの一人旅ひとりたび

心こころも堅かたき磐樟彦いはくすひこの

神かみの命みことの三柱御子みはしらみこの

高光彦たかてるひこや玉光彦たまてるひこ

國光彦くにてるひこの宣傳使せんでんし

君きみの勳いさをを覗すかし見みて

心こころの底そこより愛めでまつる

ア、惟かむながら神々々かむながら

御靈幸みたまさちひましませよ

と歌うたひ乍ながら三人さんにんの宣傳使せんでんしは蚊取かとり別わけの前まへへ肅々しゆくしゆくとして現あらは来きたる。

第四章 初蚊斧〔五〇〇〕

三柱の宣傳使は蚊取別の立てる前に現れ、

高光彦「ヤ、これはこれは三五教の宣傳使蚊取別様とやら、初めてお目にかかります。御高名は父から承はりました。神様の御引合せ、思はぬ所でお目にかかりました」

蚊取別「ヤア、貴神等が萬壽山の磐樟彦命の御子達ですか。神國の爲に御苦勞で御座います。あなた方は是から何れの方面にお越しのお考へですか」

「ハイ我々はイホの都を越えて、筑紫島、豊の國の白瀨川の瀧に魔神が潜むで災害をなすと聞き、言向和す爲に參る途中で御座います」

蚊取別「それは結構ですナ。白瀨川には六箇の大瀑布があつて、そこには惡龍惡

蛇が棲處を構へ、八頭八尾の大蛇と氣脈を通じて、此通り天を曇らせ、地を汚して居るといふ事、私も一旦黄金山に歸り、附近の地を宣傳して居ましたが、今度は長驅して白瀬川の魔神を退治する積りで、此處迄やつて来た途中、見れば、前方に炬火の光、人の叫び聲、合點行かずと宣傳歌を歌ひながら走つて来て見れば、豈圖らむや、御覽の通り立派な人形の陳列會、何處の技師が作ったものか知りませぬが、よくも出来たものです。おまけに此人形は別に仕掛はない様ですが、目の玉を動かし、涙をこぼし、つひ最前までは、酒を喰ふ法螺をふく、歌を唄ふといふ妙な人形です」

三人「アハ、ハ、ハ」

蚊取別「皆さまどうでせう。一々この人形に魂を入れて、ものを言はせ、立派に立働く様になつて見ませうか。きつと三五教の教に歸順する様になるでせう」
高光彦「我々は萬壽山を立出てより、まだ一回も宣傳を試みた事はありません。何分にも沙漠や野原ばかりを渡つて来たものですから………」
蚊取別「私が一寸手本を出しますから手傳つて下さい」

といひ乍ら、化石の様になつた人々の前に坐り込み、

「サアサア人形さま、お前は目ばかり動かして居るが、今口を動く様にしてやる。私の言ふ通りに云ふのだよ……ウンよしよし、承知か、頷いて居るナ……神が表に現はれて」

初、口をモジヤモジヤさせ乍ら、

初公「カメカオモテテニアラワレテ」

蚊取別「モツト確乎言はぬか。サアも一遍言うた」

初公「力……力……敵わぬ、カニして下さい。必ず必ず心を直します」

蚊取別「ヨシ、それは分つたが、神が表に現はれてを歌へ」

初は、

「神が表に現はれて

善と悪とを立別る

此世を造りし神直日
ただ何事も人の世は

心も廣き大直日
直日に見直せ聞直せ

身の過ちは宣り直せ
蚊取の別の神さまよ

聞けばお前も其昔
良くもない事澤山して

悪神さまと歌はれて
今は偉そに其處ら中

牛から馬に乗り替へて
善ぢや悪ぢやと言ひ歩く

ホんに世界は廣いもの
わしも昔は自在天

神に仕へた悪神ぢや
其時お前は狸々の

様にガブガブ酒喰ひ
人を泣かした奴なれど

どうした風の吹き廻し
今は立派な宣傳使

心の色は變れども
やつぱり變らぬ其姿

茹蛸みた様な姿して
人を教へて歩くとは

それやマア何とした事か
ホんに世界は廣いもの

蚊取別「コラコラ何を言ふのだ。昔は昔、改心すれば其日から善の神だ。口だけ

自由にして遣れば、直にそれだから……貴様も容易に改心は出來相にもない。

マア改心の出来るまで、百年でも千年でも固くなつて鯨こぼつて居るが宜いワイ
初公「お前も昔馴染だ。つひ心安いものだから言つたのだ。そんな意地の悪い事
言はずに、身體を舊の通りにせむかい蚊取別」
「アハ、どこまでも負惜みの強い奴だナア」
初公「弱くて此世が渡れるか。負惜みなつと強くなければ、優勝劣敗弱肉強食の
此世の中が渡れるものか。善ぢや善ぢや世の爲だ、國の爲ぢや、人の爲には身命
を賭してなんて吐かす奴は、みんな偽善者だ。俺は斯う見えても、悪にも強けれ
ば善にも強いのだ。併し乍らどうしたものか、悪は行りたくない。町の奴が可愛
相だから、厭でも應でも悪の假面を被つて憎まれ者になつて、酋長や物持の春公
に掛合つて見たのだ。世間の奴は善に見せて悪を行る、俺は悪に見せて善を行ふ
のだ。蚊取別、お前も取分けて抜目のない男だつた。常世會議では一寸失敗りよ
つたが、しかし宣傳使の假面を被つて相變らず悪い事を行つとるのだらう。顔も
知らぬ宣傳使なら、丁寧に頼みもし、謝罪もするが、何分お前の素性を百も承知、
萬も合點して居る俺としては、チャンチャラ可笑しいて、眞面目に改心するなぞ

と言はれたものかい。そんな悪戯をせず早く靈縛を解け』

蚊取別 『解いてやるが、解いたらモウ喋らぬか。三人の若い宣傳使の前で、昔の棚卸しをやられると面目玉を潰して了ふ。どうだ、何も言はぬと誓ふか』

初公 『チガフかチガハ又か、そら知らぬが、記憶にある事は、俺が言ふまいと思つても、腹の中から言うて来るのだから仕方がないワ。一寸先の事は分らぬから、堅い約束は出来ぬワイ。俺の身體が自由になつたら、蟲の居所に依つては、お前の薬罐頭をブン擲るかも知れぬ、其時は其時の事だ』

蚊取別 『イヤア面白い。貴様見かけに寄らぬ正直な奴だ。中々よく身魂が研けて居るワイ』

初公 『ハ、ハ、ハ、さうだらう。大勢の代りになつて、名譽も、生命も、何も投出して、此イホの都でも威勢の高い酋長や、物持の春公に掛合うて居る位だから、何れ明日位には酋長の奴、澤山な家來を連れて俺を召捕りに来るのは、印判で押した様なものだよ』

蚊取別は、

「サア、これから靈縛を解いてやる」

といひ乍ら、

「ウン」

と一聲。初公は舊の身體に復し、

「ヤア、有難う。蚊取別大明神、よつぼどお前は御神徳を貰うたなア。私もこれ

丈の神力があれば、酋長の三人や五人位ウーンと靈をかけて、對方をウーンと堅に

首を振らしてやるのだけれどナア」

蚊取別「そんな事は何でもないワ、俺がするのぢやない。神様のお力だ。俺の背

後には結構な神様が守護して御座るのだ」

初公「ア、さうか、偉いものだナア。併し俺だけ自由になつたが、他の者は氣の

毒だ。一つ皆にそのウーンを行つて呉れぬか」

蚊取別「お前が俺の行つた様に手を組んで、皆の者にウーンと一聲かけて見よ。忽

ち舊の通りになるのは請合だ。併し神力が現はれても、お前の力だと思つたら違

ふぞ。九分九厘まで神様のお力だから、さう心得る」

初公「行つても可からうかな。私の様な素人がウンを行つても利くだらうか」

蚊取別「それが悪いのだ。自分が行ふと思ふから間違ふのだ。お前は唯神様の機械になる丈だ。サア手を組むで一同に向かつてウンと行つて試い」

初公は不安の念に驅られ乍ら、惟神靈幸倍坐世を二回心細げに唱へて、大勢に向ひ、ウンと鎮魂術を行ふ。不思議にも一同は舊の姿に立復り四人の宣傳使の前に走り來り、跪いて涙を流し合掌し居たりけり。

「ヤア皆さま、安心なされ、この初公が御神力を頂いたらこんなものだ。モウモウ明日の事は心配するに及ばぬ。今日の事は今日一生懸命に働いて、取越苦勞をせぬ様にするのだ。マアマア揃うて神様にお禮を申上げようかい。酋長や春公は逃げて了つたが、何れ捕手が來るだろう。來たつて構はぬ。この初公が一寸手を組んでただ一聲、ウンとやれば、何の事はない。ウンもスンも言はずに往生するのだ。ナンと神様は偉いものだらう」

高光彦「ヤア何事も神様のお蔭です。どうだ初さま、是から酋長や春さまを言向和はしておいて、白瀬川の悪魔退治と出かけたらどうだ。お前のウンの試し時だ」

初公「イヤ有難う、私は神力はないが神様の神力で天晴れ悪神を言向けて見ませう」

群集の中より現はれたる斧公は顔をあげて、

「ヤア初さまよ、お前は本當に偉い奴だ、よう變つたものだナ。昔は悪い男だつたが、義侠心に富んだ人だと町中の評判だよ。どうぞ俺にも其ウンを教へて貰うて呉れぬか。お前が宣傳使のお伴をして此町を立退くとなると、後が寂しいからのう」

初公「それもそうだ………モシモシ、蚊取別の宣傳使様、此斧公にも許してやつて下さいナ」

蚊取別「私が許すのぢやない。三五教の教が有難いといふ事が分れば、神様が直接に御神徳を授けて下さるのだ。モシモシ斧さまとやら、神様は「おの」ぞみ次第、「おの」おのの身魂相應の御用を仰付けられるのだから、十分に魂を研きなさい。初さまが此町に居るとお前達は氣を許してもたれる氣になるから可かない。初さまが此町を立去つたが最後、皆の心が引締り、人を杖に突くといふ依頼心が

なくなつて了しまふ。さうすれば力ちからと頼たのむのは神様かみさまばかりだ。そこにならぬと御神力ごしんりきは與あたへて下くださらぬ。マア安心あんしんして大神様おほかみさまを信仰しんかうしなさい。天下てんかの宣傳使せんでんしは決して嘘うそや掛値かけねは言いはぬ。お前まへさまは初公はつこうさまの代かはりになつて、町まちの者等ものらを守まもつてやつて下ください。』

斧公おのこう『有難ありがたう御座ございます。何分宜なにぶんよろしく……』

と頭かしらを地ちに着つけ涕泣ていきふし居ゐる。いよいよ四人よにんの宣傳使せんでんしは初公はつこうを伴ともなひ、酋長しゅうぢやうの館やかたを指さして進すすみ行ゆく。

(大正一一・三・六 舊二・八 松村眞澄録)

第五章 初貫徹〔五〇一〕

天地あめつちの神かみの稜威みいづも高光彦たかてるひこの

神かみの命みことや神直日かむなほひ

玉光彦の宣傳使

大海原の國光彦の

神の命や蚊取別

初めて三人、四人の

教傳ふる神司

初公一人を伴なひて

イホの都と聞えたる

十握の劍、エジプトの

夏山彦の酋長が

館を指して出でて行く

春とは言へど天津日の

光無ければ庭前の

花も開かず木の縁

色も褪せたる寂しさに

不安の雲は内外を

包むが如く見えにけり。

一行五人は宣傳歌を歌ひ乍ら門前に進み來たり。

初公「オイ、夏山彦の門番、宣傳使の御出でだ。早く此門を開いて呉れ」

この聲に門番は中より、

「朝早うから、碌に夜も明けて居らぬのに、門を開けとは何處の奴だ。規則を知らぬか。この門は明け八つにならぬと、明けぬのだぞ」

初公「コラ、寢呆け奴め、明け八つと言ふ事があるか、明け六つだ。貴様は何時
も八つ時までグウグウ寝て居るのだらう。そんな事で門番が勤まるか」

門番「矢釜しう言ふない。俺の目は未だ引き明けにならぬのだい」

初公「夜が明けて居るのに、グウグウ八兵衛と寝る奴があるかい」

門番「眠たいから目を「明け六」つかしいのだよ」

初公「六つかしい理窟を言はずに早く開けぬかい」

門番「お日さまもお上りなさらぬのに、門を開けると言ふ事があるか。百日ばかり

りお日様は拜めた事が無い。日輪様でも雲の布團を被つて悠乎寝んで御座るのに、

人間がバタバタとしたつて何になるか。天地を以て教となし、日月を以て經とす

るのだ。お日さまの寝むで御座る間は寝むが當然だ」

初公「エー矢釜しい、開けぬか。初さまを知らぬか」

門番「誰かと思へば權太郎の初公だな。そんなら仕方が無い、初門を開いてやら

うかい」

初公「【初物】喰ふと七十五日長生するのだ。貴様も果報門だ、仕合せ門だ、偉

い門だ、怠けた門だ、困った門だ、仕方無い門だ、土倒し門だ。厄介門だ」

門番「コラ初公、そんな事を言ひよると、開ける事はやめたぞ」

初公「すつた、【もん】だと小理窟を吐かさずに開けれやよし、開けな開けぬでも良いワイ、俺が叩き割つて這入つてやるわ」

高光彦「コレコレ初さま、詔り直しだ」

初公「エー、へー【詔】り直す處か、グズグズ言つて開けないなら、此門を向ふへ乗り越えて、門番の背中に馬乗りとなつて、ハイハイドウドウだ。馬の合うた者同士、旅をするのは【同道】だが、馬の合はぬ奴を馬にして、尻を叩いて

【堂々】と館の中へ進入するのですワ」

蚊取別「アハ、ハ、ハア、此奴、初公、掘出し【もん】だ。中々面白い事を言ひ

よる」

初公「【ほり】出し【もん】とは非道いぢやないか。俺だけ門から放り出すと言

ふのか。之から初さまが初門を開いて【ほり】入り大根ぢや、風呂吹き門だ」

と言ひ乍ら握り拳を堅めて門扉を無性矢鱈に打ち殴る。中より又もや一人の門番

現はれて、

「オイ、貫公、貴様は夜も明けぬのに、何をカンカンと吐いてけつかる」

貫公「誰かと思へば鐵か、貴様もよう寝る奴だナア。然し初公の奴めが何だか、

四五人の宣傳使を連れて來よつて此門を開けと、俺の名ぢやないが、「瘡」聲を

出しよつて、門を「カンカン」叩いて居よるのだ。俺は何と言つたつて此門は開

「かん」開かんと頑張つて居る處だ。貴様は堅い名だから、一つ初公が門を叩き

破りよつた時には鐵槌を下すか、鐵拳を喰はすのだよ。貫と鐵と寄つて、彼奴等

の目的を貫徹させぬ様にするのだぞ」

斯く言ふ間、傍の扉を乗り越えて飛鳥の如く初公は飛び込むで來た。

初公「オイオイ、貴様等はよほど意地の悪い奴だナ、何故開けないのか」

貫公「ハイハイ、開けます開けます、勘辨して下さい」

鐵公「【てつ】頭【てつ】尾誠に以て悪う御座いました」

初公「早く開けぬかい」

二人はブツブツ小聲に呟き乍ら門を取り外し、門扉を左右に開き、

貫公くわんこう「ヤ、誰方どなたが知りませぬが、門もんは開あけましたが這入はいつて貰もらふ事は出で来きませぬ。一寸御主人ちよつとごしゆじんに伺うかがつて來くるまで、此處ここに待まつて居ゐて下ください」
蚊取別かとりわけ「何なんと念ねんの入いつた門番もんばんだナ。ア、仕方しかたがない、早はやく問とうて來きてくれ。三五あななひ教けうの宣傳使せんでんし、而しかも色いろの白しろい立派りっぱな蚊取別かとりわけと言いふ宣傳使せんでんしが特とくに目立めだつて御立派ごりっぱだ、面會めんくわいがしたいと仰おつしや有あるから如何致どういたしませうと伺うかがうて來くるのだぞ」

貫公くわんこう「ヨシ、分わかつた」

と言いひ乍ながら尻しりを振ふりつつ奥おくへ進すすみ入いる。

貫公くわんこう「モシモシ御主人ごしゆじんさま様、ただいま門前もんぜんに宣傳使せんでんしが現あらはれました。案内教あんないけうだとか、新内教しんないけうだとか、金かねない教けうだとか、穴無あなない教けうだとか、何なんでもないの付つく宣傳使せんでんしが、しかも四人しにんですよ」

夏山彦なつやまひこ「困こまるな、死人しにんの亡者まうじやを俺おれんとこの門前もんぜんに持もつて來こられては、朝あさつぱらから縁起えんぎが悪いわるい」

貫公くわんこう「亡者まうじやとか行者ぎやうじやとか言いふ奴やつが門口かどぐちに立たつて居ゐて、大おほきな眼めを剥むいた色いろの白しろい墓取別はかとりわけがやつて來きました」

夏山彦「ますますもつて怪しからぬ。箒でも持つてよく後を清め、箱に入れて、墓へ厚く葬つてやれ」

貫公「それでもなかなか強相な奴で、私らの梃子には合ひませぬ。高張りぢやとか、火の玉ぢやとか、國光ぢやとか、難かしい名のついた亡者ですぜ。夏山彦に面會がしたいと、「ゆふ」、ゆふ、ゆふ禮儀知らずです」

夏山彦「幽霊にしては餘程しつかりした奴だな」

貫公「イーエ、幽霊どころか、大變強い奴です。三五教の宣傳使だとか言つて門の外に御主人様のお許しを待つて居るのです、箒を持つて掃き出しませうか」

夏山彦「お前の言ふ事は、何が何だか、チツトも分らぬ。鐵公を呼んで来てくれ」

貫公「鐵を呼んで来れば二人で意味が良く「貫てつ」致しますだらう」

夏山彦「馬鹿」

貫公「何だか手強い奴だから、御主人様一寸来て下さらぬか」

「ア、弱い門番だ。仕方が無い、行つて見よう」

と言ひながら夏山彦は衣紋を整へ悠々として門前に現はれ來り、宣傳使を見るよ

り兩手をついて、

「ヤア、貴方は昨夜御目に懸つた宣傳使様、よう訪ねて来て下さいました。貴方のお蔭で危い處を助かりました。サアどうぞ奥へお這入り下さいませ」

四人の宣傳使は、叮嚀に答禮をしながら夏山彦の案内につれ、奥深く姿を隠しける。

貫公「今のは何だい。内の大將奴がペコペコと恐相に高い頭を下げて安賣をしやがつて「サア御案内を申しませう」なんて、一體全體貫ちゃんも勘考がつかなくなつて来たワイ」

鐵公「「つかん」もあるものか、三五教の宣傳使に定つて居るわ。貴様は此處の主人を何と思つて居る、立派な三五教の信者ぢやぞ」

貫公「馬鹿言へ、ウラル教だよ」

鐵公「それだから貴様いつまでも門番をさされるのだよ」

貫公「門番々々て偉相に言ふな。貴様も門番ぢやないか」

初公「アハ、ハ、ハ、ハ、三五教の新宣傳使、初彦さまとは俺の事だぞ。ぐづぐづ言

うとウーンぢやぞ、ウーンと氣張つてやらうか」

貫公「ウーンと氣張るなんて、汚い事を言ふな。貴様はな、一つ奮發せいと言へば雪隠穴を跨げて尻を捲るといふ代物だし、ちつと世間を見て来いと言へば、屋根に梯子をさして棟まで上つてキリキリ舞をして、其處等を口と目とを一緒に開けて一廉世間を見た様な面をする連中だから、碌な事ア言やしない。貴様がウンならば俺はブンぢやぞ」

と片足あげてブンとやる。

鐵公「アハ、ハア、ハア、」炬燵から猫も呆れて飛んで出る」といふ奴だナ。鼯の

親方奴が。オイ、サアサア、するならジツとしとれ」

貫公「出もの、腫れもの、處嫌はずだ。平和文武の神、アー臭大明神、御神體は

風の神ぢや。有難く頂戴せい」

初公「ヤア、貴様の屁放り蟲にかかりあつて居たので、肝腎の宣傳使に後れて仕

舞つた。サア大變だ」

と尻ひつからげ奥をさして走り行く。

二人の門番「ア、怪」體な空ぢやないか。そして今日はまた「怪」體な日だ。日だと言つてもお日様の姿も拜めないとすれば、やつぱり夜だ。「怪」體な夜だ」

サツと一陣の暴風吹き来るよと見る間に、電光天に閃き、雷鳴はげしく轟き渡り、二人はたちまち臍を押へて其場にドツと尻餅をつき、ブルブル震え居る。

（大正一一・三・六 舊二・八 北村隆光録）

第六章 招待（五〇二）

四人の宣傳使は夏山彦の案内に連れ奥の間に請ぜられ、間もなく鄭重なる馳走は運ばれた。夏山彦は恭しく一同の前に現はれ來たり、

「貴方がたは我が信ずる三五教の宣傳使様、かかる見苦しき荒家を、よくもお訪ね下さいました。何卒ゆつくりと御飯を召し上つて、お話を聞かして下さいませ」

蚊取別「ヤアこれはこれは、思ひがけなき御馳走、恐れ入つてござる。その恐れ

れると云ふ事を聞きまして餘程我々も心強くなりました。こんな常闇の世の中になつて來たら到底人間の力でどうする事も出来ませぬ。神様のお力を借りるより道はありますまい」

夏山彦「仰せの通りです。しかし困つた事には筑紫の島の豊の國を流れる白瀬川の六つの瀧に大變な惡魔が現はれて、其處から黒雲を起し妖氣を立て、數多の人民を苦しめます。どうかして之を言向け和したいものですが、我々の力には到底およばないと斷念して、一日も早く神力の強い宣傳使がお出になつて言向け和して下さるやうと、朝な夕な神様に祈つて居ました。その甲斐あつて今日は結構な宣傳使が、しかも四人連れ、この荒家にお越し下さつたのは、全く神様の尊き御恵み」

と言ひながら落涙に咽ぶ。

高光彦「ともかく惡魔退治の前祝ひとして一同打ち揃うて宣傳歌を歌ひませう。

サアサア蚊取別さま貴方から歌つて下さい」

蚊取別「よろしい、あまり私の聲は聞え過るので惡魔が瀧から逃げると困るから、

高光彦「モシモシ蚊取別さま、そんな宣傳歌がありますか、奥さまのお惚けは止めて貰ひませうかい」

蚊取別「ヤア、あまり堅苦しい事を云ふと肩が凝る。マア一寸お愛想に白瀬川の悪魔を誤魔化すために歌つて見たのです。肝腎要の宣傳歌は正念場にならぬと出せませぬ。それよりも高光さま、貴方も飛び切り上等の言霊を出して歌つて下さいナ」

初公は、「又ツ」と此場に現はれ来り、

初公「ヤア皆さま、遅刻致しました。遅刻した罰金に「ホヤホヤ」の宣傳使に一ツ歌はして下さいませぬか」

高光彦「ヤアよい處へ助け船が来た。初さまどうぞ頼みます」

初公「宣傳歌も今日が本當の初ですから彼方へ「はっ」れ此方へ「はっ」れ「はっ」はつするやうな事を言ふかも知れませぬ。膳もつて椀もつて箸もつてお断り申して置きます」

蚊取別「コラコラ脱線するな。直に喰ふ事を云ふから困る。ちと眞面目にならぬ

初公^{はつこう} 「ハイハイ、確^{たしか}に承知^{しょうち}仕^しりまして御座^{ござ}いますで御座^{ござ}います」
 蚊取^{かとり}別^{わけ} 「アハ、ハ、ハ、ハ、まする、ますると、ますます可笑^{おか}しい胡魔^{ごま}する男^{をとこ}だなア」
 初公^{はつこう} 「初^{はつ}にお聞き^きに達^{たつ}しまする宣傳^{せんでん}歌^かの儀^ぎは、まづもつて左^さの通^{とほ}りで御座^{ござ}いまする。」

「イホの都^{みやこ}の主宰^{つかさ}神^{がみ}

夏山^{なつやま}彦^{ひこ}の酋長^{しうちやう}は

人^{ひと}の頭^{あたま}を春^{はる}公^{こう}と

共^{とも}に参^{まゐ}つた神^{かみ}の前^{まへ}

鱒^{とせい}のやうに人^{ひと}を見^みて

酒^{さけ}で殺^{ころ}そと甘^{うま}くない

酒^{さけ}をどつさり持^もつて來^きて

飲^のめよ騒^{さわ}げよ歌^{うた}へよ舞^まへよ

酔^ようて管^{くだ}まけ改^{かい}心^{しん}せいと

何^{なに}を云^いふやら分^{わか}らない

町^{まち}の奴^{やつら}等は業^{ごふ}煮^にやし

泣^なくやら笑^{わら}ふやら怒^{おこ}るやら

飛^とんだり跳^はねたり舞^まひ狂^{くる}ひ
 酔^よが廻^{まは}つてそろそると

人^{ひと}の頭^{あたま}を春^{はる}公^{こう}に
 お米^{こめ}を出^だせと強^ね請^だつたら

何ぢやかんぢやと頭ふる
此處へ出て来た蚊取別

澁「かみ」さまのやうな顔
服装に似合ぬよい聲で

歌を歌つて面白く
兩手を組むで指先で

ウンと一聲初さまも
町の奴等も一時に

化石のやうな靈縛り
これや耐らぬと各自が

目をむき鼻をむくひまに
夏山彦の酋長や

春公の奴が飛んで逃げ
サア仕舞つたと思ふうち

この三人が現はれて
ウンとも云はず蚊取別

皆の體をぐにやぐにやに
舊へ返して呉れた故

此初さまも驚いて
四人の方の供となり

漸う此處へやつて来た
サアこれからはこれからは

神の神力身に受けて
白瀬の川の六つ瀧に

障る魔神を悉く
天地の神の言靈に

伊吹拂うて世の中の
曇りや塵を掃き清め

あま
天の岩戸を押し開き

いかい手柄をたててやる

これが初公の第一の

あとさき
後前にない楽しみぢや

かみ
神が表に現はれて

ぜん
善と悪とを立て別ける

このよ
此世を造りし神直日

みたま
御霊も廣き大直日

なほひ
直日の神の御教を

いか
如何なる悪の曲神も

き
聞いたら往生せにや止まぬ

サアこれからはこれからは

ふ
吹いて吹いて吹き捲り

てんち
天地を清めて神の世に

はじ
初めて澄ます初さまの

ゆくすゑ
行末こそは頼もしい

ゆくすゑ
行末こそは頼もしい

しちじふごメートル
七十五米の風じやもの

いちどう
一同は初公の手つきの可笑しさに腹を抱へて笑ひこける。

せんでんし
宣傳使一行は初公を従へ、夏山彦に別れを告げ、白瀬川の一の瀧さして勢込ん

すす
で進み行く。

(大正一一・三・六 舊二・八 加藤明子録)

第七章 覺醒（五〇三）

四人の宣傳使は初公を従へ、イホの都を後にして七十五聲の言靈の、スエズの地峽を打渡り、神の教を四方の國、青人草に白瀨川、一の瀑布の間近き山に着きにけり。只さへ暗き春の日は愈暮れて咫尺を辨ぜぬ眞の暗なり。虎、狼、獅子の咆哮する聲は谿の木魂を響かして次第々々に近づき來る。

蚊取別「サア、かうなつては足許も眞暗がりだ。明日は大決戦をやらねばならぬから、此木蔭で、ゆつくりと休息をして元氣を養ふ事としようかな」

一同は首肯しながら暗の木蔭に腰を下し、蓑を敷きて横はつた。四人の宣傳使は晝の歩行に勞疲れて、何れも雷の如き鼾をかいて寢て居る。猛獸の聲はますます激しくなつた。初公は耐らず蚊取別を揺つて、

初公「モシ蚊取別さま、起きて下さらぬか。だんだん變な聲が聞えて來るから」
蚊取別「アア、やかましい、貴様恐いのだらう。強さうなことを云つても實地に臨むと正體が現はれるナア。斯ういふ時に大聲で宣傳歌を歌へば好いのだよ。」

しかし大きな聲だと俺達の安眠の妨害になるから、貴様一人口の中で宣傳歌を歌つて居れ。足下に何が來ても噛みはしない。八釜敷う言ふな、もう戌の刻だから
初公「偉いお邪魔をしますなア。マアゆつくり休んで下さい。アーこれからこの初さまが宣傳歌で猛獸の千匹萬匹は、ウンと吹き飛ばすのだ。しかし大きな聲を出すなと云つても、猛獸の奴短兵急に襲撃した時には、力いっぱい大聲を出すからそれ丈け承知して居つてもらひます」

蚊取別「ヨシヨシ、承知した。貴様もいい加減に寝まぬか」

初公「やすめと云つたつて、目がさえて寝まればしない」

蚊取別「此の日の長い夜の短いのに、ぐずぐずして居ると夜が明ける。マア寝まして貰はうかい」

と又もやゴロンと横になり、雷の如き鼾をかく。猛獸の聲は山嶽も揺ぐ許りに猛烈になつて來た。初公は獨言。

「ア、何と、宣傳使と云ふものは肝玉の太いものだなア。向ふの瀑には大蛇の悪魔が居る、猛獸が唸り立ててやつて來る。それにも拘らず、安閑として高鼾をか

いて居るとは呆れたものだ。ヤー俺も一つ肝を放り出してやらう、恐いと思ふから恐いのだ。なーにチツト荒い風が吹いて居ると思へばいい。獅子でも虎でも、狼でもいくらなつと唸れ。サ、俺も寝よう」

と肱を枕に横はる。又もや初公は起き上り、

「ヤー、どうしても寝られぬ。何んでも此奴は大蛇の奴が、魅入れて居やがるのかも知れぬぞ。決心した以上は恐くも何んともないから寝られぬ道理がないのだ。目もいい加減に疲勞れて居る。ア、惟神靈幸倍坐世、惟神靈幸倍坐世。どうぞ私に命が惜いと云ふ執着心から放さして下さいませ。惟神靈幸倍坐世」

蚊取別「ア、折角寝たと思へば耳のそばで八釜敷う云ふものだから又目が開いた。早く寝ぬかい」

と又もやグレンと横になりて高躰をかく。

初公「なんと妙な男だ、もう寝て了つた。エーこの闇の夜にアタ淋しい。チヨツ、ジツとして居れるかい。何ぞ其處らに落ちて居らぬかなア」

と言ひながら四つ這ひになりてそこらを掻き捜す。忽ち手に觸れたのは、麻の繩

である。

「ヤアこいつは麻の縄だ。誰がこんな所に落して置きよつたのか。而も新しい奴だ。オーこれで蚊取別の髪の毛を縛り、八方に別けて木に繋いで置いてやらう。餘り叱りよるから業腹だ」

とそつと蚊取別の鬢髪をさぐり、

「ヤーしまつた。ハアこいつは禿蝟土瓶天窓だ。」

「禿頭前にとりみはなけれども 奥にしよんぼり髪がまします」

か、ア、こいつを繋いでやれ。しかしこんなに薄い毛は抜けると困るから、腰のまはりをグツトしめて、四方八方の木の株に繋いで置いてやらう。さうしてワイワイと云つて目を覺ましてやると面白からう。さうなとして夜を明かさな辛抱も出来たものぢやないワ」

と云ひながら蚊取別の腰の廻りに縄を持って行く。

「イヨ、よう寝て居やがる。偉さうにほざいても寝た時は、仕様もないものだなア。科人か何ぞの様に縄付にせられよつて、白河夜船を漕いで居る。ア、さう

だ夜船の綱だ」

と腰を今や縛らむとする時、蚊取別は

「ウーン」

と寝返りを打つ。

「ヤア、びつくりした。起きたかと思つたら、なんだ寝返りを打ちよつたのだナ

つ」

「又もや括らうとする。蚊取別は、見當さだめて横つ面を、ビシヤビシヤとなく

る。初公は驚いて、

「ナ、何をするのだイ」

蚊取別「悪い事は出来ぬものだな」

「コイツは失敗つた。蚊取別さま、起きて居つたのか」

蚊取別「きまつた事だよ。一目も寝はしないよ、貴様の獨語は皆聞いて居る。馬

鹿な奴ぢやなア」

初公「アハ、ハ、ハ、ハ」

蚊取別「ワハ、ハ、ハ、ハ、」

高光彦は目を覺まし、

「この眞夜中に大きな聲で何が可笑しいのですか」

蚊取別「イヤもう初公の奴つたら、吾々の寝とる間に何處からか繩を探して來よつて、四人の體軀を一々縛つて木の株に括りよつたのですよ。貴方がたも何處か括られて居ませう」

高光彦「たとへ體軀の二箇所三箇所括られても、自由の精神は括られて居ないから大丈夫ですよ。アハ、ハ、ハ、」

と笑ふ折しも、頭上俄に赤く紅の如くに深林を照らすものがある。この光に對岸の白瀨川の一の瀑布は、白龍の幾十ともなく體を揃へて天に昇り行く如くに見えて來た。

蚊取別「ヤア瀑が見える、大變猛烈な光だ。妖怪變化の怪光であらうか、イヤイヤさうではなからう。日の出神の一つ火かも知れぬ」

と云うて居る其前に忽然と現はれた一柱の立派な神がある。蚊取別は一目見るよ

り大地に平伏し、

「ヤア、これは日の出神様、よくもお出下さいました。サアもうこれで大丈夫だ」

日の出神「お前達は此處を何處だと思つて居るか」

蚊取別「ハイ、白瀬川のほとり、一の瀑布の前だと思つて居ります」

日の出神「それは大間違ひだ。高山の如く見せて居るのは、世界第一の大蛇の背

だ、大地を放れて中空に舞ひ上つて雲の中に這入つて居るのだぞ」

蚊取別「それでも、イホの都からトントンと歩いて此處までやつて來たのです。

確に山だと思ひますが」

日の出神「サアそれが誑されて居るのだ。餘り鎮魂が好くきくと思つて、知らず

知らずの間に慢心するものだから、こんな目に逢ふのだ。お前が昨日訪問した夏

山彦の家を何んと思つて居る、あれは大蛇の尾であつた。その尾の上に氣樂に乗

せられて歌を歌つたり色々ものを喰はされて御馳走だと思つて居たのだ」

蚊取別は頭を掻きながら、

「ハテ、合點が行かぬ。何の事だ。確かに夏山彦の館だつたになア」

日の出神ひのののかみ「それが違ちがふのだ。一寸袖ちよつとそでを目めにあてて覗のぞいて見みよ」

蚊取別かとりわけ「その他の四人たよにんは袖そでを目めに當あて、四邊あたりを見みればコハソモ如何いかに、幾十里いくじふりとも知しれぬ、大蛇をろちの背せに乗のせられ遙はるかに高たかき空くうちう中に舞ま上あり、其尾そのをは今いまや地ち上やうを放はなれむとする時ときである。

蚊取別かとりわけ「ヤア、コリヤ大變たいへんだ。餘あまり慢心まんしんして天てんまで上のぼり詰つめて、眞まつ逆さか様に落おちて木葉微塵こつばみぢんになる所ところだつた。モシモシ日ひの出神のかみ様さま、我々われわれは此大蛇このをろちの山やまを否背いなせなを傳つたうて地ち上やうに降おります。これより上うへに昇のぼらない様やうに守まもつて下ください」

日ひの出神のかみは黙だまつて俯うつむく。一同いちどうは一いつ生懸命しやうけんめいに大蛇をろちの背せなを走はしりながら地ち上やう目めがけて降くだつて行ゆく。漸やうやく尾をの端はしに着ついた。尾をは既すでに地ち上やうを離はなれる事こと七八間しちはちけん、蚊取別かとりわけ「ヤア皆みなさま大變たいへんだ。地ち上やうまでは七八間しちはちけんも距離きよりがある。どうしよう、もう少すこし尾をを下さげてくれぬものかいなア。ヤアヤア、滅茶矢鱈めつちややたらに尾をを振ふり居をる。ヤア

ヤア大蛇をろちに振落ふりおとされるわ振落ふりおとされるわ」
高光彦たかてるひこ「だんだん高たかくなる一方いっぽうです。また天てんに上あげられ、中途ちうとから放ほうられては大たい

變へんです。サアみな手てをつないで飛下とびおりませう。ヤア、もう十間じっけんです十間じっけんです。こ

れぢや天てんにもつかず、地ちにもつかず、サアサア五人ごにんは手てをつないだ手てをつないだ
と云いつた儘まま、命いのちからがら山の頂上いただきめ目がけて飛とび降おりた。
途端とたんに驚おどろき靈れいより覺さめて見みれば、十四日じふよつかの月つきは高熊山たかくまやまの中ちうてん天てんに輝かがき、王仁おにの身み
は巖窟がんくつの前まへに仰あふむ向けに倒たふれ居ゐたりける。

(大正一一・三・六 舊二・八 谷村眞友録)

第二篇 天岩戸開あまのいはとびらき (二)

第八章 思出おもひでの歌うた (五〇四)

つきひの駒の關も無く
豊にめぐり如月の

かみこのかの今日の日は
稜威も高き高熊山の

かみいはやに誘はれ
五六七の御代を松岡の

はちすの山の御使
月早西に傾きて

かぜしづまり水さへも
子の正刻に賤の家を

そつと立出で道の奥の
人に知られぬ神國の

はなを折りし今日の日は
二十五年の時津風

いづの御魂や瑞御魂
教の光隈もなく

きよなが流るる小雲川
常磐の松生ふ川の邊に

そそり立ちたる【松雲閣】
いよいよ十二の物語

きよかみよの消息を
音無瀬川の川の瀬に

ながなが如くすすくと
滑り出でたる【蓄音器】

みづの御魂の開け口
梅を尋ねて鳥が啼く

あつまの遠き都より
瑞靈輝く【三光堂】

【松】の大【本】【常】久に 【三】五の月の御教は (松本常三郎)

圓滿清【朗】比ひ無く 綾の錦の【服部】の (服部静夫)

【静夫】の大人の計ひに 【谷】の戸開けて鶯の (谷廣賢)

聲も長閑に世を歌ふ 【廣】き【賢】き道の教

神【野】出【口】の【岩】の上に 榮え【吉】しき千代の【松】 (野口)

岩吉)

【本】の教の神【直】日 【枝】も鳴らさぬ神の風 (松本直枝)

海の内【外】に極みなく 【山】は【豊二】芽含みつつ (外山豊二)

花咲く春も【北村】の 天津御空に【隆光】る (北村隆光)

聖の御代を【松村】や 彌【仙】の山に現はれし (松村仙造)

木の花姫の御教を 【造】次顛沛村肝の

心に加けて【藤】つ代の 神代を【明】す物語 (加藤明)

【藤】の御山の高【津】神 教の道を永【久】に (藤津久)

傳へむものと【中】津國 【野】立の彦や野立姫 (中野祝)

聖きよき教をしへの太ふと「祝のり」詞と 宣のる言こと靈たまは「山やま」の「上うへ」

(山上郁太郎)

【谷たに】の底そこまで押おしつつむ 【村むら】雲も四方よもに吹ふき拂はらひ

(谷村眞友)

【眞まこと】の道みちの教のりの【友とも】 心こころの華はなも馥ふく【郁い】と

皇すめ大神おほかみの傳つたへ【太たらう郎】 日やま本と心こころの雄を心こころは

清きよく空むなしき仇あだ言ことを 一ひとり人も【岩いはた田た】の【久きう太たらう郎】

(岩田久太郎)

宣のる言こと靈たまは命いのち毛げの 筆ふでに任まかせて記しる行ゆく

今け日ふの生いく日ひぞ尊たふとけれ 南なかの辛かうとの酉とりの年とし

神かみの御み聲こゑを菊きくづき月つきの 中なかの八やう日かに神かむ懸がり

神かみの出で口ぐちの口くち開ひらき 誠まこと一ひとつとの靈れい界かいの

奇くしき神かみ代よの物もの語がたり 二ふたつとの卷まきの口こう演えんを

うまらに委つ曲まらに宣のり了をへて 闇やみ夜よも秋あきの神かむ祭まつり

事ことなく濟すみて萬よろづ代よの 基もと芽い出で度たき瑞ずい祥しやうの

やかたに到いたり名なも高たかき 高たか熊くま山やまに百もも人びとを

伴ともひ參まゐり岩いは屋や戸どの 貴うづの稜みいづ威を稱たへつ

神かみの集あつまる宮垣みやが内いち

わが故郷ふるさとを訪おとづれて

産土うぶすな神がみを伏ふし拜をがみ

名なさへ芽出めでた度たき龜岡かめをかの

教をしへの園そのに立たちかへ歸かへり

言葉ことばの華はなの開ひらけ口ぐち

瑞みづの身魂みたまに因ちなみたる

三みつの卷まきをば半なかばまで

録しるして歸かへる龍宮館たつやかた

黄金閣わうごんかくに向むかひたる

教主殿けつしゅやかたに三柱みはしらの

教をしへの御子みこに筆ふでとらせ

本宮山ほんぐうやまや四尾山よつをざん

峰みねの嵐あらしに吹ふかれつつ

吹ふきも吹ふいたり四よつの卷まき

いつかは盡つきぬ物語ものがたり

五いつの御魂みたまの五いつの卷まき

端緒いとぐち開あけて言靈ことたまの

速はやき車くるまに身みを任まかせ

千代ちよを岩井いはいの温泉場をんせんば

神かみの恵めぐみも暖あたたかに

廻めぐる「こまや」の三階さんがいに

五み六ろ七しちの居間ゐまを陣取ぢんどりて

五いつも變かはらぬ六むつまじく

六むつびて語かたる六むつの卷まき

師走しはす三十日みそかになりぬれば

心こころの駒こまのせくままに

足竝あしなみ早はやき汽車きしゃの上うへ

綾の高天に恙なく

歸りて述ぶる七つ巻

錦水亭に横たはり

四日の間に述べ終へて

壬戌の節分の

祭もここに恙なく

年を重ねて瑞祥の

再び館の人となり

祭すませて高熊の

峰に二百と五十人

誘ひ詣で神徳の

花開くなる八つの巻

九つの巻、十の巻

半ならず引返し

綾の高天の教主殿

奥の一間に横たはり

漸く胸も十の巻

芽出度く編みて竝松の

松雲閣に立歸り

七日の夕十一の

巻物語り相濟みて

思ひ出深き如月の

八日いよいよ十あまり

二つの巻に取かかる

斯る尊き神の代の

その有様の萬分一

一々筆に書きとめて

今日の生日を祝ひつつ

よびと 世人の爲に録すなり
ア、惟神々々
かむながらかむながら
みたまさち 御靈幸はひましませよ
ア、惟神々々
かむながらかむながら
みたまさち 御靈幸はひましませよ

(大正一一・三・七 舊二・九 外山豊二録)

第九章 正夢(五〇五)

とこよ 常夜ゆく暗を晴らして皇神の
すめかみ 神の
うづ 珍の御子たち助けむと
やみ 暗を晴らして
すめかみ 皇神の
うづ 珍の御子たち助けむと
かみ 神より受けし伊都能賣の
おほうなばら 大海原に漂ひて
たまたま 玉光彦の玉も照り
おほうなばら 大海原に漂ひて
くらはげ 海月なす國光彦の
みづの身魂の三柱は

イホの都の町はづれ
老樹茂れる森の下

露を厭ひて假枕
國魂神を祀りたる

祠の後に身を隠し
まどろむ折しも何處よりか

集まり來る人の影
神燈神酒を奉り

常夜の様を歎きたる
イホの都の酋長が

世人助くる手段さへ
夏山彦の神司

神の御前に太祝詞
唱ふる聲もいと清く

心の闇も春公の
倉あけ渡し食物を

神に誓ひて夫れぞれに
配り與へ饑渴き

救ふはいとど易けれど
靈の餌と充つるべき

教の餌に苦みつ
神の御前に諸人を

集めて諭す神の教
食物着物住む家と

酒より外に心なき
醜の身魂を如何にして

神を敬ひ長上に
尊び仕へ真心の

本靈もとつみたまにことごとく

立直たてなほさしめ天地あめつちの

神かみの御子みこたる務つとめをば

各おのも各おのもに盡つくさせて

神かみの怒いかりも淡雪あはゆきの

溶とけて嬉うれしき春はるの日ひの

花はな咲さき匂におひ百鳥もどりの

歌うたふ嬉うれしき神かみの代よの

日ひ月げつ空そらに輝かがやきて

鬼おにも探さぐめ女めもナイル河がは

瀧たきに洗あらひしその如ごとく

清きよめむものと酋長しうぢやうが

心こころ筑紫つくしの白瀨川しらせがは

世よ人を思おもふ真心まごころの

涙なみだは瀧たきの如ごとくなり

夢ゆめか現蚊うつつかとり取別わけて

言こと靈たま清きよき宣傳せんでん歌か

暗やみを透すかして鳴なり渡わたる

時ときしもあれや初公はつこうが

醜しこの雄健をとけび踏ふみたけび

狂くるふ折をりしも宣傳せんでん使し

雙手もろてを組くみし言靈ことたまの

其その一ひと聲こゑに肝打きもたれ

魂たま研みがかれて各おのが

惠めぐみも深ふかき皇神すめかみの

心こころを悟さとり服従まつろひし

その嬉うれしさに胸躍むねをどり

心こころ勇いさみて四柱よはしらの

神の命の宣傳使かみ みこと せんでんし
 伴ひ進む闇の路ともな すす やみ みち
 空も愈春公そら いよいよはるこう
 館を指して出て行くやかた ささ いて ゆく
 ここに五人の一行はこゝに ごにん いったかう
 腰打掛けて憩ふうちこしうちか いていこ
 脆くも此處に横はりもろもこ こよこた
 ナイルの瀧の森林にたき まがみ たき しんりん
 瀧の魔神をたき まがみ いちいち
 暗の木下に憩ふ折やみ こした いこ をり
 一行五人が心をばいっかう ごにん こころ
 大蛇の背より飛下りてをろち せな とびお
 つかつか来る夏山彦がきた なつやまひこ
 いと高々と聞え来る。たかだか きこ くる
 初めて會ひし初公をはじめて あい はつこう
 四方に塞がる村雲のよも ふうさ むらくも
 青葉も茂る夏山彦のあをば しげ なつやまひこ
 途中睡氣を催してとちう ねむけ もよほ
 露をも置かぬ草の上つゆ おお くさ うへ
 何時か睡魔に襲はれていつか すゐま おそ
 夜の更け行くも白瀬川よの ふゆ ゆく も しらせがは
 黎明を待ちて秋月のよあけ まて あきづき
 六つの瀧まで清めむとむつ たき きよ
 一つ火忽ち現はれてひとつ びたちま あら
 照させ給ふ夢の跡てら させ たま ゆめ あと
 腰を抜かせし束の間にこし ぬ つか ま
 率ゆる人数の足音はひき にんず あしおと

蚊取別「ヤア、エライ恐ろしい夢を見たものだナア。餘り知らず識らずの間に慢心して、大蛇の背中に乗せられ、雲の上まで引張り上げられて了つて居た。盲蛇に怖ぢずと云ふ事があるが、本當に目明の積りで、我こそは天下の宣傳使、世界の盲聾の目をあけてやらうナンテ偉さうに言つて歩いて居つたが、エライ怖い夢を見たものだ。コリヤきつと靈夢であらう、アア慢心はし易いものだナア。慢心は大怪我の本だと、何時も口癖の様に云ひながら、箕賣り笠でひると云うたへは自分等の事だ。人が悪いとか馬鹿だとか思つてゐると皆自分のことだ、これから一つ魂の焼直しをして掛らねばならぬワイ。吁神様有難う御座います。能く氣をつけて下さいました」

高光彦「蚊取別さま、どんな夢を御覽になりました。我々も恐ろしい夢を見ました。四方八方眞暗がり、秋月の瀧の前だと思へば、大蛇の背に乗せられて、エライ所へ鰻上りではなうて蛇上りに上つて【きつい】戒めに遭ひ、中天から飛びおりて、腰をぬかし本當に妙な夢を見ましたよ」

蚊取別「ハア、我々の夢と同一ですワ」

と聲をかすませ、首を捻る。玉光彦、國光彦、初公も異口同音に、

「私も其通りそのとおり」

と胸を轟かせ乍ら、小聲になつて首を頻りに傾けて居る。折柄の物音に前方を見れば、提燈の光瞬き、數十人の人聲此方に向つて進み来る。

初公「あの提燈の印は丸に十、たしかに夏山彦の酋長が手下の者共、愈初公さま

を召捕に來よつたな。ヨーシ、今迄の初公さまと思つて居るか、あまり我は、偉

い偉いと思つて居るとスコタン喰うぞよ。足許は眞暗がり、闇に烏のまつ黒々助、

夏山彦の家來の奴共、片つ端から「ウーン、ウーン」と阿吽の言靈、開くや否

や四方八方に、蜘蛛の子を散らすが如く、チリチリバツト、花に嵐の其如く、皆

散り散りに逃げて行く………」

蚊取別「コラコラ、何寢呆けてるのだ。あまりウーンに慢心をする、今の様な

怖い夢を見せられて、お警告を受けるのだぞ。ウーンも好い加減に使つて………」

亂用するとまた夢を見せられるぞ」

「モシ蚊取別さま、あれは夢だが、今そこへ來るのは現實ですよ」

蚊取りわけ 幻術でも、妖術でも、神術でも無暗に使ふものぢやないよ」

初公 「それでも、短兵急に押しよせて来た、この敵にムザムザと虜にしられようものなら、それこそ最早ウーンの盡だ。運の盡きる迄一つ、ウンウンを行つて行つて行き倒し、運を一時に決せむだ。サア来い勝負………」

高光彦 「アハ、ハ、ハ」

初公 「笑う所が大變ですぜ。あの提燈を御覽、丸に十だ」

高光彦 「丸に十なら結構ぢやありませんか、三五教の裏紋だからな」

初公 「裏紋教でも、表教でも、大本でも、かうなつては最早百年目、自由行動と出ますから、あなた方四人の御方はジツトして、この初公の八ッ人藝を御覽なさい。一人でハッ人ぢや、初夢の初功名、神力ハッ展の初舞臺だ」

蚊取別 「コラコラ、さうハッやぐものぢや無い、ハッかしい事が後になりて出て来るぞよ。神の申す間に聞かぬと、我で致したら失敗るぞよ」

斯かる所へ早くも夏山彦の一隊は徐々と現はれ來たる。

初公 「ヤア、寄せたり寄せやがったりな。我れこそはイホの都に隠れなき初公さ

まだ。召捕るなら美事召捕つて見よ。小癩に構ふ汝等が振舞、【儘】になるなら、
麥飯、稗飯、粟飯、五もく飯、米の飯、サア勝手にメシ取つて見よ

蚊取別「アハ、ハ、ハ、ハ」

三人「ワツハ、ハ、ハ、ハ」

群衆中より立派な姿をした二人の男、蚊取別の前に悠々と現はれ、

「ヤ、あなたは蚊取別の宣傳使様、………御一同様、私等は夏山彦、春彦でございます。どうか此駕籠に御召し下さいまして我々が矮屋に一夜御逗留を御願申し
たく、態々御迎へに参りました」

初公「ヤア、ナインだ、天が地となり、地が天となる、變れば變る世の中だ。オ

イオイ其駕籠は大蛇の背中とは違ふか」

夏山彦「ヤア、お前は初公か、我々は蚊取別その他三人の宣傳使様に御挨拶申上

げて居るのだ。横間から喧しう申さずに、暫く待つて居て呉れ」

初公「ヨ一シ承知した。併し駕籠は四臺よりないぢやないか、初公さまの駕籠は

後から來るのかい」

春彦 『生憎四臺よりありませぬので一臺………』

初公 『オイオイ、四臺よりない？………何と情なきシダイなりけりだ。一【だい】

のテレ臭い恥曝しだワイウフ、』

蚊取別 『折角の思召無にするも何となく心許なく思ひますが、我々はさ様な贅澤

な駕籠などに乗ることは出来ませぬ』

初公 『ヤア今あまり調子に乗つて、ウンウン氣張ると云つて、ウンが増長して高

い高いコクウンの中までおつぽり上げられ、スツテンドウと地上に眞逆様に墜ち

て、腰を折つた夢を見よつたものだから………そんな俄に殊勝らしい事を仰せら

れるのだ。恰度それならそれで都合が良いわ。三人の宣傳使様と此初公さまと四

人乗せて貰はう』

玉光彦 『私は駕籠は平に御免蒙ります』

國光彦 『我々もその通り』

初公 『拙者も同様、駕籠は平にお断り申す』

群衆の中より、

「コラ初公、貴様がお断り所か、頼んだつてコチラからお断りだよ」

夏山彦「折角の志、どうぞお召し下さいませ」

蚊取別「イヤ又尾の先から振落ちねばならぬと困るから、乗物は平にお断り申します」

初公「モシモシ蚊取別さま、どうやら此處も大蛇の背ぢやあるまいか、足許がツルツルするぢやないか。夏山彦の宅で御馳走を戴いたと思へば、牛糞か馬糞か、譯の分らぬ物を食はされて、舌鼓を打つた夢を見た連中だから、この夏山彦も夢の中ぢやあるまいかなア」

蚊取別「夢でも何でもよいぢやないか。天は暗く月の光は無く、何れ悪魔の跋扈跳梁する世の中だ。斯う暗黒になつて來ると、誠の物は一つもないと思つたら落度はない。マア夢でも化物でも何でも構はぬ。刹那心だ、行く所迄行かうかい」と一行五人は夏山彦以下群衆に迎へられて、今度は愈夢でもない、幻でもない、曲神の館でもない、正真正銘の夏山彦の館へ着いたのである。

正門は左右に開放され、門内は薄暗けれど、塵一本なき迄に清く箒目正しく、

掃除が行届いて居る様子である。表門の入口より一間巾程の麗しき眞砂は敷詰められ、一行を歓迎した酋長の眞心は此砂路にも現はれ居たりける。

初公「ヤア是は一遍通つた。門と云ひ門番の貫公、徹公の臃ながらも顔と言ひ、玄關の様子、一分一厘間違ひのない仕組だ。コラ又夢だらう、……オイオイ蚊取別さま、一寸私の頬べた捻つて見て呉れぬか、自分がひねつたのでは、夢か夢ぢやないか明瞭せない……アイタ、、あまり酷い事すな、鼻を捻上げよつて

………

蚊取別「捻つて呉れと云ふから、注文通り捻つてやつたのだ。貴様の鼻はあまり低いのと横つちヨに着いとるものだから、頬邊だと思つて捻つたのだ。【はな】はなもつて見當の取れぬ面付だなア」

初公「本當にさうだ、ケントウがとれぬワイ。提燈は取れても、軒燈は高い所に吊つてあるから、俺の様な背の低い者では、一寸取り難いなア」

蚊取別「今度は夢ぢやない、本當だ」

初公「本當か嘘か、蚊取別さまのお言葉もあまり當にはなりません。一つ此

處で一か八かぢや、眞偽を確めて見よう」

と言ひ乍ら、初公は腕を振り、ドシドシと奥の間に進み入り、

「ヤア、拙者は今日迄イホ村の侠客権太郎の初公と云つたは世を忍ぶ假の名、元

を糺せば聖地エルサレムに於て、行成彦の従神たりし行平別命、汝夏山彦八岐の

大蛇の片腕となり、白瀬川の大蛇となり、此イホの都に尻尾を現はし、我々に立

派な館と見せかけ、牛糞馬糞を馳走と見せかけて食はさうと致す其計略は、前以

て承知の拙者、サア尋常に白状致せばよし、白状致さぬに於ては、十握の寶劍を

以て寸断にするぞ」

と大音聲に呼はつて居る。夏山彦は此聲に驚きて此場に走り來り、

「ヤア、誰かと思へば初公ぢやないか、何だ大きな聲を出して………」

初公「大きな聲は俺の地聲だ。大蛇の化物ツ」

夏山彦「モシモシ宣傳使様、この男はどうかして居るのでせうな」

蚊取別「イヤどうもして居りませぬ。一寸副守護神が乗り憑つて、譯もない事を

吐ざくのですよ」

初公「ナニ、副守護神だ！馬鹿にするない。フクはフクだが世界の福を守護する七福守護神だぞ」

蚊取別「雑巾持たしたらそこらをフク守護神、雪隠へ行つても、碌に尻丈は拭かぬ守護神、法螺ばつかり吹く守護神だ。蟹の様に泡を吹く守護神、熱も吹く守護神だ。アハ、ハ、ハ」

夏山彦「御一同様、お疲労で御座いませう。どうぞ緩り、日の出の頃まで未だ夜が御座います。此頃は日の出と言つても、日輪様のお姿は雲に包まれて拜ませぬが、ここに一つ燈を点して置きますから、ゆつくり御飯でも召上つて、今晚は

お休み下さいませ。明日ゆつくりお目にかかりませう」

初公「それ見よ蚊取別さま、初公の目は黒いものだ、やつぱり大蛇の背だ。日の出神だとか日の出だとか、一つ火とか言うたぢやないか」

蚊取別「此奴まだ夢見てゐる、困つた奴だナア」

とまた鼻を力限りに捻ぢ上げる。

初公「イ、ハ、ハ、イツタイ、蚊取別、フニヤ フニヤ フニヤ、ヘタイ ヘタイ

へタイ　へタイ、ハヤセ　ハヤセ　ハヤセ　ハヤセ

蚊取別かとりわけ　アハ、ハ、ハ

初公はつこう　「あまり人を馬鹿ばかにすな。此この好い男をとこつ振ぶりを鼻はなを引延ひきのばしよつて……天狗てんぐの様やう

になつたぢやないか

蚊取別かとりわけ　「ヤ、是これで「へつこむだ」鼻はなが延のびて調和てうわが取とれた。ハナみやこの都みやこの初花はつはな姫ひめの

様やうな、立派りつぱな顔かほになつたよ

この時とき奥おくの間まより、嚙りつりやう曉やうたる一いち絃げん琴きんの音おと幽かすかに聞きえ、女め神がみの歌うた心こゑ聲こゑ、蚊取別かとりわけの

耳みみに特とくに浸しみ込こむ様やうであつた。蚊取別かとりわけは首くびを傾かたむけ乍ながら手てを組くみ、

蚊取別かとりわけ　「ハテなア」

（大正一一・三・九　舊二・一一　松村眞澄録）

第一〇章　深夜しんやの琴こと（五〇六）

夏山彦は一同に向ひ、

「最早夜も深更に及びましたれば、緩りと御寝み下さいませ。また明朝、緩々と御話を承はりませう」

と一同に會釋し一閒に姿を隠した。

初公「蚊取別さま、この度は夢ぢやなからうなア。アイタ、、、」
蚊取別「アハ、、、矢張り痛いかな、痛けりや本當だ。安心して寝むだら宜からう」

初公「あの一絃琴の音はどうだ。小督の局が居るのぢやなからうかな。」

「峰の嵐か松風か、戀しき人の琴の音か、駒を留めて聞くからに、爪音しるき想夫憐」

と云つた奴だナア」
蚊取別「馬鹿云ふな。夫れは何十萬年未來の世の出來事だ。今は天の岩戸隠れの

神代だぞ」
初公「過去現在未來を一貫し、時間空間を超越するのが神界の經綸ぢやないか。」

己が斯うして夏山彦の館に一絃琴を聞いて彼是噂して居た事を何十萬年の未來の世の狂人が、靈界物語だと云つて喋べる様になるのだ。是も神界の仕組だよ。さうだから、ちつとでも今の間に善い事をして未來の人間に持て囃される様にならねば困る。天の岩戸開きの神業に奉仕するのは、末代名の残る事だ。それを思うと一分間でも無駄に光陰を費やすと云ふ事は出来ないワ」

蚊取別「喧しう云はずに寝る時分には寝るものだ。最早子の刻だ。三人の宣傳使が御疲れだから、貴様一人寝るのが厭なら、門へ出て其邊を迂路付いて來い」

初公「子の刻だから寝ると云ふのか、妙なコチツケだな」

蚊取別「コチ付けでも何でもない。開闢の初めから定まり切つた言靈の規則だよ。戌の刻限は、人間の「いぬる」時だ。いぬるの言靈は寝るのだ。亥の刻限には「あ」と云うて休む時なのだ。「あ」も又寝るのだ。子の刻には「ねる」ものだ。戌子の三時は人間が一日の疲れをすっかり休めて華胥の國に遊樂する刻限だ、即ち寝る時だよ。十分體が休まつて、「ウー」「シー」となるると明日の働く元氣が身體一面に、「ウー」と張り切り「シー」と緊り、「ト」と尖つて芽をふき、

【ラ】ーと左旋運動を起す。それが寅の刻だ。丑寅の刻に元氣を付けて、【ウ】ーと太陽が卯の方に上る時に人間も起き出で、日天様を拜し顔を洗ひ嗽ひをし、身魂を清めてそれから飯を食ひ、辰の刻が来れば立つて働く。巳の刻が来れば、靈魂にも體にも、【み】が入つて一日中の大活動時機となる。午の刻になれば日天様は中天に上られ、人間の體も完全に靈と體との活用がウマク行はれるのだ。

【未】になれば火の辻と云うて、火と水との境目だ。それから段々下ると申の刻、そこから一面に水氣が下つて来る。酉の刻になれば一日の仕事【取り】纏べて、其邊中を取片付け、御飯を【とり】込んでまた神様にお禮を申し、皆揃うて戌の刻になると【いぬる】のだよ」

初公「お前は割とは難かしい事を知つて居る宣傳使だねえ」

蚊取別「根ツから葉ツから蕪から菜種迄、宇宙一切萬事萬端解決が着かねば、宣傳使にはなれないのだよ。牛の尻ぢやないが、牛の尻にならぬと世界を助け廻る事は出来ぬ。兔も角宣傳使が尤も慎むべき寅の刻、オツトドツコイ、虎の巻は何事も省ると云ふ事が一等だ、卯の刻ではない、己惚心を出してはならぬぞ。自分

は足らはぬ者ぢや、力の弱い者だ、心の汚れた者だ、罪の塊だと、始終心に恥ぢ、悔い、畏れ、覺り、省みる様にならなくては神様の御用は出来ない。「辰」と緯との機の仕組、神の因縁を良く諒解し、一方に偏らず、其眞ん中の道を歩み、「巳」の刻ではない、身魂を磨き身を慎み、身鼻眞身勝手は捨て改め、猥りに人を審判かず、心は穩かに春の如く、「午」の刻、否「うま」く調和を取つて神に等しき言靈を使ふのが本當の神の使だよ」

初公「蚊取別さまの御話で大體「甲子」(昨日)から隨いて歩いて、漸く「十二」分の「干支九」(會得)が出来た。然し一絃琴の音が益々冴えて来たぢやないか。寢よと云つたつて、琴の「音」に耳を澄まされ「子」る事は出来はしない。「こ

と」の外眞夜中過ての一絃琴だ。一言禁止する譯には行こうまいかな」
蚊取別「ハテナ、あの琴の音はどうやら、祕密が潜むで居るワイ。此處に來たのも何か神様の一つの絃に操られて來たのだらう」

一絃琴の音はピタリと止むだ。高光彦を始め初公は漸く眠りに就いた。蚊取別は一絃琴の耳に入りしより何となく胸騒ぎ、心落着かず眠り兼ね寢床の上に雙手

を組むで思案に暮れて居た。又もや微に聞ゆる琴の音、微かに歌ふ聲、蚊取別は眠られぬ儘に、琴の爪音を探りさぐり近付いて襖の外に息を殺し靜かに聞き入つた。一室に女の歌ふ聲、

世は烏羽玉の暗くして 黑白もわかぬ人心

此世の曲を天地の 神の伊吹きに祝姫

山の尾の上や川の瀬に 威猛り狂ふ曲神を

言向け和し宣り和め 神の恵みを四方の國

百人千人に白瀬川 言の葉車の瀧津瀬と

逸れど曇る世の中は 何の効果もナイル河

瀧の涙も涸れ果てて 緑の色も褪せにけり

夏山彦の神館 百日百夜のもてなしも

早秋月の瀧の水 乾くよしなき今の身は

生きて甲斐なき宣傳使 北光彦の媒介に

蚊取の別の妻となり
比翼連理の片袖も

今は濡りて濡衣の
乾くよしなき浅猿しさ

シナイ山より落ちかかる
秋月瀧に身を打たれ

醜の魔神にさやられて
神に受けたる玉の緒の

息も絶えなむ時もあれ
情も深き夏山彦の

貴の命に助けられ
病き悩む現身を

これの館に横たへて
朝な夕なの慈み

身も健かになりぬれば
愈此家を立ち出でて

天が下をば駆巡り
三五教の御教に

常夜の暗の戸をあけて
荒振る神や醜神の

魂照さむと思ふ間
思ひがけなき夏山彦の

貴の命の横戀慕
夫ある身も白瀬川

流す浮名の恐ろしく
操破らぬ祝姫

ア、さりながらさりながら
世人の口の怖ろしく

戸もたてられぬ我思ひ
義理と情にほだされて

操の松も萎れ行く
嗚呼如何にせむ蚊取別

夫の命が此噂
聞し召しなば如何にせむ

夏山彦は名にし負ふ
心目出度き貴の司

神ならぬ身の祝姫
夫持つ吾と知らずして

戀の小田巻繰返し
返し重ねて朝夕に

心の文を割りなくも
口説き給ふぞ悲しけれ

此の世を造りし神直日
心も廣き大直日

只何事も人の世は
直日に見直し聞き直し

世の過ちを宣り直す
三五教の守り神

百の神たち我胸の
暗き帳を引きあけて

心を晴らせ八重雲を
伊吹き被ひて日月の

光照らせ給へかし
蚊取別てふ背の君は

今は何處に荒野原
獨り苦しき漂浪の

旅を續かせ給ふらむ
逢ひたさ見たさ身の詰り

只一言の言靈の
夫の命に通へよや

峰の嵐や松風に
寄せて妾が琴の音を

夫の命に送れかし
夫の命に送れかし

と靜かに歌つて居る。
蚊取別は思はず、ウンウンと溜息つきながら足音高く我居
間に立歸り、四人と共に床の上にコロリと伏し、夜の明くるを今や遅しと待ち居
たりける。

(大正一一・三・九 舊二・一一 藤津久子録)

第一章 十一支〔五〇七〕

心の闇を照すなる

三五教の神司

祝の姫は神ならぬ

夫の命の次の室に

来りますとは白瀬川

一絃琴に村肝の

心の糸を繰返し

繰返したる小田巻の

静心なき瀧津瀬の

瀧津涙を拭ひつつ

便りも夏山彦の司

館の奥に身を忍び

忍び泣くこそあはれなれ

蟲が知らすか夏山彦の

貴の命も何となく

シナイ山より吹き下す

夜半の嵐に村肝の

心の空を亂されて

纏れかかりし戀絲の

解く由もなき太息の

つくづく思案に暮れにける

常闇の世とは云ひながら

曉告ぐる鶏の聲

四更五更と明け渡る

渡る浮世に鬼はなし

とは云ふものの今の世は

醜の波風嵐吹く

誠明志の神人の

尋ね來りし今日の宵
心にかかる村雲を
息吹き拂ひてスクスクと
神の心に立て直し
魔風戀風三五の
神の教に拂はむと
ムツクと起きて神の前
口を漱いで拍手の
音も畏く太祝詞
神の御前に白しける。

夏山彦 神が表に現はれて
善と惡とを立て別ける

わけて苦しき戀の闇
善も惡きも知りつれど

諦め難き戀絲の
纏れ絡みし胸の中

打碎かるる想ひなり
ア、皇神よ皇神よ

一日も早く片時も
疾く速く我胸に

潜む曲津を取り除けて
心雄々しき三五の

神の柱となさしめ玉へ
ア、惟神々々

靈幸はひましませよ

靈幸はひましませよ

我身一つの雲さへも

霽し能はぬ夏山彦の

心の空は時鳥

五月の闇に包まれて

黒白も分ずなりにけり

八千八聲萬づ聲

血を吐く思ひの祝姫

年にも似合はぬけなげさよ

荒野を渡り波を踏み

霜に堪へつつ世の爲に

教を開く雄々しさに

比べて我は彦神の

玉の御柱つれなくも

涙に暮るる腑甲斐なさ

情を知れる夜嵐の

吹きて我身の戀雲を

清く晴らせよ逸早く

八重に積みし戀雲の

暗の戸開き天津日の

光を照せ我胸に

光輝け我胸に

ア、惟神々々

神の靈の幸ひて

心の悩み胸の闇

科戸の風に吹き拂ひ

拂ひ清めよ天津神

國津神達八百萬

塵も芥も祝姫

心なさけの荒風を

我身に向つて吹き荒べ

戀の縛を吹き拂へ

戀の縛を吹きはらへ

と神前に祈願を籠め述懐を述べてゐる。蚊取別は又もやこの聲を聞きつけ、忍び

足に次の間に潜むで始終を聞き終り、溜息をつきながら、諸手を組み、暫し思案

に暮れけるが、聽て得も云はれぬ爽快なる面色に變つて、我居間に引返したり。

月日の影さへも見えぬ常闇の世と云ひ乍ら、夜は漸く明け放れたと見え、咫尺

を辨ぜざりし四邊はホンノリと朧月夜の如く明るくなりぬ。

蚊取別「サアサア、どうやら夜が明けたやうです。皆様お目を覺されてはどうで

すか」

この聲に驚いて一同ムツクリと起上り、

玉光彦「ヤア、緩くり寢まして貰ひました。どうやら夜が明けたやうですな。昨

晩は妙な夢を見ましたよ」

蚊取別 『また大蛇の背中から落つこちたのでせう』

玉光彦 『イエイ工決して決して。目出度い夢です。何でも八と云ふ字の付く美し

い宣傳使と、ナと云ふ字の付く立派な男と結婚をするし、カと云ふ字のついた宣

傳使が大蛇の尾から大地へ向つて、命からがら一足飛に飛下りた様な決斷心を以

て、其の八の字の付いた女を媒介をすると云ふ夢でしたよ』

蚊取別 『ハテナア』

と首を傾け思案に沈む。

初公 『モシモシ蚊取別さま。俺が寢眞似をして居れば、知らぬかと思つて、盗人

猫の様に、一絃琴の音を尋ねて、襖をスーと開け息を殺し、右の足からソロリ、

左の足からソロリ、ソロリ、ソロリと幽霊の夜這人の様に、琴主の次の

間迄行て涎を繰つて居つたらう』

蚊取別 『お前は油斷のならぬ男だなア。そんな夢を見たのかい』

初公 『夢どころかい。實はお前が行きよつたものだから、俺も寢られぬので闇が

りまぎれに足音を便りに四つ這になつて従いて行つたのだ。何でも祝姫とか云つ

て歌つて居つたよ。襖の向ふに居るのだから、顔は拜めぬが、あの聲から考へて見ると、餘程の代物だ。貴様もあの聲を聞いては寝られまいなア

蚊取別「ハ、ハ、ハ、ハ、猫の様に四つ這になりよつて怪體な奴ぢやナア」

初公「蚊取別さま、お前それ切りで寝たのかい」

蚊取別「マアマア、寝たにして置かうかい」

初公「旨い事を云ふな、今度はナの字のついた方へ、ノソリノソリと四つ這になつて、頭の光つた化物が行つただらう。その後へコソリコソリと立つてついでに行つたのが此初さまだ。何でもこのナが八に何やらしようと思つて、胸を痛めて

居るらしい。面白くもない愁嘆場を二幕も聞かされて寝られたものぢやないワイ。最前から十二支の講釋を、ベラベラと教へて呉れたが、俺はその時に思ひ出して、可笑しくて吹き出しさうになつたよ。「子」の刻に「寝」るものだと云ふ宣傳使

が、「根」つから「寝」もせず、「牛」の刻ぢやないが、「牛」の四つ這になつて涎を繰つて、ガサリガサリ何の状態だい。愚圖々々して居ると、「寅」の刻で

【捉】まへられて、【卯】の刻で【ウン】と云ふ目に逢はされて、【辰】の刻ぢ

【寅】の刻で

【辰】の刻で

【辰】の刻で

【辰】の刻で

【辰】の刻で

やないが宣傳使の顔も【立つ】まいと、【巳】の刻【身】の程知らずのヒヨツト
コ面が、旨い事を考へても、向ふは素敵の代物だ。さう【未】の様に温順しく、
ハイとは云はないぞ。【申】の刻の【猿】の尻笑ひか知らぬが赤い恥を搔いて、
【酉】の刻ぢやないが、【取】返しのならぬ縮尻をやつて、【戌】の刻の【犬】
突這になつて、【亥】の刻【イイ】以後はきつと改心いたします、どうぞどうぞ
此御無禮は神直日大直日に、見直し聞き直し許して下さいまし。【子】の刻に
【ネネ】願ひます、なんて云ふとこだつたよ」

蚊取別「貴様はよく眞似をする奴だ。かう云ふ事にかけたら抜目の無い、隅にも
置けぬ男だなア」

國光彦「私も妙な夢を見ました。初と云ふ男と力と云ふ男が、牛になつたり、馬
子になつたり、馬子になつたり、牛になつたり、暗い處を四つ這になつて歩いて
居ましたぜ。四つ足や牛馬は夜分にでも目が見えると見えますなア」

蚊取別「アハ、ハ、ハ、貴方は天眼通で見て居られましたのか」
國光彦「イヤ夢ですよ。しかし乍ら夢は正夢、きつと今日はこの館に御目出度い

事が出て来るでせう。朝日は照るとも曇るとも、月は盈つとも虧くるとも、變らぬものは戀の道、戀に上下の隔てはない、きつと比翼連理偕老同穴と云ふ様な御慶事が出て来ませうよ」

初公「これ蚊取別さま、今日はえらう沈むでる様だなア。お前の日頃思つて居る女でも、此處へ隠れて居るのではないかなア」

蚊取別「サア、何とも判らぬなア」

初公「アハ、ハ、ハ、よく自惚たものだなア。自分の御面相とちつと御相談なされませや」

かく話す折しも襖をソツと引開け、靜かに入り来る一人の美人、蚊取別の姿を見るより、美人はハツと驚き涙を流し、膳部を其處につき出し乍ら、一言も得云はず、恥かし氣に奥の間に立ち去りぬ。

初公「モシモシ蚊取別さま、あれが例の八ぢや、思ったよりは立派な奴ぢやなア」
蚊取別「ウムー、ウムー、さうだ、牛は牛連れ、馬は馬連れ、月に鼈、雪と墨、提燈に吊鐘、釣り合はぬは不縁のもと、アハ、ハ、ハ、」

初公「夜が明けて居るのに提燈も月もあつたものかい、譯の分らぬ事を云ふ男だなア。併し私だつたら、幸女房もなし、向ふさへ承知なら、辛抱してやらぬ事はない」

高光彦「アハ、ハ、ハ」

蚊取別「ア、私も人生の無常を感じて居る一人だが、もうかうやつて年を取り、五十の坂が見えかけると、無常どころか無常迅速を切に感ずる様になつたよ」

初公「何が無【じやう】件だ。お前の方からは彼んな代物が女房になると云へば無條件だらうが、向ふの方は有條件で、さう迅速にハイハイとは仰しやらないぞ。餘り自惚をせぬがよからう。だいぶんけなに羨るうなつたと見えて、悄氣しよげた顔かほをなされませすなア」

この時襖ときふすまをサラリと開けて、夏山彦なつやまひこは祝姫はふりひめを従へ此場このばに現はれ、
「ヤア皆さま、汚穢むさくるしい家で……、また夜前やぜんは何だか寝苦ねぐるしき陽氣やうきで御座ござい
ました。定めてお困りこまでしたせう。マアゆるりと御飯ごはんでも御食おあがり下くださいませ」
初公「ヤア、是だ是だ。皆さま寛ゆつくりと御飯ごはんでも上あがりませうかい」

此時得も云はれぬ薰ばしき香氣俄に室内に充ち、何處ともなく嚙曉たる絲竹管絃の響聞え來たる。

(大正一一・三・九 舊二・一一 岩田久太郎録)

第一二章 化身〔五〇八〕

夏山彦と共に此場に現はれた祝姫は、轟く胸を撫で擦り乍ら、祝姫「これはこれは御一同様、御苦勞様で御座いました。妾は三五教の宣傳使祝姫と申すもの、白瀬川の魔神を言向和さむと難處を傳ひ漸く秋月の瀧に着く折しも、魔神の爲めに惱まされ生命危き折柄、イホの酋長即ち此處に在します夏山彦様に助けられ救はれて當家にお世話となり、漸く病勞の身を元に復し、これより世の爲めに神様の御用に立ち出でむと思つて居た處で御座います。ア、貴神は我夫、蚊取別の宣傳使、ようマア御無事で居て下さいました」

と涙と共に語る。

蚊取別は儼然として容を更め襟を正し、祝姫をグツと睨み乍ら、

「今日より都合によつて汝を離縁する」

祝姫「エ、それは又、如何した理由」

蚊取別「我は女房を持ってぬ因縁があるのだ。夫故汝と結婚の約を結ぶは結んだもの、未だ一度も枕を共にした事は無い。實に二人の仲は清淨潔白、汚しも穢さ

れもせぬ仲、今日限り離縁を致す。斯くなる上は従前の通り押しも押されもせぬ

互に三五教の宣傳使だ。サア祝姫さま、その覺悟で交際つて下さい」

祝姫「これは心得ぬ貴方の御言葉、妾が貞操の點について何か御心に觸へられた

るには非ざるか、心許なし、包まず隠さず宣らせ玉へ」

と涙を袖に拭ひつつ其場にワツと倒れ伏しける。

蚊取別「祝姫殿、切なるお心はお察しする。貴女の潔白なる心は私は十分諒解し

て居る。この蚊取別は、もと大自在天の臣下たりし蚊取別に姿を變じ居れ共、實

は贗物である。我はある尊き神の命を受け、宣傳使の養成に全力を注いで居るも

の、實際の處を言へば大化物だ。安心して何卒夏山彦と結婚して下さい」

祝姫「工、貴神は何れの神様」

蚊取別「それを明かす事丈は待つて貰ひ度い」

初公「ヤア蚊取別、な、な、何だ、ば、ば、化物見た様な男だな。夜前お前が忍

び足に聞きに行きよつたのが、不思議だと思つて居つたら、天にも地にも無い最

愛の女房だつたのだな。それは無理もない、尤もだ。然し乍ら今聞けば一回も枕

を竝べた事も無いと言ふ事だが、随分素氣ない男だなア。さうして夏山彦の酋長

の女房になれとは何が何やら譯が分らぬ。オイ、も一遍俺の鼻を捻つて見て呉れ

ないか。根つから葉つから目から口から鼻から合點の蟲が承知せぬワイ」

蚊取別「アハ、ハ、ハ、ハ」

高光彦は蚊取別の顔を穴のあく程ながめ乍ら、

「貴神は初めてお目にかかつた時から、何だか不思議な宣傳使だと思つてみまし

た。いやもう感心致しました。夏山彦さま、蚊取別の宣傳使はこれや屹度三十三

相に身を變じて御座る神様ですよ、仰の通り祝姫さまと御結婚を遊ばしませ。神

様の結むだ結構な縁だから祝姫さまも決心をして、此方の仰有る通りなさるが宜しからう。夏山彦さまもよもや嫌ひな仲ではありませんまい。是で貴神の心の暗も杜鵑もをさまりませう」

夏山彦「ア、勿體ない、如何してどうして祝姫さまを女房に持つことが出来ませうか。今承はれば蚊取別の宣傳使の奥さまとやら、聞いて驚愕致しました。私の今迄の心を打ち割つて申せば、初めは三五の教に歸依し次に神様に歸依し、遂には宣傳使に歸依する様になり、それが重なつて戀の病におち、煩悶苦惱を續けて居りました。人民の頭となり乍ら實にお恥しい心で御座います。私も因縁が恐ろしくなつて來ました。何卒このこと計りは許して下さいませ、今迄の戀愛心をスツカリ捨てて仕舞ひますから」

蚊取別「それはいけませぬ。歸依した宣傳使を忘るれば従つて道を忘れ、神を忘れる事になつて來る。歸依心、歸依道、歸依師だ。凡て信仰は戀慕の心を持たねばならぬ。サアサ、私がこれから媒酌を致しますから、御心配なく結婚の式を一時も早く擧げて下さい。神が許した夫婦の縁、誰に憚る事もない、御兩人共、少

しも蚊取別に遠慮して貰つては困る

玉光彦「ヤア、これで私の夢も實現した。矢張正夢であつたか」

國光彦「不思議な事ですな。兄さまの夢に迄チヤンと分つて居るのだから、これ

や屹度神の許された縁でせう。御主人様、蚊取別の神様の仰しやる通り、素直に

結婚の式を挙げたが宜しからう」

初公「イヤ、もう昨晚の夢と言ひトンと譯が分らぬ様になつて來たワイ。斯う百

日も月日の御光が拜めぬ様になつた世の中だから、何れ種々の化物が現はれるの

だらう。こいつは矢張怪しいものだ」

蚊取別の媒酌によつて此處に二人は結婚の式を挙げ、祝姫は一行五人と共に白

瀬川の魔神を言向和すべく、館を後に六人連れ宣傳歌を歌ひ乍ら、朧月夜の如き

春の日をシナイ山の山麓指して進み行く。

(大正一一・三・九 舊二・一一 北村隆光録)

第一三章 秋月瀧（五〇九）

常夜往く暗を晴らして世の中を、清めむよしもナイル河、ウラルの彦の御教に、
心も身をも蕩かされ、正しき業もシナイ山、木々の繁みに隠りいて、この世を亂
す曲津神、汚れを流す恐しさ、空照り渡る秋月の、瀧さへ濁る泥の雨、降り來る
ものは泥と灰、地に堆高く重なりて、足踏みなずむ谷の路、灰降る後の夏の日に、
冷たき雪の降り積り、夏にも非ず冬ならず、春日か秋か「あや四季」の、順序亂
れて常夜行く、神の恵みもいやちこに、御空晴らして高光彦や國光彦、曲津の身
玉光彦や、初花開く祝姫、蚊取の別の六人連れ、谷間を指して進み行く。
初公「ヨ、そつくりだ、夢に見た通りの森林もあり、瀧もある。然し晝とは云
ひ乍ら、ほの暗い世の中に瀧ばかり白く光つて居る。彼奴が一つの曲者だよ。サ
アこれからあの瀧に向つて言靈でウンとやつて見よか」
蚊取別「ソー惶てるものぢやない、氣を落ち着けて緩くりとかかる事にしよう。
祝姫さまは早や此瀧に經驗があるのだから、言はば今度は弔ひ戦だ、シツカリ遣

るのだぜ」

初公「大分に暗くなつて来たワイ。何處か此處らに麻の繩が落ちて居らぬかいな」
蚊取別「麻の繩が落ちて居れば夢が實現するのだから、それこそ又もや大蛇の背
中だ。ヤア皆の方々、此處には秋月の瀧、深雪の瀧、橋の瀧、高光の瀧、玉光の
瀧、國光の瀧と六つの大瀧がある。それを各々手分けして、一つづつ言向和す事
にしたらどうでせうなア」

初公「モシモシ、初の瀧、蚊取別の瀧はありませぬかいな」

蚊取別「澤山にある、然しそんな些細な瀧は數に入つて居らぬのだよ。餘り大き
くて數に入らぬのが蚊取別の瀧、あまり小さくて數に入らぬのが初の瀧と云ふの
だよ」

初公「酷いなア、然し六人一度に力を集めて秋月の瀧へ突撃を試むる事にしませ
うかい」

斯く云ふ間瀧の音はドードーと刻々に激しく聞えて来る。飛沫は四方に飛散り、
折からの風に連れて六人の佇む前に驟雨の如く落ち来る。

初公はつこう「サア大變たいへんだ。瀧たきの奴やつ、祝姫はふりひめに秋波しゅうはでなくて激波げきは、激沫げきまつを飛ばとして、チヨイ

チヨイとお顔かほを舐なめると云いふ洒落しやれだナア」

蚊取別かとりわけ「瀧たきが來きたのぢやない、此方こちらより進すすむだぢやないか、ソラ、ここは瀧たきの前まへ

だよ」

初公はつこう「ヤア此奴こいつは不思議ふしぎ、歩あるきもせぬのに七八町しちはつちやうもある處ところをどうして此處ここまで來き

たのだらうか」

蚊取別かとりわけ「極きまつた事ことよ、大蛇をろちの背中せなかに乗のせられて來きたのだもの。貴様きさま一寸前ちよつとまへを見みよ、

鎌首かまくびを立てたて居ゐるぢやないか」

初公はつこう「ヤア愈怪いよあやしいぞ、迷宮めいきうに入いつた。どうやら蚊取別かとりわけもかうなつて來くると怪あやし

いものだ。神蚊かみ惡魔蚊あくま、本當蚊ほんたう嘘蚊うそ、お化蚊ばけ本物蚊ほんもの、蚊々かかか烏蚊からす鳶蚊かび、天狗蚊てんぐ大

蛇蚊ち、取別とりわけ譯わけが分わからぬぢやない蚊かい」

斯かく言いふ閒谷間うちたにまに立たてる見上みあぐる許ばかりの大岩石だいがんせきはガラガラと音おとして、六人ろくにんの頭づじ

上やうに落おちかからうとする。

初公はつこう「サア蚊取別かとりわけさま、宣傳歌せんでんかだ宣傳歌せんでんかだ、愚圖ぐづ々々ぐづして居ゐると岩いはに押おし潰つぶされ

てしまおうワ」

蚊取別「あれは岩ではない、瀧の水煙だ。早や曲津神に瞞されて居るな」

瀧の音は刻々に高く轟いて来る。初公は一生懸命汗を瀧と流しながら神言を奏

上し、薄暗き瀧の畔は忽ち紅くなつて来た。見れば瀧の中より巨大なる火の玉が、

スウスウと瀧を目蒐けて昇り行く。

初公「ヤア出やがった赤玉奴が。初さまの御鎮魂にウンと火の玉を消して遣らう

か。ヤア待て待て彼奴が居るとそこらが明くて丁度燈の代りになるから放つとい

てやらうかナア」

巨大な火の玉は、ブスリと消えた。四邊は眞暗闇である。

初公「ヤア蚊取別さま、祝姫さま、眞闇になつた、宣傳歌を歌つて下さい」

瀧の音は益々高く聞える。

初公「サ、蚊取別さま、宣傳歌を力一杯一生懸命歌ひませう。何んだ返事をせぬ

のか、ハハア、餘り瀧の音が高くて聞えぬのだらう」

と云ひながら両手を組み、一生懸命に瀧壺に向つて宣傳歌を歌つた。

初公はつこう 朝日あさひは照てるとも曇くもるとも 月つきは盈みつとも虧かくるとも

たとへ天地てんちは暗くらくとも 白瀬しらせの川かはの瀧たきに住すむ

此この曲津まがつみ見みを言靈ことたまの 貴うづの劍つるぎを拔ぬき持もちて

切きり屠ほふらずに置おく可べき蚊か 取別とりわけ神かみの御化おんけしん身み

瑞みづの御魂みたまの御光みひかりに 岩戸いはとこめたる雲霧くもぎりを

伊吹いぶきに拂はらふ祝はふりひめ姫め 赤あかい火ひの玉たま飛び出だして

高光たかてるひこ彦ひこか玉光たまてるか 廣國ひろくに光てらす宣傳せんでん使し

睦むつび合あうたる神柱かむばしら 嚴いづの雄健をとけび踏ふみ健たけび

嚴いづのころびを振ふり起おこし 曲まがを悉言ことごと向むけて

四方よもに塞ふさがる村雲むらくもを 晴はらして日ひの出での世よとなさむ

此世このよを造つくりし神直日かむなほひ 心こころも廣ひろき大直日おほなほひ

直日なほひに見直みなほし宣のり直なほす 行平ゆきひら別の言靈ことたまに

敵てきする神かみはあらざらむ 天あまの岩戸いはとも秋月あきづきの

瀧たきの音おとさへ鎮しづまりて 枝えだも鳴ならさぬ神かみの御代みよ

ナイルの河も純世姫
心を盡しの島ヶ根に

太き稜威を阿弗利加や
廣き原野に蟠まる

曲言向けて初國を
開く行平別の神

ア、曲神よ、曲神よ
神の御言にまつるひて

ナイルの河の瀧水に
心を洗へよ清めよや

と歌ひ終れば、不思議や今まで暗黒なりし谷間は夜の明けたる如く、天津御空に

は、雲を分けてほのかに日の光り現はれ來りければ、初公は欣喜雀躍の餘り、後

振り返り、

モシ蚊取別様

と言ひつつ傍を見れば宣傳使の影は一柱も見えずなりにける。

初公「ハテ不思議だ、何の事だか譯が分らぬ。然し乍ら久し振で天の岩戸が開け

たと見えて、かすかながらも日輪様のお顔を拜むだ。ア、有難いありがたい天津

祝詞を上げませう

第一四章 大蛇ヶ原(五一〇)

有爲轉變の世の習ひ 淵瀨と變る人の身は

榮枯盛衰會者定離 浮世の風に操られ

高天原の天使長 その神政を輔翼する

行成彦の伴神と 仕へて其名を内外に

轟かしたる行平別の 神の命はイホの國

花の都に現はれて 卑しき人の群に入り

弱きを救ふ侠客 名も初公と改めて

花咲く春を待つ間に 世は常暗となり果てて

春夏秋の別ちなく

悪魔は日々にふゆの空

心さむしく世を渡る

身の果こそは哀なり

月日は廻る時津風

神の伊吹に拂はれて

心も勇む宣傳使

五人の後に従ひて

夜も秋月の瀧の音に

曲言向けて唯一人

神の御稜威を稱へつつ

深雪の瀧に立ち向ふ。

初公の行平別は、荆棘茂る谷道を、尋ね尋ねて瀑布を目當てに下り行く。瀑布

の前には數十人の人聲、見れば蚊取別、祝姫その他の宣傳使を口に啣へながら、

蜒々たる大蛇は鎌首を立て此方に向つて進み来る。

數十人の人々はこの光景を見て、手を打ち心地よげに立ち騒いで居る。初公は

之を見るより怒り心頭に達し、

□につくき大蛇の悪魔、五人の宣傳使を呑み食はむとするか、待て待て我真心の

言靈の劍に亡ぼし呉れむ

と宣傳歌を歌はむとすれば、口塞がり痺れてピリツとも動かなくなつて居る。身體は見る見る硬直して自由に動く事さへ出来なくなつて來た。

行平別は身體を縛られ口を鎖され、どうする事も出来ず、力と頼む五人の宣傳使は、見る見る大蛇に吞まれて了つた。大蛇は行平別に向つて、

大蛇「ヤア彼處に、もう一人の片割れが居る。これも序に吞むでやらうか」

と云ひながら大口を開けて、今や一口に食はむとする勢である。行平別は心の中

で神言を奏上しながら……どうなとなれよ、神々に任じた此體、吞むなら吞めよ

……と口には得云はねど顔色に現はして居る。心では一生懸命祝詞を奏上するや、

不思議に發聲の自由を得た。

「ヤア大蛇の奴、貴様は怪しからぬ奴だ。五人の宣傳使を、今見て居れば、一口

に吞んで了ひよつたな。ヨシ俺が貴様の腹の中に這入つて、大蛇身中の神となつ

て平げてやらう。サア足から吞むか、頭から吞むか、お望み次第だ」

大蛇は一丈ばかりの岐になつた舌をペロペロと出し、行平別を舌の先に巻いて

グツと吞み込むで了つた。

「ヤア、たうとう俺を呑んで了ひよつたナ。随分暗い穴だ。五人の宣傳使は何處迄行つて居るのか知ら。大分に來た積りだがねつから其處邊に聲がせぬ。随分大きな大蛇だ。この間夢に見た奴かも知れぬぞ、この儘雲を起して俺達を呑むだままた天に舞ひ上るのか知ら。何構ふものか舞ひ上つたつて腹の中だ、落ちる心配はない、また地から天におつこちた者もない、マア緩くり宣傳歌でも歌つてやらうかい」

と、眞暗がりの大蛇の腹を四股踏み進んで行く。

「ヤア大分にジクジクして居るぞ。大蛇の小便袋を踏むだのぢやなからうかなア」
遙向ふの方に少し光る物がある。

「サアこれからあの光を目蒐けて、どんどんと行平別だ」
と云ひながら足を速めた。何だか黒き頭が見える。

「ヤア此奴ア子持だな、大蛇の卵だらう」
と立止つて思案をして居る、闇より蚊取別の聲として、

「ヤア初公さま甚う遅かつたねえ」

「ヤア蚊取別さまか、秋月の瀧で魔神を言向け和して居る間にお前さまも腹の悪い、五人一度に【どろん】と消えて、初さま一人をほつときぼりにして、餘り酷いぢやないか、五人が五人ながら揃うて【五人情】の薄いお方だ。私一人にするとは餘りだよ」

蚊取別「イヤ、秋月の瀧はお前に【一任】したのだから、それで當然だ。我々の精神を【誤認】されては困るよ」

行平別「エ、【六人】でも無い事を仰有りますな。併し此處は大蛇のトンネルですか、イヤ祝姫様も萬壽山の宣傳使も其處に居られますか。どうです怪我はありませぬか」

祝姫「別に、お蔭で怪我也せず、谷道を越えて此處迄やつて來ました。どうも暗い事ですなア、聽て深雪の瀧に間もありますまいから、此處で一服揃うてして居ますのよ」

高光彦「ヤア初さま、御苦勞でしたなア、マア緩くり一服致しませうかい」
行平別「さう氣樂な事も云うて居られますまい、此處は大蛇のトンネルぢやあり

ませぬか。今貴方方五人が大蛇に吞まれて居たのを見ましたので、何くそ、この行平別の言靈によつて、大蛇を征服してやらむものと、深雪の瀧に進み入つたところ、大蛇の奴、又もや我を大きな長い舌の先でペロリと舐て喉坂峠をごろごろ、漸く細頸道を探り探りて大野腹にやつて来て見れば、貴方方の私語聲、一體この大蛇と云ふ奴よほど太い奴ですなア。どうでせう、六人が力を合せて横つ腹に穴でも開けて出てやりませうか」

蚊取別「オイオイ、初公さまお前何を呆けて居るのだ。ここはシナイ山の麓の秋月の瀧の二三町下手だよ」

と云はれて初公は、目を擦り四邊を見れば、こは抑如何に水音滔々として白瀬川が布を晒したる如く流れて居る。

行平別「ヤアまた大蛇の奴、魅みよつたなア、油断も隙もあつたものぢやないワ、岩も木も草も皆化けて化けて化けさがしよるワ。その筈だ。最前も云つたなア、我は大化物だと、大方蚊取別が目を眩ますのだらう」

此時山嶽も崩るるばかりの物音凄く、見上ぐる許りの大岩石は風に吹かれて散

る木葉の如く、天に舞ひ上り地上に向つて、ドスンドスンと音を立てて雨や霰と降り来る。一行六人は空を仰ぎながら、岩に打たれじと前後左右に體をかはし、汗を流して飛び廻る事殆ど一時ばかり、遂には足疲れ目眩み千仞の谷間にズデンドウと顛落した。ハツと思ふその途端目を開けば、高熊山の巖窟の前、十四夜の月は早くも彌仙山の頂に姿を隠さむとする眞夜中頃なりき。

(大正一一・三・九 舊二・一一 加藤明子録)

第一五章 宣直し〔五一〕

峰の嵐や松風の音 高熊山の岩の前
靈より覺めし瑞月は 神の使に十四夜の
御空を仰ぎ眺むれば 星の瞬きやうやうに

霞^{かす}みて月^{つき}も彌^み仙^{せん}山^{ざん}
 鷄^{けい}鳴^{めい}間^まもなき朝^{あさ}嵐^{あらし}
 又^{また}もや靈^{みたま}は悠^{いっ}々^うと
 方^{かた}へと息^{いき}せき進^{すす}み行^{ゆく}
 春^{はる}の初^{はじめ}と言^いひ乍^{なが}ら
 八^や岐^{また}大^を蛇^{ろち}の片^{かた}割^{われ}なる
 此^{この}世^よの曲^{まが}を祝^はひ姫^{ひめ}
 神^{かみ}の使^{つか}ひの宣^{せんでん}傳^し
 神^{かみ}の靈^{みたま}の玉^{たま}光^{てる}彦^{ひこ}
 風^{かぜ}にちらつく行^{ゆく}平^{ひら}別^{わけ}の
 深^み雪^{ゆき}の瀧^{たき}の曲^{まが}神^{かみ}を
 吹^ふき拂^{はら}はむと進^{すす}み行^{ゆく}
 峰^{みね}の^{うしろ}後^ごにかくろひて
 冷^{つめ}たき風^{かぜ}に吹^ふかれつつ
 果^{はて}しもあらぬ神^{しん}界^{かい}の
 水^{みな}音^{おと}高^{たか}きナイル河^{がは}
 名^なは秋^{あき}月^{づき}の大^{だい}瀑^{ばく}布^ふ
 醜^{しこ}の大^を蛇^{ろち}を言^{こと}向^むけて
 蚊^{かとり}取^りの別^{わけ}や三^{さん}光^{くわう}の
 高^{たか}熊^{くま}ならぬ高^{たか}光^{てる}彦^{ひこ}
 御^み稜^{いづ}威^{たか}も高^{たか}き國^{くに}光^{てる}彦^{ひこ}
 茲^{ここ}に六^む人^{たり}の神^{かみ}司^{つかさ}
 善^{みやび}言^{こと}美^{こと}詞^ばの神^{かみ}言^{こと}に
 夢^{ゆめ}の中^{なか}なる物^{もの}語^{がたり}。

行^{ゆく}平^{ひら}別^{わけ} 〆 サア今^{こん}度^どは深^み雪^{ゆき}の瀧^{たき}だ。 皆^{みな}さま一^{いっ}緒^{しょ}に前^{ぜん}後^ご左^さ右^{いう}より言^{こと}靈^{たま}を以^{もつ}て攻^せめ掛^{かけ}ま

せうか、また秋月の瀧の様に私一人に一任されては困りますよ」

蚊取別「イヤ、深雪の瀧は一人で結構だ。行平別の宣傳使に頼むでおかう。祝姫

さま、あなたの弔ひ合戦も是で帳消だ。今後は夏山彦の奥さまだから、今迄の様に

天下を自由自在に闊歩する事は出来ない。夫唱婦隨の天則に従つて家庭を守ら

ねばならぬ。人は一代名は末代、夏山彦の奥さまは、秋月の瀧の悪魔を退治に往

つて悪神の爲に苦められ、大失敗を演じ、夏山彦に助けられ、その情に絆されて

夫婦になつた、宣傳使を失敗つた、有終の美を全うする事が出来なかつたと、末

代の語草になつては詰らないから結婚をされた後ではあれども、宣傳使の務めを

全うさせたい爲に、秋月の瀧にあなたを連れて來たのだ。最早秋月の瀧の征服も

無事に片付いた以上は、宣傳使としての責任も、完全に果されたと云ふものだ。

サア是から夏山彦の館に歸り、賢妻良母となつて、イホの都に善政を布く夫の神

業を内助するのだ。最早宣傳使の役も神界より免除された。サアサア早く還りま

せう」

祝姫「折角秋月の瀧迄來たのですから、モウ私も宣傳使の年の明、花々しく残り

の瀧たきの魔神まがみを征伐せいばつする迄まで待つて下くださいませまいか」

蚊取別かとりわけ「それはいけませぬ、何事なにことも八分はちぶといふ所ところが良いのだ。十分じふぶん手柄てがらをしてやらうと思おもへば、却かへつて失敗しつぱいの基もととなる。たとへ失敗しつぱいせずとも、白瀬川しらせがはの悪魔あくまは全部ぜんぶわれわれが征服せいふくしたのだと云いふ慢心まんしんが起おこるから其慢心そのまんしんが貴女あなたの婦徳ふとくを傷きずつける基もとなるから、これで打切うちきりにするが宜よろしい」

行平別ゆきひらわけ「さうだなア、蚊取別かとりわけの仰有おつしやる通りだ。祝姫はふりひめさま、此方このかたは斯こう見みえても、普通あたりまへの宣傳使せんでんしではない、天教山てんけうざんより現あらはれたる尊たふとい天使てんしに間違まちがひない、天使てんしの命令めいれいだ。素直すなほにお聞ききなさが良よからう」

祝姫はふりひめ「ア、仕方しかたがありませぬ、今迄いままでは山野河海さんやかかいを跋涉ばつせふし、種々いろいろの苦心くしん惨怛さんたんたる辛つらい目めも味あぢはひ、また愉快ゆくわいな事ことにも會あつて來きましたが、今日けふから最早もはや宣傳使せんでんしが出來できないかと思おもへば何なんだか心残りこころのこりがある様やうです。矢張やつぱり妾わたしは温あたたか家庭かていに蟄居ちつきよして安樂あんらくに暮くらすよりも、貴神方あなたがたと共に命懸いのちがけの苦勞くらうをする方ほうが、何程なにほど愉快ゆくわいだか分わかりませぬ。ア、どうして男おとこに生うまれて來こなかつただらう」

蚊取別かとりわけ「執着心しふちやくしんをサラリと抛ほつて、夏山彦なつやまひこの奥様おくさまとなり、三五教あななひけうの神かみを尊そん敬けいし、

且その教を管轄下の人民に懇切に説き諭して神業を助けなさい。サア私が送つて上げませう。目を塞ぎなさい、途中に目を開けると大變ですから、蚊取別がサア目を開けなさいと云ふ迄開けてはなりませぬよ」

祝姫「ハイ」

と答へて従順に瞑目する。この時何處ともなく四邊を照す大火光が現はれ來たり、一行の頭上を四五回ブウブウと音を立てて循環し、轟然たる大音響と共に、白煙となつて消え失せた。見れば蚊取別、祝姫の姿は最早この場に見えずなりにける。

附言

夫婦となるべき靈、親子となるべき靈魂、主従師弟となるべき身魂は、固より一定不變のものである。併し乍ら世の中の義理とか、何とか種々の事情の爲に已むを得ず、不相應の身魂と結婚をしたり、師弟の約を結んだりする事がある。但し靈と靈との因縁なき時は、中途にして破れるものである。蚊取別の天使は、祝姫の靈の夫婦に巡り會ふまで、他の異りたる靈と結婚をなし、天分使命を中途に

して過たむ事を恐れ、種々と工夫を凝らし、一旦自分の妻神と名付け、時機の來るのを待たせつつあつたのは、神の大慈大悲の御守護であつた。故に人は結婚に先立ち、産土の神の認許を受け神示を蒙つた上にて結婚せざれば、地位財産名望義理人情戀愛等の體主靈從的境遇に支配されて、一生不愉快なる夫婦の生涯を送る様な事が出来てはならぬから、人倫の大本たる夫婦の道は、神の許しを受け、妄りに軽々しく結婚してはならないものである。中には二度目の妻、所謂二世の妻を持たねばならぬ様な場合があるが、これは第一世の妻と靈が合はなかつたり、或は合つてゐても肉體が靈に添はずして、夭死したりするものである。併し乍ら愛情と言ひ、家庭の切廻しと云ひ、どうしても第一世の妻に比ぶれば、二世の妻は劣つて居るものである。要するに、二世の妻は、妻といふ名はあつても、大抵は一世の妻の代理たるべき者であるからである。また中には第一世の妻より二世の妻の方が、何かに付けて優つたのもある。それは第一世の妻は夫婦の靈が合つて居なかつたので、二世の妻が本當の靈の合つた夫婦の場合である。二回とも靈の合はぬ夫婦となり、中途にしてどちらかが缺げ、第三回目に靈の合つた者

が發見されても、最早三世の妻は持つ事が出来ないのが、神界の不文律である。
祝姫も斯る過失に陥らざる様と蚊取別の天使は、今日まで姫の身邊を保護すべく夫婦の名を附して居たのである。

蚊取別祝姫は、白煙となつて此場に姿を隠した跡に四人は茫然として白煙立上る雲の彼方を見て、感歎稍久しうし、
高光彦「ヤア今まで蚊取別の宣傳使は變つた人だと思つて居たが、神様と云ふものは實に何處までも行届いたものだナア。唯一人の祝姫の一生を守るべく、種々の手段を以て操縦された其御神業、小さい事にも大きい事にも氣のつくものだ。
我々も細心の注意を拂つて世の中に立たねばならぬ。況して今日の如き常暗の世の中に、蚊取別の様な人は目薬にしたいと思つてもあるものでない。サア之から我々も知らず知らずの慢心を省みて本當の神心にならねば、五つの瀧の曲神を征服どころか却て征服されて了はねばならぬ。アー何だか蚊取別さまの歸られた後は、鳥も通はぬ離島に唯一人棄てられた様な心持になつて來た」

玉光彦「さうですナ、各自に腹帯を締めて掛らねばなりません。人は背水の陣を張らねば何事も成功させぬ。勇斷果決、獅子奮迅の勢を以て、先づ自分の靈に憑依せる惡魔を追出し、清淨潔白の靈になつた上惡魔を征服する資格が初めて出来るのだ。大瀑布に惡魔が居ると思へば、豈圖らむや、自分の心の奥に白瀬川の大瀑布が懸り、そこに大蛇の惡魔が巢ぐうて居るのだ。身外の敵は容易に征服出来るが心内の敵は退治が出来難い。先づ深雪の瀧の惡魔に突撃するまでに、各自の惡魔を征服し、或は歸順せしめて後に掛りませうか」

高光彦「アーさうだ。惡魔に對ふのは、恰度的に向つて弓を射る様なものだ。弓を射る者は其身を正しうして、一分一厘の隙間もなく、阿吽の呼吸の合つた時始めて、弓を満月の如くに引絞り、私の心を加へず秋の木の葉の風もなきに、自然に落つるが如き無我無心の境に入りて、自然に矢が弦を離れる。さすれば其矢は的の中心に當る様なものだ。先づ己の靈を正しうするのが肝腎だ」

國光彦「敵は本能寺にあり、我身の敵は我心に潛む。心の敵を滅せば、如何に常暗の世の中とは云へ、我に取りては惡魔も大蛇もナイル河、尊き神代を深雪の瀧、

速河の瀬に失ひ流す、神司麻柱の宣傳使、深雪の瀧に向ふに先立ちて先づ自己の靈の洗濯にかかりませう」

行平別「ア、萬壽山の御兄弟の深刻なるお話に依りて、私の心の岩戸も、サリと開けました。アレ御覽なさいませ、天津御空には喜悅の太陽晃々として輝き始めました。これ果して何の祥瑞でせうか」

高光彦「世の中に鬼も大蛇も悪魔も有るものでない、ある様に見えるのだ。各自の心に誠の日月が照り輝き、神の慈愛の心の鏡に映つたならば、天地清明安養淨土、サアサア皆さま、打揃うて天津祝詞を奏上致しませう」

四人は茲に端坐し、天津祝詞を奏上し終つて宣傳歌を高唱する。

神が表に現はれて

善と悪とを立別ける

善悪不二の神の道

善を思へば善となり

悪を思へば悪となる

舌の劍の切先に

鬼も悪魔も曲靈も

先を争ひ出で来る

この世曇るも舌の爲

敵に惱むも舌のため

人を救ふも舌のため

地獄極樂舌のため

舌の毒より湧き出づる

鬼が出づるも心から

神も佛も心から

心に花の開くとき

心に閑荒ぶとき

人を殺すも村肝の

人を救ふも舌の先

鬼となるのも舌の先

天の瓊矛と稱へたる

慈愛の鞘によく納め

争ひ起るも舌のため

この世を照すも舌の爲

天國浄土も舌の爲

世のごとごとは押竝べて

舌の奥には心あり

大蛇探女も心から

心の持様唯一つ

天地四方に花開く

世界に閑吹きまくる

心の呼吸の舌の先

神となるのも舌の先

人は第一言靈の

舌の劍を慎みて

妄りに抜くな放つなよ

善言美詞の神嘉言

使ふは舌の役目ぞや

善言美詞は天地の

醜の悪魔を吹き拂ふ

生言靈の劍ぞや

ア、惟神々々

靈幸倍坐世言靈の

舌の劍を穩かに

使はせ給へ天津神

國津神たち百の神

神代を開く言靈の

清き御水火に曲津見の

醜の靈は消え失せむ

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

唯何事も人の世は

直日に見直せ聞直せ

身の過ちは詔り直せ

と歌ひ終るや、百日百夜暗黒に鎖されたる天地は、茲に豁然として夜の明けたる

如く、日は晃々として天に輝き、今迄騒然たる瀑布の響はピタリと止まり、虎狼

獅子大蛇鬼の叫びも瞬く間、若葉を渡る春風の響とこそはなりにける。

(大正一一・三・一〇 舊二・一二 松村眞澄録)

第一六章 國武丸〔五一二〕

天に月日の光なく、地に村雲ふさがりて、奇しき神代も呉の海、國武丸に帆を揚げて水夫の操る櫂の音は、波に蛇紋を畫きつつ、コーカス山の麓を指して進み行く。

風も無く、油を流したやうな静かな、淋みのある海面を船脚遅く、波掻き分けて北東指して進む。此の海上に漂ふこと旬日、數十人の船客は四方山の話に耽り居るのみ。

甲「斯う毎日日天は曇り、地は言ふに言はれぬ鼻も【むし】られるやうな臭氣がして来る。若い者の頭までが白髪になる。年も寄らぬに禿頭が彼方にも此方にも殖ゑて来る。五穀は實らず、果物は熟せず、病氣は起る、獅子や、虎や、狼や大蛇は所々に現はれて人を害する、困つた世の中になつたものだナア。斯うなつて来ると人間も弱いものだ。吾々を救ふ誠の神様が果して世の中に御一柱でもあるとすれば、斯んな世の中を一日も早く立替へて下さりさうなものだな」

乙おつ □ それや神様は屹度有るよ。誠まことの神様は廣ひろい世界せかいに唯一ただひとしら柱しらより無いなのだ。何程なにほど

偉えらい神かみさまだと一柱ひとりでは、さう隅すみから隅すみまで手てが廻まはりさうなことは無いなぢやないか。神様かみさまが一方いつぱうで救たすけ持もつて往ゆかつしやる後あとから、又また惡魔あくまがドンドンと魅入みいつて往ゆくのだから仕方しかたが無いな。各自めいめいに心得こころえて魂たまを研みがくより仕様しやうがないわ。さう神かみさまばかりに凭もたれて居をつても自分じぶんから改心かいしんせなくては、神様かみさまがお出いでになつても、ア―斯こんな穢けがれた奴やつは屑くづの方ほうに入れてやれと云いつて、屑籠くづかごの中なかへ投ほり込まれて了しまふかも知れない。他力たうりき信神しんじんも結構けつこうだが、他力たうりきの中なかに自力じりき信神しんじんが無なければならぬよ

丙へい □ 自力じりきで救たすかるのなれば別に神様かみさまは無なくても好いぢやないか

乙おつ □ 自力じりきの中なかに他力たうりきが有あり、他力たうりきの中なかに自力じりきが有ある。神様かみさまと人間にんげんとは持もちつ持もちれつ呼吸いきが合あねば、御神徳ごしんとくは現あらはれて來こぬのだ。人間にんげんは神様かみさまに救たすけられて世よの中なかに活くわつ躍やくし、神かみは人間にんげんに敬うやまはれて御神徳ごしんとくを現あらはし給たまふのだ。毎日まいにち手てを束つかねて他力たうりきばかりを待まつて居ゐた所ところでさう易々やすやすと棚たなから牡丹餅ぼたんもちが落おちて來くる様やうな譯わけには行ゆかない。人にん間げんは盡つくす可べき道みちを盡つくし、心こころを盡つくし、身みを盡つくし、もう是これで自分じぶんの力ちからの盡つくしやうが無ないと云いふ所ところまで行いつたとこで、神様かみさまが力ちからを添そへて下くださるのだ。偷安とうあん姑息こそく自分じぶん許ばかり

爲べき事もせず樂な方へ樂な方へと、身勝手なことばかり考へて居る奴に、神さま
まだつてナニ護つて下さるものか。これ丈け世の中が曇つて來たのも、「みんな」
神様の所行ぢやない。吾々人間の心得が悪いからだ。互に憎み、妬み、怨み、讒
り、怒り、呪ひ、瞋恚の焰を燃して惡魔道のやうに、優勝劣敗、弱肉強食の惡心
惡行が天地を包むで、自然に斯んな日月の光も見えぬ暗黒界が現はれたのだ。詮
り人間の口から吹く邪氣が凝つたのだよ。何うしても是は善言美詞の言靈を以て
直日に見直し聞き直し宣り直し天津神言の伊吹きに依て、この天地の妖雲を拂ひ
清めねば、天日の光を仰ぐことは何時までも出來ぬ。雨も降らず、風も無し、地
上に邪氣は蔓延する。一體お前たちは此の世界は何うなると思つてゐるのか」
甲「何うなるつたつて、何うも仕方が無いぢやないか。一人や二人の言靈を清く
した所で大海の一滴、何の役に立つものか。神様でさへも御一柱で手が廻らぬの
に、況して人間の分際で一人や、半分、何程清い言靈を使つた所で何の足にもな
りはせぬぢやないか」

乙「人間は神様の容器だ。神様が人間の身體に入つて下さらば、その身魂は日月

の如く輝いて、斯んな暗黒な世の中でも薩張すつかりと淨まつて了ふのだが、何を言つても吾々の肉體には醜の曲津が巢を組んで居るから、神様が入つて下さる隙が無いのだよ。一日も早く心の曲津を投り出して、眞如の日月を心の天に輝かすやうにならなくては駄目だ。塵芥の溜つた座敷には、貴いお客さんは据ゑることは出来ない。マアマア身魂の掃除が一等だな」

甲 「この呉の海には大變な龍神さまが、この頃現はれたと云ふことだよ。その龍神が現はれた風評の立つた頃から、斯うして天地が眞暗氣になつたぢやないか」

乙 「勿體ないことを云ふな。この呉の海は、昔は玉の井の湖と云ふ水晶の湖水があつて、そこに澤山の諸善龍神様がお住居をしてござつたのだ。その時代は此邊りは世界の樂土と言はれた所であつたが、その玉の井の湖を占領せむとして、大自在天の部下なる牛雲別、蟹雲別と云ふ惡神が、攻めよせ來たり、龍神さまと鬼神との戦ひがあつて、その時に玉の井の湖水は天へ舞ひ上り、二つに分れて出來たのがこの呉の海と、琵琶の湖だよ。さう云ふ因縁の有る此の海に何うして惡神さまが住居を爲さるものかい。餘り人間が惡賢うなつて惡が盛んになつたが爲に、

地上の諸善神は残らず天へ昇られ、龍神さまは何れも海の底、即ち龍宮の底へ、身を潜め給うたのだ。この地上には、誠の神様は「みんな」愛想をつかし見捨てて或は天に昇り、或は海の底に入らるるやうになつたものだから、恐い者無し。悪魔が横行闊歩するやうになつたのだよ」

甲「神様は全能ぢやとか、愛だとか言ふぢやないか。眞に吾々を愛し給ふならば、何故飽迄も保護をして下さらぬのだ。斯うなつて見ると神の慈愛も疑はざるを得ぬではないか。要するに神と云ふものは美しい、綺麗なばかりで實力の無いものと見える。心穢き悪魔の跋扈に耐へ兼ねて天へ避けたり、海の底へ隠れるとは、なんと神様も不甲斐無いものだナア。吾々人間でさへも斯うして地上に依然と辛抱してゐるぢやないか」

乙「莫迦を云ふな。「人盛なれば天に勝ち、天定まつて人を制す」と曰ふことがある。何程神様が人間を照してやらうと思召しても、鏡が曇つて居るから神様の御神力が映る途が無いのだ。濁つた泥の池には清き月の影は映らぬ。曇つた鏡には姿は映らない、神様は清浄潔白、光だから斯う云ふ汚い人間には御うつりなさ

らうと思つてもうつることが出来ないのだよ」

甲「其處が神さまぢやないか。吾々の魂が曇つて居れば、何とかして勝手に磨いて、うつればよささうなものぢやないか。魂を研け、磨いた者には、うつつてやらう、護つてやらう、救けてやらう、磨けぬ者には、うつらぬ、護つてはやらぬ、救けぬと云ふのでは別に吾々と異つたことは無いぢやないか。吾々でも色の白い、年の若い、綺麗な別嬪には不知不識に目がうつり、心がうつり、氣分がよくなるし、穢いお多福面の色の黒い、【どて】南瓜のやうな奴には、何となしに心持が悪くつて、そよそよと吹いて來る風も厭と云ふやうな氣になる。其處が人間の心だ。仕方が無いが世界の人民は皆我が兒だと仰有る神の親心から見たなれば、極道の兒や不具の兒は、親の心としてなほ可愛がつて呉れさうなものぢやないか。之を考へると餘程吾々の方が慈悲心が深いやうだワイ」

乙「よう理窟を云ふ奴だな。神界の事は人間界の理窟で解るものかい。至大無外、至小無内、千變萬化の神様の御働き、そんな人間を標準としての屁理窟を言つたつて、神様の大慈大悲の大御心が解るものかい。各自に身魂を研くが一等だ」

甲「さうすると此の海にござる龍神さまは、善の神と云ふのか。善の神なら一寸姿を現はして吾々に安心をさして下さつてもよかりさうなものだのにナア」

乙「何時でも現はして下さるよ。斯んなことは神様の自由自在だ。併し乍ら吾々のやうな穢苦しい身魂の人間が、龍神さまの頭の上を斯うして船に乗つて穢して渡つて居るのだから、何とも知れないよ。マゴマゴすると大變な御立腹を受けて荒波が立つて、船と一緒に龍宮行きをせにやならぬかも分らぬぞよ」

甲「たとへ船が「ひつくりかへつて」も、龍宮へ往けるならば結構ぢやないか。神様ばかり清らかな天や、海の底へ入つて地上の人間を斯んな惡魔の中に放つたらかして置くとは、「ちつと」量見が解り兼る。龍宮へ遣つて貰つて俺は一つ神様と談判をして地上の人間を守つて貰ふやうにしたいのだ」

乙「何程結構な龍宮へ往つた所で、自分の心の鏡が曇つて居れば、美しいことはないわ、鬼や、大蛇や、醜女、探女が四方八方から取圍むで苦しめに來るだけのものだよ。心相應に神様は現はれ給ふのだ。そこが千變萬化の神の御働きだよ」

斯く話す折しも俄に一陣の颶風颯と吹き起つて船をキリキリ廻し、山嶽の如き

浪を立て數十人の生命を乗せたる國武丸は、今や海中に没せむとするの光景とは
なりにける。

(大正一一・三・一〇 舊二・一二 外山豊二録)

第三篇 天岩戸開 (三)

第一七章 雲の戸開 (五一三)

日も早や呉の海原は、颶風頻りに至り、浪は山嶽の如くに立ち狂ひ、さしも堅
固なる國武丸も、今や水中に沈まむとする一刹那、船の一隅より聲も涼しく闇を
透して宣傳歌は聞え來たりぬ。

神かみが表おもてに現あらはれて

善ぜんと悪あくとを立たて別わける

倫理りんり道徳だうとく地ちを拂はらひ

醜しこの魔風まかぜは吹ふき荒すさび

鬼おにや大蛇をろちや曲津まがつ靈ひの

伊いたけ猛さけり叫ももぶ百もも聲こゑは

山やまの尾をの上へや川かはの瀬せや

大野おほのが原がはらや海原うなばらに

皆みな湧わき充みちて物もの凄すこく

世よは常暗とこやみとなりにけり

荒すさび果はてたる世よの中なかに

澄すみきりませる天あめ地つちの

正ただしき神かみは悉ことごとく

御空みそらも高たかく歸かへり坐まし

地ち上じやうを護まもる龍神たつがみは

海うな底ぞこ深ふかく隠かくるひて

大おほ海原うなばらに漂ただよへる

百もも八やそ十じま國くにや八やそ十じまの島しま

今いまや惡魔あくまの世よとなりて

萬よろづの禍わざはひむらがりつ

ウラルの山やまの山風やまおろし

コーカス山ざんの神風かみかぜも

一ひとつになりて呉くれの海うみ

善ぜんと悪あくとの戦たたかひの

巡めぐり合あふたる旋風つむじかぜ

罪つみを乗のせたる此この船ふねは

醜しこの魔風まかぜに煽あふられて

瞬またたく間うちに覆くつがへり

底そこの藻屑もくずとならむとす 此世このよを造りし神直日かむなほひ

心こころも廣ひろき大直日おほなほひ 直日なほひに見直しみなほ聞直しききなほ

醜しこの囁ささやき平たひらけく 詔のり直なほしませ呉くれの海うみ

永と久はに鎮しづまる橘姫たちばなひめの 神かみの命みことの荒魂あらみたま

救すくはせ給たまへ速すみやけく 心こころは堅かたき石凝姥いしこりどめの

神かみの命みことの宣傳せんでん使し 今いま吹ふき荒すさぶ時津風ときつかせは

心こころのもつれを時置師ときおかし 神かみの命みことの神司かむづかさ

四よ方もを廻めぐりて今いま此處ここに 國武丸くにたけまるの上うへに在あり

神須佐かむすさの男をの大神おほかみの 貴うづの御子おんこと生あれませる

橘姫たちばなひめよ神國かみくにを 思おもふ誠まことの眞心まごころを

救すくへや救すくへ百人ももびとも 共ともに救すくへや浪なみの上うへ

竝なみなみ々なならぬ吾願あがねがひ 心平こころたひらに安やすらかに

天津祝詞あまつのりとを聞きし召めせ 高天原たかあまはらに神集かみつどふ

神漏岐かむろぎ神漏美かむろみ二柱ふたはしらの 大御言おほみこともて皇御祖すめみおや

神伊邪那岐の大御神 筑紫の日向の橘の

おどの阿波岐が原に坐し 楔ぎ拂ひし其時に

鳴り出でませる四柱の 祓戸神の神御靈

幸ひまして許々多久の 罪や穢れを速川の

瀬に流すごと科戸邊の 風にて伊吹き拂ふごと

天津神等國津神 八百萬神諸共に

小男鹿の耳振り立てて 聞し召さへと詔り白す

此世を造りし大本の 皇大神よ願はくは

國武丸の人々を 大御心に見直して

救はせ賜へ惟神 御靈幸はひ坐し坐せよ

一二三四五つ六つ 七八九つ十百千

萬の神の御恵みに 萬の罪を拂ひ坐せ

三五教の宣傳使 石凝姥の神司

畏み畏み願ぎ奉る

と歌ひ終るや、さしも激しき暴風も、忽ち凪いで、呉の海面は、殆ど疊の上を滑
つて行くやうになつて来た。天津御空には皎々たる満月の光、東天に輝き初め、
船中の一同は甦りたる如き心地して、思はず月に向つて喜びの聲を放ち合掌して
感泣せり。

得も言はれぬ馥郁たる香氣四方に充ち、嚙曉たる音楽聞え、頻りに降り來る花
の雨、仰ぎ見れば中空に、天の羽衣翻へしつつ、

アナ面白や面白や アナ、さやけしや天津空

四方の國土も治まりて 醜の波風静まりぬ

神を敬ひ君を尊び 夫は妻を慈しみ

妻は夫に服従ひて 夫婦の仲も睦まじく

子はまた親を敬ひて 兄弟親しみ相助け

親しき友の寄り合ひて 誠を盡す神の代は

天津御神の治すなる 高天原の神の國

黄金山下に生れませる

埴安彦や姫神の

教へ給へる三五の

誠も高き天教山の

空に匂へる木の花姫

千代に八千代に咲く花の

榮え目出度き地教山

光となりて現れませる

神須佐之男の大御神

瑞の御魂と現はれて

コーカス山の神の宮に

國治立の大神や

金勝要の大神の

御魂を祝ぎ祭らせて

曲切り拂ふ都牟刈の

兩刃の太刀の神實に

天と地とに塞がれる

八重棚雲を切り拂ひ

拂ひ給へば天の原

大海原も明らけく

光り輝く朝日子の

日の出の御代と生くるなり

嗚呼石凝姥の宣傳使

コーカス山の神徳も

雲井に高く光彦や

巖の御魂の玉光彦

國光彦の神司

行平別や時置師

睦び合ふたる六人連
睦むつびあ合あふたるる六む人たり連づれ
よく聞し召せ平らけく
よきくき聞きしこ召めせめ平たらひけく

吾は木の花姫の神
吾われはこ木このは花な姫ひめめのか神み
嚴の御魂の分け靈
いげんのみたまのわけみたまいれるらいん

ハザマの國の春山彦の
ハはザまのくにはるやまひこ
貴の命や夏姫の
うづつのみことなつひめの

珍の娘と生れ逢ひ
うづつのむすめとうまああひあいひまいひ
皇大神の御爲めに
すめおほかみのおんたにならむ

此世を照らす三柱の
このよをてらすみはしらの
中の一人の橘姫よ
なかのひとりのたちばなひめ

底ひも知れぬ呉の海の
そこひもしれぬくれのうみ
司の神と任けられて
つかさのかみとままけられて

常磐に護る吾なるぞ
ときはまもわれなるぞ
心を淨め身を清め
こころをきよめみをきよめ

罪や穢れを橘の
つみやけがたちばなの
島に一度は船寄せて
しまにいちどはふねよせて

吾言靈を聞けよかし
わがことたまをきけよかし
畏き神の御教を
かしこのかみのみをしへ

四方に傳ふる神司
よもにつたるかむつかさ
小さき事に囚はれず
ちひのこととらはれず

虚空の外に身を置きて
こくうのそとみをおきて
神代幽世現世の
かみよかくりようつしよの

奇しき有様明らめて
くしきありさまあき
世人を救ふ皇神の
よびとをすくすめかみの

太き柱となれよかし
ふとのはしりとなれよかし

と優美なる歌、天空に聞え終ると共に、今迄舞ひ狂ひたる、天津乙女の姿は煙の如く消え失せ、紺碧の空には三五の明月皎々として海面を照し給ふ。
(大正一一・三・一〇 舊二・一二 谷村眞友録)

第一八章 水牛〔五一四〕

今まで暗黒に包まれたる天地は、忽然として現はれ出でたる三五の月に照されて、明さも明し呉の海の遙の沖に浮び出でたる橋島を眺めて、船客一同は船端を叩いて歡呼の叫びいや高く、沖の鷗の歌ふが如く、喜び勇むで島影目がけて進む行く。船頭は聲も涼しく、春風に送られて唄ひ始めたり。

海うみの底そこには龍宮りうぐうが見える
天あめと地つちとの眞釣まづりり合あひ
俺おれも龍宮りうぐうの寶たからが見みたい
波なみを開ひらいて呉くれの海うみ」

船の一隅より、大男又ツクと立つて、

月は照るとも呉の海
コーカス山の彼方より

現はれ来る紫の雲を迎へて眺むれば

黄金の玉か白玉か
天津乙女の雪の肌

花の姿に月の眉
橘姫の神司

御供の神を従へて
常夜の闇を照さむと

舞ひ降りたる御姿は
橘姫か深雪姫

隈なく照れる秋月姫の
神の命か白雲の

空分け上る雄々しさよ
コーカス山に舞ひ上り

ウラルの姫の醜神を
言向け和はし神祭り

仕へおほせて下り来る
石凝姥の宣傳使

神伊邪那岐の大神の
御帯と現れし時置師

神の命の宣傳使
石凝姥の石よりも

固く腹帯締め直し
時じく襲ふ曲神を

山の尾毎に追ひ拂ひ
川の瀬毎に吹き散らし

被清めて呉の海
國武丸に乗り込むで

進む折しも和田津神
醜の囁き曲言に

怒らせ給ひて時津風
波を荒立て旋風

船碎かむとする時に
天教地教や黄金山に

永久に現れます三五の
神の命の開きたる

いとも尊き太祝詞
心清めて宣りつれば

天津神たち國津神
大海原に現れませる

神も諾ひ給ひしか
風も鎮まり波さへも

いと穩かに治まりぬ
仰げば尊き神の島

橘姫の守ります
その神島も目のあたり

高く輝く大空の
月に心を任せつつ

罪科重き諸人の
汚れを乗せて進み行く

被戸四柱大御神

被はせ給へ現身の

罪や汚れや魂の垢

赤き心を皇神の

御前に清く奉り

日の出神の一つ火に

習ひて誠の獻げ物

仕へ奉らむ今日の旅

國武丸に今乗れる

百人、千人、萬人は

恵みも深き天地の

神の心を嬉しみて

身も魂も荒磯の

潮に清めて仕へよ

凡て天地の大神の

誠の道に叶ひなば

只一口の言霊も

神は諾ひ給ふべし

祈れや祈れ諸人よ

心一つに祈るべし

ア、惟神々々

御靈幸ひましませよ

と歌つて元の席に着く。

甲 〇イヤお蔭で、神様の此世に在ると云ふ事が明瞭して来た様だ。

吾々は彼の時

に、宣傳使が祈つて呉れなかつたら、今頃は魚腹に葬られて居る處だつた。天からは美しい女神様が澤山な供を連れて現はれ、何とも知れぬ馨の高い花を降らして下さつた。もう此れ限り神様の事は俺は疑はない。神は無いと思へばある。有ると思へば無い。兔も角、心の誠一つに神が宿つて下さると云ふ事丈は承知が出来たよ」

乙「それだから、己が何時も云うて居るのだ。神を認める迄のお前の心と、神を認めてからのお前の心と、どれ丈け違ふか」

甲「何だか今迄は此の世の中が不安で、向ふが暗い様で何時も恟々として、世間を怖れ人を疑ひ、遂には女房迄疑つて、修羅の妄執に悩まされてゐたが、今日は初めて世界晴れがした様な爽快な心になつたよ。これと云ふのも矢張吾々を守り給ふ、大慈大悲の神様の御恵みは云ふも更なり、三五教の宣傳使が眞心籠めて、天地にお祈り下さつたお蔭だナア」

乙「今、宣傳歌を歌はれたのは、お前誰だか知つてるか」

甲「何だか聞いた様な聲だが、餘りよく變つて居るので早速には思ひ出せない」

乙「あの方は何時やら、黒野ヶ原の孔雀姫の館で御目に掛つた御方ぢやないか」
丙「さうださうだ、捕手に向つた時に孔雀姫の館で、吾々五人の者が、猫を摘む
だ様に提げられ、どうなる事かと震々慄つて居た所、酒を飲まして結構な教を聞
かして呉れた宣傳使だ。その時俺達が、捕手の役は厭になつたから辭めると云つ
たら「お前達はそれが天職だから」と仰有つた方だ。何と悪い事は出来ぬもの
なア。世間が廣いと云つても、何處で出會すか分つたものぢやない。オイお前達
もお禮旁、コーカス山で御無禮を働いた事をお詫びしようぢやないか」
甲「そいつは一寸考へ物だぞ。牛、馬、鹿、虎の四人は随分寝返りを打つて、あ
つちに付きこつちに付き餘り宜くない事をやつてゐるから、迂闊名乗つて出よう
ものなら、今度こそ、どんな目に逢ふか分りやしない。マア知らぬ顔して居る事
だなア」
丁「それでも何だか濟まぬ様な心持がする、一視同仁を旨とする三五教の宣傳使
様がどうして吾々を苦しめる様な事をなさるものか。從順に名乗つて、お詫びも
し御禮も申上げたたら何うだ」

甲「お前達はそれで宜いが、この牛公は巖の中まで、澤山な宣傳使を引張込むで苦しめた、ウラル姫の捕手の頭だつたから、到底俺丈は助かりつこはない。貴様達が名乗つて出ると其序に俺の事が現はれて来るから俺を助けると思つて名乗るのは見合して呉れないか」

乙「そんな、股倉に何やらを挟むで居る様な氣味の悪い事が出来るものかい。此船には三五教の宣傳使が六人も乗つてゐるぞ。兔も角從順に、尾を掉つて此場を逃れるのだ、改心した様な顔して居れば宜いのだ。然しながら俺達は心の底から改心して居るのだが、どうしても貴様は發根の改心が出来ねば、貴様丈は柔順うして改心らしう見せて居れば宜いぢやないか。向ふの方から、オイ、其處に居るのは牛、馬、鹿、虎ぢやないかと云はれてからは餘り氣が利かぬぢやないか。

お月様が御出ましになつて、其處らが明くなり、風が止むで波がをさまり、ヤレ樂ぢやと思へば三五教の宣傳使の顔がアリアリと見え出した。こちらが見えると同様に、向ふも俺達の顔が透きとほる様に見えて居るに違ひない。嗚呼照る月も恨めしいが曇るのも恨めしいだらうな、牛公」

牛公「マアマア一寸思案さして呉れ。何だか大勢の前で、謝罪つたり叱られたりするのは見つとも宜くない。マア行く處まで行かうぢやないか」

丙「貴様は淡泊せぬ物臭い男だナア。徳利に味噌を詰めて逆に振つて出す様な男だ。綺麗な座敷の真中で、袴を着けた儘、澤山糞を垂れて、立つにも立たれずと云ふ體裁だ。貴様は牛公だから、最前からグツグツ云つて、謝罪りに行かうと云ふのにビクともせぬのは、大方股に牛糞でも挟むで居るのだらう。體好く、餘り海が荒れて怖かつたので牛糞が出たと白状せぬかい」

牛公「鹿公の云ふ通り、大きな聲では云へぬが、實は動く事が出来ぬのだよ、糞忌々しい」

かく語る折しも、時置師の宣傳使は、スツクと立つて此方に、人を分けて進み來り、

「イヤ牛公か、随分貴様は悪い奴だ、何うだ、最前の嵐は何う思つたか。貴様の様な悪人が乗つて居るものだから、龍神様が御立腹遊ばしたのだ。俺がこれから貴様の身體の惡魔を、引抜いてやらう」

「何、私の首を引抜く。それはマア待つて下さい」
「否、逢うた時に笠脱げと云ふ事がある。時に取つての時置師の荒料理だ、其處動くな」

乙「オイ牛公、本當に動くな、動くと臭いからな」

時置師神は委細構はず、牛公の前に進むで来る。牛公は、キヤアと一聲叫び乍ら月照り渡る波を目がけて、ザンブと許り飛び込み、ブルブルと音を立てて黒き姿は後白波と消え失せにけり。

折柄の順風に眞帆を上げたる國武丸は何の容赦もなく此悲劇を振り捨てて先へと進行を續くる。

(大正一一・三・一〇 舊二・一二 藤津久子録)

第十九章 呉の海原(五一五)

時置師神は牛公の投身したる海面に向ひて、暗祈黙禱しつつあつた。暫くあつて満面に笑を湛へ、悠々と元の席に返つて行くのであつた。馬公は小聲になつて、馬公「オイ鹿、虎、どうだ。三五教の宣傳使でさへも、牛公が海へ飛込むだのを見て、助けようともせず、愉快さうに、ニタリニタリと笑つて居つたぢやないか」鹿公「ウン、さうだのう、偉さうに人を助ける宣傳使だと云つた處で、口許りだよ。どうでコンナ世の中になつて來れば……誠の者は藥にする程も無い……と云ふ神様の教通りぢや。大きな聲で喋つて居ると、又どんな目に逢はせられるか知れやしないぞ。靜にせい、靜にせい、云ひたけら黙つてもものを云ふのだよ」馬公「黙つてもものを云ふ事が出来るかい、手品師でもあるまいし」虎公「出來いでかい、そこが以心傳心だ。目は口程にものを云ふと云ふ事がある。靈界物語にも耳で見て目で聞き鼻で物食うて口で嗅がねば神は分らぬ、と出て居るぢやないか」馬公「そんな事はどうでも良いわ。マア靜にしようかい。オイオイ時置師神が大きな目をむいて、ギロギロと見廻し出したぢやないか。どうやら御鉢が廻りさう

だぞ」

と云ひ乍らクルクルと帯を解きかける。

鹿公「オイ馬公、貴様帯を解いてどうするつもりだ」

馬公「喧し云ふない、是には秘密があるのだ。手廻しだ」

虎公「手廻して何だい」

馬公「牛公の様に着物を着たなりで、飛び込むでもつまらぬから、時置師神が

「コラツ」とやつて来よつたら、俺はチヤンと御先に此帯解き置かしの神様とな

つて、眞裸のまま海の中へドブんだ。貴様等も用意せ、用意を」

時置師神は四邊キヨロキヨロ見廻しながら、三人の囁き話を聞き、

「ヤアー、久しく逢はなかつた。御前等は牛公の同役、ウラル教の目附の馬、鹿、

虎の三人ぢやないか」

虎公「【トラ】違ひます、【シカ】と見て下さいませ、決して【ウマ】い事人を

詐る様な、正直な男ぢや御座いませぬ」

時置師「アハ、ハ、ハ、ハ、其狼狽へ様は何だ、裸になつて居るぢやないか」

馬公「裸で物は落しませぬからなア。肝腎の一つより無い命を落しては約らぬから、【まさか】の時の用意に裸になつて置ませうかい。烈しい時津風が吹いて、舟が覆る様な事があつては耐りませぬから」

時置師「御前は確に牛公の連だらう、人間は正直にするものだぞ」

馬公「ハイハイ、ドウド許して下さいませ。正眞の事を云つたら命がありませんわ。今日の時節は、眞實の事を云へば、悪い奴ぢやと云つて、酷い目に逢はされる世の中です。嘘が寶となる世の中、嘘から出た誠、誠から出た嘘、嘘か誠か、雨か風か、そこはそれ好い加減に操つて渡るのが當世の遣り方、決して決して此世の中に逆らう様な、悪い人間ぢや御座いませぬ。時世時節に従ふ善の遣り方、時さまに従ひます」

時置師「アハ、ハ、ハ、どこ迄もウラル教主義だなア」

鹿公「斯様斯う斯うシカジカの因縁によつて、【しか】も同じ國武丸に一蓮托生、袖振り合ふも他生の縁、躓く石も縁の端、團子食ふのも圍爐裡の框」

時置師「コラコラ何を云ふのだ、貴様の云ふ事は時々脱線するから困る」

鹿公しかこう「鹿しかり鹿しかり、時ときにとつての時ときさんへの御慰おなぐさみ、時世ときよじ時節せつは恐こはいもの、この廣ひろい世よの中なか、一つひとつや二つふた悪わるい事ことをしたつて、「まさか」時ときさまに遭でつ遇くわすとは思おもはなかつた。ア―ア―廣ひろい様やうで狭せまいは此世このよの中なかだ、まだまだ狭せまいのは舟ふねの中なか、も一つひとつ狭せまいは腹はらの中なか」

時置師ときおかし「ナカナ力よ能よう囀さへつる奴やつだなア」

鹿公しかこう「泣なく鹿しかよりも泣なかぬ螢ほたるが身みを焦こがす」

時置師ときおかし「シカ」夕ゆふの無ない奴やつだ。何なんだビリビリと震ふるひよつて」

鹿公しかこう「身からだ體たいに憑ついたる曲津神まがつかみを震ふるひ落おとして居ゐるのですよ。どうぞもうち私わたしの古ふるい罪つみは、貴方あなたもさつぱりと、是これで見直みなほし聞直ききなほし、都合つがふがついたら、他ほかの船ふねにでも乗のり直なほして下くだされば、大變たいへんに都合つがふが好よいのだがなア」

時置師ときおかし「貴様きさまは面白おもしろい奴やつだ、イヤ面黒おもくろい奴やつだ。まるで澁紙しぶかみ様の様やうな男をとこだ。顔かほに澁しぶ

味みがあつて一寸確ちよつとりした目附役めつけやく、捕手とりての役やくには持もつて來こいだ」

虎公とらこう「モシモシ時様ときさん、鹿公しかこうは最前さいぜんから随分ずぶん云いうて居ゐましたぜ。それはそれは大變たいへんに云いうてましたよ」

時置師「何を云うて居たのだ」

鹿公「ユフユフ自適、神様の有難い事を云うて居たのです。さうして三五教は結構な教立派な宣傳使が澤山ござる。中にも取り分けて御慈悲深い、神力の強い、男前のよい活神さまの様な宣傳使と云うたら、マー時さまの時置師神さまより外にはあるまい……と云うて御賞め申して居つたのですよ」

虎公「コラ鹿公、ユフユフ云ふない。モシモシ宣傳使様、鹿公のは嘘から出た誠でなくて誠から出た嘘ですよ」

鹿公「構ふない、虎の野郎、貴様は餘程卑怯な奴だ。俺等二人はどうなつても好い、貴様一人助かりさへすれば好いと思ふのか。よし、それなら俺にも考へがある。モシモシ宣傳使様、この虎公と云ふ奴、コーカス山の八王から澤山の手當を貰ひよつて、實の處は貴方の後を追従て來よつたのです、其證據には此奴懷に呑んでますぜ」

時置師「呑んで居らうが呑んで居るまいが、どうでも好いぢやないか」
虎公「モシモシ宣傳使様、私を能く了解して下さいませ」

鹿公しかこう「何を吐ぬかしよるのだ。そりや了解れうかいもして下くださるだらう。宣傳使せんでんしを何なに々なにしよう
と思おもうて、追従つげねろ覘ねろうて居をる悪い奴わるやつだから、懐ふところへ呑のんで居あると云いう事ことを、御了解ごれうかい
て下くださるワイ。蛙かはすは口くちから、ヒ首あいくちが塞ふさがらぬワイ」
かく話はなす折をりしも、舟ふねの前ぜんめんに見み上げる許ばかりの水柱みづばしら立たち昇のぼるよと見みる間まに、巨大きよだいな
る龜かめの背せに載のせられて、牛公うしこうは嬉うれしさうに海面かいめんに浮うかむで來きた。馬うま、鹿しか、虎とら一度いちどに、
「ヤアー牛公うしこうが……助たすかつた」

(大正一一・三・一〇 舊二・一二 岩田久太郎録)

第二〇章 救すくひ舟ふね (五一六)

あななひけう
三五教さんごけうの宣傳使せんでんし時置師神ときおかしのかみの眞心まごころ籠こめし其祈そのいのりに、海わだの神かみも感かんじ給たまひけむ、巨大きよだい
なる大龜おほがめとなり、海面かいめんに浮うかばせ給たまうた。牛公うしこうは龜かめの背せより時置師神ときおかしのかみに向むかつて、涙なみだ
を流ながしながら合掌がつしやうする。

時置師「ア、私のお祈りも、神様のお告の通り効験が顯はれて、命を助けられ
歸つて来た。サア結構々々、早く此船に乗つたり乗つたり」

龜は船に向つて近づいて来る。時置師神は右手をグツと延ばし、牛公の背を猫
を掴むやうな調子にてグツと掴むで船中に救ひ上げた。ゴボンゴボンと水音立て
て龜は海中に姿を隠した。

時置師「牛公さま、龍宮が見度いと云つて居たが、見られたかな」

牛公「イヤ牛々見られる所か苦しくつて苦しくつて、二三遍も息の根が斷れて了
ひました。さうすると貴方様が海の底へ潜つて来て私の腰を確り握り、救ひ上げ
て下さつたと思へば龜の背、こんな有難い事は御座いませぬ。もう牛牛公も今日

限り二本の角を折ります」

時置師「神様の有難い事が分つたら何より結構だ。オー、そこな鹿さま、馬さま、
虎さま、お前達も一度龍宮へ往つて見たらどうだ。都合によつたら又俺が助けに
往つてやらうも知れぬが、それは其時の都合だ。萬一俺が助けに往かなくつても、
因縁と申うて諦めるのだ。サア牛の次には馬かな」

と、グツと馬公うまこうの方ほうに向むかつて猿臂えんびを延のばす。

馬公うまこう「ウマウマウマ待つて下くださいませ、それは餘あんなりで御座ございます。こんな事ことがあらうと思おもつて、人ひとの嫌いやがる目付役めつけやくや捕手とりての役人やくにんをすつぱりと今日けふから辭やめますと云いつたのに、貴方あなたはお前まへの天職てんしやくだから辭やめなと仰おつしや有あつただや御座ございますか。それだから私わたくしは捕手とりての役やくをして三五教あななひけうの宣傳使せんでんしを隨分ずぶんぐるし苦くるめたのですが、かう見みえても從順すなほな男をとこ、貴方あなたの仰おつしや有ある通り固かたく守まもつて來きたものを、今更いまさら龍宮りうぐうへやるとは胴欲どうよくだ。アンアン、オンオン

時置師ときおかし「アハ、ア、此奴こいつは妙めつな馬うまだ。世よが變かはれば變かはるものだなア。ヒンヒンと云いうて嘶なく馬うまは澤山たくさんあるが、アンアンオンオンと云いふ馬うまの聲こゑは聞きき初はじめだ。ア

ハ、ハ、ハ、こんな嘶なき聲こゑをする馬うまは面白おもしろくないから、今度こんどは同じおな四よつ足あしの鹿しかの番ばんだ。鹿しかはカイ口くちと啼なくさうだ。かう見みえても海うみには道みちがついて居ゐる。【海路かいじろ】がある

のだ。鹿しかなれば海うみの中なかに放ほり込こむでも滅多めつたに困こまりはすまい。【カイ口くちウ】と思おもへば直すぐ歸かへれるから、船ふねにさへも櫂かい舩ふねがついて居ゐる。サア鹿公しかこう、お前まへの番ばんだぞ

鹿公しかこう「馬うまは海馬かいばと云いつて海うみにでも棲すむで居ゐます。虎とらは千里せんりの藪やぶでも飛とび越こえると

云ふのですから、龍宮行は馬公か虎公が適任でせう。鹿と云ふ奴は山の奥に居る奴で、海は一向不調法で御座います。さうして今は春で御座います。春駒と云つて馬の時節、筍の出る春先は虎の時節、鹿は秋が時節、秋まで待つて貰ひませう。三五教の教にも、時世時節には神も叶はぬと仰有るぢや御座いませぬか。龍宮行をする者は【シカク】が違ひます」

時置師「アハ、ハ、面白面白い、【しか】たがないなア、それなら思ひ切つて虎公かな」

虎公「モシモシ、私は不適任です。虎穴に入らば虎兒を獲ずと云つて、山に穴を掘つて穴の中に【こけつ】いて居る代物ですから、龍宮行は性に合ひませぬ。【ウミ】の父上母様は何處にどうして御座るやら、【こけつ】輾びつ探して見れば、人目に心奥山の、巖窟の中の佗住居、どうぞ許して下さいませ」

時置師「遠は虎公だ。名詮自稱、【とら】まへどころのない事を云ふ奴だ。そんなら龍宮行はこれで免除してやらう。其代りに俺について来るのだ」

虎公「ハイハイ、龍宮行さへ止めさせて下されば、何處へでもお伴致します」

時置師ときおかし「私の云ふ事は何でも諾くなア。張子の虎のやうに【まさか】の時になつて首を横に振りはせぬかな」

虎公とらこう「トラ御心配下さいますな、決して違背は致しませぬ」

時置師ときおかし「これから橘島へ船が着いたら、あの島には大きな虎が棲居をして居る事は聞いて居るだらうなア」

虎公とらこう「【トラ】もう昔の昔のトラ昔から聞いて居ります」

時置師ときおかし「トラ昔と云ふ事があるか、去昔だらう」

虎公とらこう「十二の干支の寅の裏は申、丑のうらは未だから一寸表の方から申上げました」

時置師ときおかし「橘島の虎の穴には大きな虎が二匹棲居をして居る。さうして此頃澤山の兒を産むで居ると云ふ事だ。其兒を捕まへに行くのが虎公の役だ。虎の兒と虎公はいい釣合だ、虎穴に入らずんば虎兒を獲ず、どうだ勤めるだらうなア」

虎公とらこう「トラ、モー、ニヤン、です、シカと、ウマくやれませぬワ」

月は西海に没し、久振にて東海の浪を割つて金色の太陽隆々と昇り来る。その

光景は得も云はれぬ爽快と畏敬の念に打たれざるを得ざりしと云ふ。

宣傳使を初め船中の人々は、この太陽に向つて拍手再拜、口々に神恩を感謝する聲天にも届くばかりなりける。

(大正一一・三・一〇 舊二・一二 加藤明子録)

第二章 立花島〔五一七〕

高光彦の宣傳使は石凝姥、時置師の二人に向ひ慇懃に挨拶を述べ、朝日に向つて宣傳歌を歌ひ始めたり。

☐ 朝日は光る月は盈つ 大海原に潮は満つ

潮満球や潮干の 大御寶と現はれて
波押し分けて昇る日の 光は清く赤玉の

緒さへ光りて白玉の 巖と瑞との其神姿

愈高く美はしく 豊榮昇る天の原

コーカス山も唯ならず 大海原に漂へる

四方の國々島々は 皆明けく成りにけり

日の出神の一つ火は 天津御空や國土に

照り渡るなり隈もなく 清き神代の守護神

三五教の御教を 千代に八千代に橘の

島に在します姫神の 齡も長き竹生島

橘島と名を變へて 呉の海原照しつつ

憂瀨に落ちて苦しむ 百の罪人助け行く

神の尊き試練に 遭ひし牛、馬、鹿、虎の

ウラルの神の目付役 心の嵐も浪も凪ぎ

今は漸く静の海 波風立たぬ歡喜に

枉の身魂を吹き拂ふ 旭日は空に高光彦の

貴の命の宣傳使

天津神より賜ひてし

玉光彦の神身魂

直日に照りて顯國

有らむ限りは光彦の

この三柱の宣傳使

國武丸に乗り合ひて

名乗り合ひたる十柱の

珍の御子こそ尊けれ

畏き神の御恵を

一日片時忘れなよ

神の恵を忘れたる

時こそ曲の襲ふ時

身に過ちの出る時

身に災の來る時

天と地との神々の

深き恵を忘るるな

神に次いで父母の

山より高く海よりも

深き恵も片時も

忘れてならぬ四柱の

牛、馬、鹿、虎神の御子

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

假令曲津は荒ぶとも

大地は泥に浸るとも

誠の力は世を救ふ

現界、幽界、神界を

通して我身を常久に 救ふは誠の道のみぞ

誠を盡せ何時迄も 身魂を研け常久に

朝な夕なに省みて 心を配れ珍の御子

ア、惟神々々 御靈幸ひませよ

御靈幸ひませよ

と歌ひ終つて舊の席へ復り合掌する。

船は漸くにして橋の島に安着した。六人の宣傳使を初め船中の人々は一人も残

らず島に上陸した。

牛公「ヤア有難い有難い、この橋島丸に乗つて居れば、どんな風が吹いた處で最

早沈没する虞は無いわ。假令天が地となり地が天となり、如何なる暴風吹き来る

とも、岩より堅い此船は牛公の腕の様なものだ。オイ馬鹿虎、何だ青黒い面をし

よつて鼻を拭かぬか、醜い」

馬公「チツト風を引いたものだからナア」

牛公うしこう「風かぜを引ひかなくても貴様きさまの鼻はなは年中ねんぢうだ、恰度てうど下水鼻げすゐばなだ」

時置師ときおかし「コラコラ、また噪はしやぎよるか。此島このしまは無駄むだ口ぐちを言いふ處ところで無ないぞ。畏おそれ多く

も須佐すさの男をのお大神ほかみ様の珍うづの三柱みはしらの御子みこ、劍つるぎの威徳ゐとくに現あらはれ給たまうた橘姫たちばなひめさまのお鎮しづま

り遊あそばす神島かみじまだ。チツト言こと霊たまを慎つつしむだが宜よからう。心得こころえが悪わるいと又また歸かへりがけに海うみ

が荒あれるぞ」

牛うし、鹿しか、馬うま、虎とらの四人よにんはハイハイと畏かしこまり、力ちから無なげに俯うつむ向むいて居ゐる。

此島このしまは世界せかい一切いっさいの所有あらゆる草木さうもく繁はん茂もし、稻いね麥むぎ豆まめ粟あはき黍びの類たぐひ、果物くだもの、蔓物つるもの總すべて自然しぜんに出で

來きて居ゐる蓬菜ほうらいの島しまである。地上ちじやうの山川さんせん草木さうもくは涸かれ干ほし、萎しをれて生せい氣きを失うしなひたるに

も拘かかはらず、此島このしまのみは水みづ々みづしき草木さうもくの艶つや、殊こと更さら美うるはしく味あぢ良よき果物くだもの枝えだも折をれむ

許ばかりに實みのりつつあるのである。何處どことも無なく絲竹しちく管絃わんげんの響ひびき幽かすかに聞きこえ、百花ももばな千ち花ばな

の馥郁ふいくたる香かう氣きは人ひとの心魂しんこんをして清鮮せいせんならしめ、腸はらわたをも洗あらひ去さらるる如ごとき爽快さうくわいの

念ねんに充みたさる。

玉光彦たまてるひこは潮水しほみづに手てを洗あらひ口くちを漱すすぎ聲こゑ爽さわかに歌うたふ。

天津御神や國津神

花も非時薫るなり

味も殊更美はしく

神の造りしパラダイス

斯く美はしき珍の島

荒び果てたる荒野原

波を渡りて来て見れば

大御恵は目のあたり

橘姫の御神姿

高天原の神の國

千代に八千代に此榮え

神の命の御舎と

色も褪せざれ葉も散るな

神の恩恵の常久に

選びに選びし此島は

薫りゆかしき樹々の實は

色鮮かに光るなり

永久の教の花咲きて

高天の原と開けしか

山川越えて今此處に

思ひも寄らぬ清の島

四邊輝く島山の

鏡に映る如くなり

高天原のパラダイス

變らざらまし橘姫の

常磐の松の永久に

神の守護の永久に

と歌つて神の御徳を讚美したりき。

國光彦は又もや涼しき聲を張り上げて、

☐ 雲井の空の限りなく 海の底ひの極みなく

満ち足らひたる神の徳 神の水より生れたる

此神島に来て見れば 百の草木は生茂り

青人草の非時に 食ひて生くべき食物

百の木の實も豊やかに 枝も撓わに實るなり

天津日影はいと清く 波また清き呉の海

神の御子たる民草の 心の色の清ければ

此島のみか四方の國 何處の果ても天地の

神の恵に潤ひて 樂み盡きぬパラダイス

神の心を愼みて 深く悟りて三五の

誠の教に服へば 御空は清く地清く

波平なみたひらけく山やまや野のは
 松まつの神かみよ世とこの常とこ久はに
 ねまがぢけ曲まがれる人ひと心こころ
 醜しこ言こと靈たまの醜しこの呼い吸き
 水みづまで涸からす愚おろかさよ
 心こころを清きよめ身みを清きよめ
 誠まことの道みちを傳つたふべし
 姫ひめの命みことの知し食しめす
 波なみも静しづまれ四よつの海うみ
 醜しこの醜しこ草くさ薙なぎ拂はらひ
 天あめ地つち四よ方もの國くに々にを
 嗚あ呼たふと尊としや有あ難りがたや
 君きみの恵めぐみの極きはみなく
 人ひとと人ひととは親したみて
 何時いつも青あを々あを松まつ々まつ緑どり
 榮さかえしものを現うつ身そみの
 日ひに夜よに天てん地ちを穢けがしたる
 草くさ木きを枯からし山やま河かはの
 嗚あ呼あこの島しまを鑑かがみとし
 四よ方もの國くに々くに皇すめ神かみの
 世よは常とこ久はに橘たちばなの
 橘たちばな島しまのいと清きよく
 魔ま神がみの猛たけぶ葦あし原はらの
 天あまの岩いはと戸を押おし開ひらき
 日ひの出で國くにと開ひらくべし
 神かみの恵めぐみの限かぎりなく
 親おや子こ夫ふう婦ふは睦むつび合あひ
 歡えらぎて暮くらす神かみの國くに

一度いちどに開ひらく白梅しらうめの

花はなの薰かをりを松竹まつたけの

清きよき操みさをも變かはらざれ

清きよき神かみよ世よも變かはらざれ

堅かきは常盤ときはの松まつ緑みどり

三みつ口くちの神かみが現あらはれて

天津あまつを教しへを經緯たてよこの

綾あやと錦にしきの機織はたおらす

ア、惟かむながら神かむながら々々

御靈みたまの幸さちを願ねがふなり

千代ちよに八千代やちよに常久とことはに

千代ちよに八千代やちよに常久とことはに

行平ゆきひら別わけは大口おほぐちを開あけて又またもや歌うたひ始はじめた。

山川やまかはどよみ國くぬち土ち揺ゆり

青垣あをがき山やまは枯かれ果はてて

何處どこも彼處かしこも火ひを點とほす

野邊のべの百草ももくさ露つゆも無なく

菱しをれ返かへりて枯かるる世よに

神かみも守まもつて吳くれの海うみ

唐紅からくれなゐの如ごとくなる

枯野かれのの原はらの地つちの上うへ

露つゆを帶おびたる綠葉みどりばは

一ひとつも無なしと思おもふたに

これやマア何とした事か
この島だけは青々と

五穀は稔り木は榮え
果物熟して甘さうな

自然に唾が濡る
一視同仁神様の

心に似合はぬ何として
此島だけは幸多き

思ひまはせば廻す程
腹が「たち」ばな島の山

云ひたい理窟は山々あれど
心穢き人間の

身の分際を省みて
理窟を言ふのは止めにしよう

人さへ住まぬ此島に
米が實つて何になる

果物熟して何とする
餘りに神は氣が利かぬ

サアこれから此方の
生言靈の力にて

四方の國々島々に
縁の木草珍の稻

豊の果物一々に
移して世人を救ふべし

橘島の女神よ
行平別の言靈を

うま怜に委曲に聞こしめせ
若しも諾かれなそれでよい

行平別にも腹がある

聞いた印にや一時も

早く姿を變へられよ

此島山が枯れ果てて

枯れ野の如くなつたなら

豊葦原の國々は

皆生々とするであらう

橘姫は只一人

榮えの國に安々と

其日を暮し四方國の

靑人草の悩みをば

他所に見るのか逸早く

印を見せよ片時も

疾く速やけく我前に

と大音聲に呼つた。此時何處ともなく忽然として現はれたる高尚優美の橘姫は、

右の手に稻穂を持ち、左の手に橙の木實を携へて來り、天の數歌淑かに歌ひ終つ

て右の手の稻を天空高く放り上げ給うた。稻穂は風のまにまに四方に散亂し豊葦

原の瑞穂の國を實現する事とはなりぬ。左の手に持たせ給ふ木實を又もや中天に

投げ上げ給へば、億兆無數の果物となつて四方に散亂しければ、豊葦原の瑞穂國

の食物果物はこれより良く實り、萬民安堵する神世の端緒を開かれにける。これ

あま
天の岩戸開きの一部いちぶの御神業ごしんげふなり。

ちなみ
因いに曰いふ
たちばなひめ
橘姫たちばなひめは三光さんくわうの一人ひとりなる國光彦くにてるひこの宣傳使せんでんしと共に夫婦ふうふとなり、この島しまに
あらい
永遠えいゑんに鎮まりて國土鎮護こくとちんごの神かみとなつた。天あめの眞奈井まなゐに於ける日神ひのかみとの誓約ちげひの段だんに
あら
現はれたる三女神さんによしんの中の多岐都比賣命たきつひめのみことは橘姫命たちばなひめのみことの後身こうしんなりと知るべし。

（大正一一・三・一〇 舊二・一二 北村隆光録）

第二章 一島攻撃ひとつしまこうげき（五一八）

おほぞら
大空おほぞらに雲立くもたち塞ふさぎ海原うなぼらに
きりた
霧立きりたち籠こめて四方よもの國くに

かみ
神かみの惠めぐみの露つゆもなく
やまかはくさき
山川草木やまかはくさき泣なき干ほして

あやめ
黑白あやめも分わかぬ暗やみの夜よを
いま
今いまや照てらさむ瀬戸せとの海うみ

もも
百ももの神かみたち百もも人を
まつ
松まつの神代かみよの末長すゑながく

救はむために素盞鳴の神の御言を畏みて

思ひは積る深雪姫 解くるよしなき真心の

誠一つの島 熱き涙の多氣理姫

コーカス山に現れませる 十握の劍の威徳にて

雲霧四方に切り拂ひ 醜の曲津を除かむと

高杉別の籠りたる この神島に宮柱

太敷立てて世を偲ぶ 瑞靈の深雪姫

吹き來る風も腥く 人馬の音は絶間なく

矢叫びの聲鬨の聲 世は騒がしく群鳥の

群れ立つばかり沖つ鳥 沖の鷗の聲さへも

いと佗しげに聞ゆなり ここは名に負ふサルジニヤ

神の守りもアルプスの 鋼、鐵取り出でて

百の兵器造りつつ 珍の御魂と仕へたる

心も猛き兵士は 雲の如くに集まれり。

コーカス山の珍の宮に、御巫子として仕へたる、月雪花の姉妹の一人、深雪姫は、尚武勇健の氣質に富み、十握の劍の威徳に感じて、アルプス山の鋼鐵を掘出し、種々の武器を造り備へて、國家鎮護の神業に奉仕せむと、天下の英雄豪傑を此島に集め、惡魔征討の準備に備へつつあつた。

宮殿の屋根は千木、勝男木を高く、千木の先は鋭利なる兩刃の劍を以て造り、勝男木もまた兩端を劍の如く尖らせ、館の周圍には劍の垣を繞らし、曲津の侵入を許さず用心堅固の金城鐵壁なりける。

武勇の神は先を争うてこの一つ島に集まり來り、天下の邪神を掃蕩し、遍く神人を安堵せしめむと晝夜間斷なく武術の稽古に餘念なく、劍戟射御に勤む聲は瀬戸の海を越えて、遠く天教山に鎮まります撞の御柱の神、天照大神の御許にも、手に取るが如く轟き渡りぬ。

天照大御神は、善言美詞をもつて世の曲業を、見直し聞き直し詔り直すべき天地惟神の大道を無視して、殺伐なる武器を造り武藝を勵むは弟神素盞鳴命の高天原を占領せむとする、汚き心のあるならむと、内心日夜不快の念に驅られ給ひつ

つあらせられた。

四五の勇士は武術の稽古を終り、眺望よき一つ島の山巔に登り、諸々の木實を漁り、瓢の酒を傾けながら雑談に耽り居る。

甲「我々はかうして晝夜の區別なく太刀打の稽古、槍の稽古に體も骨もグダグダになつて仕舞つた。太刀と槍との稽古が濟めば、また弓の稽古、馬乗りの稽古と強られるのだ。敵も無いのに此離島で、これだけ武藝を勵まされるのは何のためだらう」

乙「平和の時に武を練るのが武術の奥義だ。サア戦争が勃發したからと云つて、俄に慌てたところが、何の役にも立たない。武士は國を護るものだ。常から武術の鍛練が必要だから、それで日々稽古をさせられるのだよ」

丙「かう毎日日日空は曇り、地は霧とも靄とも知れぬ物が立ち籠めて、一間先が碌々見えぬやうになつて來たのだから、此世の中が物騒で、安心して暮されぬやうになつたので、各自護身のために、大慈大悲の神様が武術を奨勵なさるのだよ」

甲「三五教の教には……神は言靈をもつて言向け和すのであるから、武器をもつ

て征伐を行つたり、侵略したり、他の國を併呑するやうな體主靈從的の教でない。道義的に世界を統一するのだ……と仰せられて居るではないか、何を苦しむで武備を整へ、平地に浪を起すやうな事をなさるのだらう。まるでウラル教のやうぢやないか」

乙「さうだなア、三五教の教理とは名實相反して居るやり方だ。大聲では言はれぬが、これや何でも深雪姫の神様に八岐の大蛇か、鬼が憑いて爲せるのだらうよ」
丙「實際それだつたら我々は實に約らぬものだ。一生懸命骨身を碎くやうな辛い稽古をさせられて、天則違反の大罪を重ねるやうでは約らぬじゃないか」

丁「神様が武を練り、數多の武器を蓄へ給ふのは變事に際して天下萬民を救うためだよ。大慈大悲の神様が何しに好むで殺伐な修業を遊ばすものかい。惡魔は劍の威徳に恐れ、武術の徳によつて心を改め、善道に歸順するものだ。如何に善言美詞の言靈と雖も、曇り切つたる惡神の耳には入るものでない、そこで神様が慈悲大信心を發揮して、眼にものを見せて、改心させると云ふお經綸だ。素盞鳴命様は一寸見たところでは、實に恐ろしい、猛しい戦好きの神様のやうだが、決し

て殺伐な事はお好みにはならぬ。それ故に此世に愛想を盡かして、圓滿具足温和なる月の大神の世界へ歸り度いと云つて、日夜御歎き遊ばし、慈愛の涙に暮れて居られると、そこへ御父神が天よりお降りになつて、お前のやうな氣の弱い事ではどうして此世が治まるか、勇氣絶倫の汝を選むで、惡魔の蔓る海原の國を修理固成せよと命令を下してあるに、その女々しいやり方は怪しからぬ、と云つて大變に御立腹遊ばしたので、素盞鳴命様は、姉君の天照大神にお暇乞のために、高天原にお上りになつたと云ふ事だ。其御魂を受け繼いだる珍の御子深雪姫様は、尚武勇健なる女神に在す故に「まさか」の時の用意に武を練つて居らるのであらうよ。武術は決して折伏のためではない、攝受のためだ。惡魔を拂ひ萬民を救ふ眞心から出でさせられた御神策に違ひないワ」

甲「お前はよく詳しい事を知つて居るなア、一體何處から來たのだ。此道場へ來てから未だ間もないに、武術は中々立派なものだなア」

丁「俺か、俺は元は百姓だ。御年村の虎公と云ふ男だよ」

甲「ヤア、お前があの名高い自稱良の金神だな、道理で大きな男だと思つたよ」

虎公とらこう「アア、確たしかに夫それとは分わからぬが、何なんだか館やかたは騷さうだう動どうがおつ始はじまつたやうだ。サア
皆みなの連れんちう中ちゆう、愚ぐ圖づ々づ々づしては居をれない。早はやく館やかたへ驅かけつけよう」
と虎とらさまを先せん頭とうに一同いちどうは丘をかを下くだり、館やかたを指さして一いっ散さん走ばしりに驅かけり行く。

(大正一一・三・一一 舊二・一三 加藤明子録)

第二三章 短兵急たんべいきふ (五一九)

一ひとつ島しまなる深みゆき雪ひめ姫めケ館やかたの高たか樓どのより、眼がん下かの海かい面めんを見み渡わたせば、幾いく百ひやく千せんとも限かぎりな
き軍いくさ船ふね、魚ぎ鱗りんの備そなへ堂だう々だうとして島しまを目め蒐がけて押おし寄よせ來きたる物もの々ものしき。唯ただ事ことならじと
深みゆき雪ひめは近きん侍じの老らう臣しん高たか杉すぎ別わけを近ちかく招まねき宣のり玉たまふ。

「高たか杉すぎ別わけ殿どの、妾わらはは今いま此この高たか樓どのより海かい面めんを眺ながむれば、此こ方なたに向むかつて攻せめ來くる數あ多またの
兵ひやう船せんウラル彦ひこの魔ま軍ぐんか、天てん教けう山ざんに現あれませる皇すめ大おほ神かみの神しん軍ぐんか、慥たしかに見み届とどけ來きたられ

よ」

と下知すれば、高杉別は、

「委細承知仕りました。われは是より當山を下り、事の實否を糺した上直に報告仕るべし」

と云ふより早く馬に跨り、深雪ヶ丘を濱邊に向つて夏々と下り行く。深雪姫は又もや大國別を近く招き、

「アイヤ大國別殿、當山に攻め寄せ來る數多の軍勢唯事ならず。假令ウラル彦の魔軍にもせよ、必ず武器を以て之に敵對すべからず、善言美詞の言靈を以て曲を言向け和すは神須佐之男の命の大御心、この館には數多の武器、兵士、充ち備へありと雖も、決して敵を殺戮する目的に非ず。天下の神人が心に潛む曲津軍を、劍の威徳に依つて怯ぢ怖れしめ歸順せしむるの神器なれば、弓は袋に、劍は鞘に納まり返つて、總ての敵に臨むべく部下の將卒にも此旨厳しく傳へられよ」と言嚴かに宣示された。

大國別「敵は雲霞の如く、當山に向つて攻め來り、島人を殺戮し、民家山林を焼き拂ひ、火は炎々として最早館の間近く燃え寄せたり。日頃武術を鍛へたるは斯

る時の用意ならめ。研き置いたる弓矢の手前、膽を練りたる將卒の今や武勇の現はれ時、この時を措いて何れの時か戦はむや。みすみす敵に焼き滅されむは心もとなし。神は至仁至愛に坐ませども時あつて折伏の利劍を用ひ給ふ。況んや、コーカス山に鎮まり給ふ、十握の寶劍の御魂の威徳に成り在せる貴神に於てをや。血迷ひ給ひしか、今一度反省されむ事を希ひ奉る」

深雪姫「劍は容易に用ふ可らず。劍は凶器なり。凶を以て凶に當り、暴を以て暴に報ゆるは普通人の行ふ手段、苟くも三五教を天下に宣傳する天使の身として、また宣傳使の職として、善言美詞の言靈を閑却し、武を以て武に當るは我が心の許さざる所、ただ何事も至仁至愛の神に任せよ。武を尚び雄健を尊重すると云ふは、構へなきの構へ、武器あつて武器を用ゐず、武器無くして武器を用ゐ、能く堪忍び、柔和を以て狂暴に勝ち、善を以て惡に對し、神を以て魔に對す、柔能く剛を制するは神軍の兵法、六韜三略の神策なり。汝此主旨を忘却する勿れ。吾はこれより奥殿に入り、大神の御前に神言を奏上し、寄せ來る敵を言向け和さむ。一兵一卒の端に至る迄、今日に限り武器を持たしむるべからず」

と宣示し、悠々として奥殿に入らむとなしたまふ。大國別は、深雪姫の袖を控へて、

「まづまづ暫くお待ち下さいませ。追ひ追ひ近づく矢叫びの聲、如何に善言美詞の神嘉言を以て言向け和さむとすればとて、暴力には及び難からむ。吾はこれより部下の將卒を勵まし、寄せ來る敵を縦横無盡に斬り立て、薙拂ひ、日頃鍛へし武勇を示さむ。此事計りは強つて御許し下さいませ」
と拳を握り身を震はし、雄健びしつづ願ひ居る。深雪姫は悠々迫らず、悠長なる音調にて、

「神が表に現はれて
此世を造りし神直日
只何事も人の世は
世の曲言は宣り直せ
誠の力は世を救ふ

善と惡とを立別ける
心も廣き大直日
直日に見直せ聞き直せ
正義に刃向ふ劍なし
神を力に三五の

神かみの教をしへを杖つゑとして

如何いかなる敵てきの來きたるとも

神かみの嘉言よごとに言向ことむけて

敵てきを傷きずつく事こと勿なれ

神かみは汝なんじと俱ともにあり

神かみは誠まことを立たて徹とほす

誠まことで人ひとを救すくふべし

今いまは身魂みたまの試ためし時とき

心こころの持方もちかた一つにて

善ぜんも忽たちまち惡あくとなり

惡あくも忽たちまち善ぜんとなる

善ぜん惡あく正邪せいじやの分水嶺ぶんすゐれい

天あめが下したにはおしなべて

敵てきも味方みかたも無なきものぞ

味方みかたも時ときに敵てきとなり

敵てきも味方みかたとなり變かはる

只何事ただなにごとも人ひとの世よは

神かみに任まかせよ悉ことごとく

心こころを焦いらちて過失あやまつな

神かみは汝なんじと俱ともに住すむ

朝日あさひは照てるとも曇くもるとも

月つきは盈みつとも虧かくるとも

假令たとへ大地だいちは沈しづむとも

此この神島かみしまは燒やけるとも

神かみは必かならず吾々われわれが

赤あかき心こころを御覽みそなし

安やすきに救すくひ給たまふべし

誠まこと一つの玉銚たまぼこに

寄せ来る敵を言向けて

神の力を現はせよ

神の穢威を輝かせ

と歌ひながら、奥殿に姿を隠させ玉ふ。

數萬の軍勢は全島に火を放ち、折からの風に煽られて黒煙濛々として四邊を包み、數多の將卒は何れも雄猛びして、防戦の命の下るを今や遅しと固唾を呑むで控へゐる。

大國別は雙手を組むで、青息吐息、如何はせむと思案に暮る時しもあれ、駒の足音夏々と走せ歸りたる高杉別はヒラリと駒を飛び下りて、大國別の前に現はれ、

「ヤア大國別殿、貴神は何故防戦の用意をなさらぬか、敵は四方より數萬騎を以て當山を圍み、山林に火を放ち既に當館も烏有に歸せむとする場合、何を躊躇さるるや」

と膝を叩いて唼鳴り付けたるにぞ、大國別は何の答もなく雙手を組むだ儘俯むき

涙さへ腮邊に傳ふるを見て取つた高杉別は悖かしげに、

「エイ、日頃の武勇にも似ず、千騎一騎の此の場合、敵の勢力に萎縮して、周章狼狽の餘り、憂苦に沈む卑怯未練な貴神の振舞、最早斯くなる上は、貴神に相談するも何の益あらむや。吾れはこれより館の將卒を率ゐ、此處を先途と一戦を試み、勝敗を一時に決せむ」

と雄健びし乍ら、スタスタと此場を立つて表に出むとするを、大國別は言葉をかけ、

「ヤア高杉別殿、貴下の御意見御尤も千萬、吾れとても當館の主宰神、闇々敵の蹂躪に任せ袖手傍觀するに忍びむや。さは然り乍ら、至仁至愛の大神が天下救濟の御神慮は慎重に考慮せざる可からず。貴神暫く熟考せられよ」

「大國別殿の言葉とも覚えぬ。卑怯未練な陳辨、貴神は本島を守り給ふ深雪姫の神の宰神ならずや。斯かる卑怯未練の御心掛にて闇々敵に占領されなば、何を以て深雪姫の神に言解けあるか。アレアレ聞かれよ、山嶽も轟く許りの敵の叫び聲、到底貴神の賛成は覺束なければ、吾れは是より單獨にて自由行動に出で、本島に

攻め寄せ來たる雲霞の如き大軍を、日頃鍛へし武力を以て塵殺せむ
と勢込んで表をさして驅出す。

「ヤアヤア高杉別殿、暫く暫くお待ちあれ」

「何ッ、此期に及むで暫時の猶豫がならうか、勝てば官軍負くれば賊、大國別殿、拙者が武勇を御目に掛けむ」

と云ひ捨てて表門へと驅出だし、部下の將卒に向つて、戦闘準備を命令せむとす
る折しも、深雪ヶ丘より歸り來れる手力男の神は此體を見て、

「ヤア、大變に面白くなつて來ましたね。一つ敵軍の行列を緩りと、酒でも飲む
で見物致しませうか」

高杉別「汝は、御年村の自稱丑寅の金神手力男ではないか。かかる危急存亡の場
合、何を悠々として氣樂さうに構へて居らるるや。千騎一騎の此場合、防戦の用
意をなされ」

「アハ、ハ、ハ、ヤア面白い面白い、高杉別のその狼狽かた、イヤもう臍が宿換い
たすワイ。アハ、ハ、ハ、マアマア緩り落着いて敵軍の襲撃を見てそれを肴に一杯

やらうかい。ヤア誰も彼も酒だ酒だ、殺伐な劍や槍や弓の様な物は神様の鎮まり
給ふ聖地に於て用ふる物ではない。武器は兇器だ」

高杉別はクワツと怒り、

「放縦無責任の汝の言葉、門出の血祭りにせむ」

と一刀を抜いて眞向より斬りかかる。手力男神は、門柱をグツと引き抜き頭上高
く振り翳し、高杉別を押し付けた。

高杉別「ヤア、貴様は今まで忠實なる味方と見せかけて、内外相呼應して、此聖
地を占領せむと計畫しつつありし曲者ならむ。たとへ吾身は殺されて歸幽する共、
我誠忠正義の靈魂は地上に留まり、汝が悪念を懲さで置くべきか」

手力男神「アハ、ハ、ハ、ハ、モシモシ高杉別殿、誤解されては困りますよ」

と云ひながら門柱をサツと取り除けた。高杉別はその刹那、飛鳥の如く飛びかか
つて、

「反逆無道の曲者思ひ知れや」

と云つて、手力男の脇腹目蒐けて突きかかる。手力男はヒラリと體を躲したる途

端に、高杉別は狙ひ外れて勢餘り、七八間も前方にトントントントと走つて拔
刀の儘ピタリと倒れた。

黒煙は益々館を包み、風に煽られて全山樹木の焼ける音、攻め寄せ来る人馬の
物音、刻々に近付高まり來たりぬ。

(大正一一・三・一一 舊二・一三 藤津久子録)

第二四章 言靈の徳 (五二〇)

手力男神は正門に現れ、儼然として敵軍の襲來を心待に待つて居る。

天菩比命は數多の軍勢を引連れ、軍卒は手に手に松明を持ち、四邊に火をつけ
焼き滅ぼしつ々進み來る。後よりは一隊の軍勢、血刀を振つて登り來る。その光

景恰も地獄道の如く思はれけり。

菩比命は門前に現れ、手力男神に向ひて、

菩比命ほひのみこと「オー、汝なんじは何神なにがみなるか、速須佐之男はやすさのをの惡逆無道あくぎやくぶだうなる邪神じゃしんに從したがふ曲津神まがつかみ、我われは天教山てんけうざんに在まします撞つきの御柱神みはしらのかみの神命しんめいを奉ほうじ、汝等なんぢらを征伐せいばつせむが爲ために立向たちむかうたり。最早もはやこの島しまは殆ど燒やき盡つくし、汝等なんぢらが部下ぶかの將卒しやうそつは、大半刃たいはんやいばの鏑さびと消きえ失うせたらば、最早もはや抵抗ていかうするの餘力よりよくもなかるべし。イザ尋常じんじやうに此門このもんを開ひらき降伏かうふくせよ」と馬上ばじやうに跨またがつた儘まま、威丈高ゐたけだかに呼よばり居をる。手力男神たぢからをのかみは莞爾くわんじとして、門もんを左右さいうにサツと開ひらき、

「サアサア、門もんは斯かくの如ごとく開放かいほう致いたしました。何卒なにとぞ御自由ごじゆうに御這入おはいり下くださいませ。數多あまたの軍卒等ぐんそつたちに於おいても、嘸さぞお疲つかれで御座ございませう。是丈これだけの島しまに火ひを放はなつて燒やきなさるのも竝大抵なみたいていの御苦勞ごくらうでは御座ございますまい。御蔭おかげでこの島しまを荒あらす猛獸まうじう毒蛇どくじゃも殆ほとんど全滅ぜんめつ致いたしました。お腹なかが空すいたでせう、喉のどがお乾かわきでせう。此處ここに澤山たくさんの握にぎり飯めし、酒さけも用意よういがして御座ございます。何萬人なんまんにんのお方が御上おあがり下くださつても恥はぢを搔かきませぬ。どうぞ緩ゆるりと御上おあがり下くださいませ。その様やうに恐こはい顔かほをして、肩臂かたひぢ怒いからし、固かたくなつて居をられては御肩おかたが凝こりませう。我々われわれは善言美詞ぜんげんびしの言靈ことたまを以もつて、直日なほひに見み直し宣のり直なほす、神須佐之男かむすさのをのおほかみ大神ごしんりよの御神慮ごしんりよを奉戴ほうたいするもの、決けつして決けつして酒さけにも飯めし

にも毒などは入れて居りませぬ、御緩りとお召し上り下さいます様に」

菩比命「ヤアー、汝は百計盡き、毒を以て、我等を全滅せむとの巧であらう。そ

の手は食はぬぞ」

「是は是は、迷惑千萬。然らば手力男が御毒見を致しませう」

と云ひ乍ら、酒樽に柄杓を突き込み、掬うては二三杯グツと飲み、握り飯を矢庭

に五つ六つ頬張つて見せた。

「然らば暫く休息いたす。今の間に館内の者共、城明渡しの準備を致せ」

「マアマア、さう厳しく仰せられるに及びませぬ。同じ天地の神の水火より生れ

た人間同志、心一つの持様で敵もなければ味方もない、何れも神の水火より生れ

た我々、天下の喜びも天下の悲しみも皆一蓮托生でゐる」

「汝はこの場に望んで氣樂千萬な事を申す奴、何か深い秘密が包まれてあるに相

違なからう。左様な事に欺かるる菩火ではないぞ」

「手力男の秘密と申せば七十五聲の言葉、美言美詞の神嘉言の威徳に依つて、天

地清明國土安穩、病無く争ひ無く、天下太平にこの世を治める、言葉の秘密より

外には何物も御座いませむ

高杉別はこの場に立現れ、

「オー、手力男殿、唯今奥殿に進み入り、深雪姫の御前に致つて、御神慮を伺ひ奉るに、瑞の御霊の御仰せ、言霊を以て荒ぶる神を言向け和せとの御戒め。イヤハヤ貴神の遣り方には高杉別も感服致した。大國別様も貴神と同様の御意見で御座る」

「左様で御座らう。オー、菩比命様、斯の如く當館は表は武器を以て飾り、勇敢決死の武士も數多養ひ居れども、御覽の如く、貴神が獅子奮迅の勢を以て、血染焼盡しの攻撃軍に向ひ、悠揚せまらず御覽の如く、劍は鞘に弓は袋に納まり返つた此場の光景、刃に血塗らずして敵を喜ばせ、敵を味方と見做して取扱ふは、仁慈の神の思召よくよく大神の御誠意を御認識の上、撞の御柱の大神に具さに言上あらむ事を望みます」

「案に相違の貴神らの振舞、今まで逸り切つたる勇氣も、何處やらへ消え失せた様な心地で御座る。ヤアヤア部下の將卒共、菩比命が命令だ、直ちに甲冑を脱ぎ

捨て、武器を放し、この場に一同集まつて休息を致せ[□]

此一言に、逸り切つたる數多の將卒は、武装を解き、この場に喜々として現れ
來り、酒に酔ひ握り飯に腹を膨らせ、歡喜を盡して踊り舞ひ修羅は忽ち天國と化
したり。

この時深雪姫命は大國別に導かれ、門内の廣庭に、數多の軍卒及び部下將卒の
他愛もなく酒酌み交し喜び戯るる前に現れ、聲も涼しく歌ひ始め賜ふ。

□ コーカス山に現れませる 瑞の御靈の御言もて

御山を遠くサルヂニヤ この神島に現れて

世の有様を深雪姫 八十の曲津の猛びをば

鎮めむ爲に言靈の 珍の息吹を放てども

曇り切つたる曲津見の 服らふ由もなきままに

神の御靈の現れませる 十握の劍を數多く

造りそなへて世を守る 神の心は徒らに

劍を以て世を治め

弓矢を以て曲神を

言向け和す爲ならず

心の靈を固めむと

玉の劍を打たせつつ

神世を開く神業を

天教山に現れませる

撞の御柱大神は

いよいよ怪しと思召し

深くも厭はせ嫌ひまし

菩比命に言任けて

此處に攻め寄せ玉ひしは

我等が心を白波の

瀬戸の海よりいや深く

疑ひ玉ふ驗なり

七十五聲の言靈に

世の悉は何事も

直日に見直し聞直し

言向和し宣り直す

誠一つの一つ島

天の眞名井にふり滌ぎ

さ嚼に嚼みて吹き棄つる

氣吹の狭霧に生れたる

我は多紀理の毘賣神

心平に安らかに

神須佐之男大神の

赤き心を眞具さに

天に歸りて大神の

命みことの前まへに逸いちはや早く
宣のらせたまへや菩ほ比ひの神かみ

朝あさひ日は照てるとも曇くもるとも
月つきは盈みつとも虧かくるとも

君きみに對たいして村むら肝きもの
穢きたなき心こころあるべきか

天あまつ津みかみ御み神かみも見みそなはせ
國くに津つ御み神かみも知しるしめせ

空そらに輝かがやく朝あさひ日子この
日ひの出で神かみのひと一ひとつ火びに

照てらして神かみが眞ま心こころを
高たか天あま原はらに細こまやかに

宣のらせ玉たまへよ菩ほ比ひの神かみ
善ぜんと惡あくとを立たて別わける

神かみが表おもてに現あらはれて
疑うたがひ深ふかき空うつせみ蝉せみの

心こころの闇やみの岩いは屋や戸どを
開ひらかせ玉たまへスクスクに

唯ただ何なに事ごとも人ひとの世よは
直なほ日ひに見み直なほし聞き直なほし

宣のり直なほしませ天あまつ津みかみ神かみ
御み空そらも清きよく天あま照てらす

皇すめ大神おほの御おん前まへに
謹つしみ敬うやまひ畏かしこみて

猛たけく雄を々をしく現あらはれし
十とつか握つかの劍つるぎは姫ひめ神かみの

神みこと言ことの劍つるぎいと清きよく
光ひかり輝かがやく神かみ御み靈たま

瑞の御靈を大神の

御前に捧げ奉る

と歌ひ了れば、菩比命は思ひ掛無きこの場の光景に力脱け、懺悔の念に堪へ兼て、さしもに猛き勇將も、涙に暮るる計りなりける。

忽ち天空を轟かし、この場に舞ひ降る巨大の火光、彼我兩軍の頭上を、前後左右に音響をたてて廻轉し始めたり。神々は一齊に天を仰ぎ、この光景を見詰めつつあつた。火光はたちまち變じて麗しき男神となり、空中に佇立して一同の頭上を瞰下し玉ひつつありき。

この神は伊奘諾命の珍の御子日の出神であつた。正邪善惡の證明の爲に天敎山より神勅を奉じて、降り玉うたのである。

忽ち白煙となつて中空に消え玉ひ、後は嚙曉たる音楽聞え、次第々々に音楽の音も遠くなり行きぬ。いよいよ菩比命の降臨によつて、須佐之男命の麗しき御心判明し、命は直に高天原に此由を復命さるる事とはなりける。

(大正一一・三・一一 舊二・一三 岩田久太郎録)

第二十五章 琴平丸（五二一）

高光彦、玉光彦の宣傳使は時置師神と共に橘島を立出て、呉の港に上陸し、宣傳歌を歌ひながら、天地暗澹たる大野原を進み進みて琵琶の湖の邊に着きぬ。折しも浪高く風烈しく出船を待つこと七日七夜の久しきに亘り、船客は出船待つ間の無駄話に耽り居る。

甲「随分困つた世の中になつたものぢやないか。この琵琶の湖は何時も穏かな湖面で、天女が琵琶を弾ずる様な浪音を立てて、船の往來をして居る安全第一と言はれた湖だのにこの頃の湖の荒れ様、今日で五日も六日も船が出ないと云ふ様な事は、昔からあつた事はない、どうしたものだらう」

乙「定つた事だ。天も暗く地も闇いこの頃、草木も色を失ひ、悪魔は天下に横行闊歩する常暗の世の中だ。琵琶の湖だつてやつぱり天地の間にあるのだもの、チツト位荒れるのは當然だよ。それよりも瀬戸の海の大戦があつた事を聞いて居るか」

甲「イヤ未だ聞いた事は無い。どんな戦があつたのだ」

乙「なんでも大きな喧嘩があつたと云ふ事だ。喧嘩の大きなのは戦だ」

甲「そんな事言つたつて、譯を話さな分るかい」

乙「分るも分らんもあるか、戦は戦だ。貴様が何時も女房と嫉妬喧嘩をするやう

なものだ。貴様が嬢の横つ面をピシヤリと擲る、嬢が怒つて貴様の腕に咬り付く。

「コラ嬢、何を爲やがるのだ。放さぬか、放さぬドタマをかち割るぞ」と拳骨を

振りあげる。女房の奴、腕にかぶりついた儘で、オンオンと泣聲を出して、「殺

すなら殺せ、殺されても此腕は放さぬ」と云つて一悶着をやる。隣の八公が出て

来て「コラコラ鶴公、お龜さま、何を喧嘩するのだ。鶴は千年龜は万年、夫婦喧

嘩は犬も喰はぬ。千年も万年も仲好う暮さなならぬ夫婦の間柄で、何と云ふ不心

得な事をするのだ」と挨拶に出る。さうすると鶴公……貴様が「イヤ八さま、

放つといて下さい。此奴は蟲が得心せぬ、今日限り暇を遣るのだ」と力味返る。

貴様の女房お龜の奴、四這になりよつて「モシモシ八さま、何卒放つといて下さ

い。この人には愛想が盡きたのだ。酒を喰ひ博奕をうつ、すべた女の尻を追かけ

る。一寸も取得の無いガラクタ爺だ。これが幸妾は不縁にして貰ひます。今は斯うして別れても、三年先には子供の二人も拵へて、立派な男と手を引いて、モウシモウシ鶴さまへ、三年前にはエライお世話になりました。お蔭でこんな結構な夫を持ち、立派な良い兒が出来ました。阿呆なおやぢに連添うて居ると、妾までが阿呆になる。折角子を生むでも、間拔た面した天保錢のやうな小悴より出来やしない。ヨウ別れて下さつた」と言つて禮に来る様なものだよ。兔も角夫婦喧嘩だといふ事だ。イヅとかミヅとか【いづ】も【みづ】臭い、神様でさへも戦があつたと云ふことだよ」

甲「貴様の云ふ事は、黙つて聞いて居れば、俺ンとこの事まで、大勢の中に曝け出しよつて、怪しからぬ奴だナ」

乙「それでも神島とか、お龜島とか云ふ島の喧嘩だもの、何れ貴様の山の神と喧嘩したことを連想せずには居れぬぢやないかい」

丙「貴様等が良い加減な事を聞齧つて、大勢の中で見つともない。そんな話を今時知らぬ者があるかい」

乙 「偉さうに言うな、それなら貴様逐一言つてみい」

丙 「目から、鼻から、耳から、口まで能う抜けた此方だ。何も彼も透き通つた新

煙管のやうな此方だよ」

鶴公 「さらぎせるテ何だい」

丙 「よう」通つた男と云ふ事だよ」

鶴公 「何を吐しよるのだい。サツパリ新煙管なら、詰らぬ男と言ふ事だらう。ア

ハ、ハ、ハ、」

乙 「こんな新煙管に聞いた所が、こつちが詰らぬ。誰か詳しい事を知つて居る者

が在りさうなものだなア」

丁 「萬人の中に一人位はあるものだよ。掃溜にも鶴が降りると云ふ事があるから、

併し此鶴さまは嬢取られの鶴さまだから例外だよ」

丙 「それなら、その掃溜の鶴と云ふのは誰のことだい」

丁 「定つた事だ、大抵顔の色を見ても分りさうなものじゃないか。口許の凜とし

た、目の涼やかな、鼻筋の通つた男だ」

と自分の鼻を押へ乍ら、
丁^{てい}、眞面目^{まじめ}に云ふから、眞面目^{まじめ}に聴けよ。抑もコーカス山^{さん}には大氣津姫命^{おほげつひめのみこと}と云ふ
お尻^{けつ}の大きい神様^{かみさま}があつた。その神様^{かみさま}が多数^{たぐさん}の八王^{やつこす}とかビツコスとか云ふ奴^{やつ}を澤山^{たくさん}
寄せて、何でも、偉い偉い神様^{かみさま}を祀^{まつ}つて都^{みやこ}を拵^{こしら}へて居^をつた所^{ところ}が、そこへ松茸^{まつたけ}とか
椎茸^{しいたけ}とか干瓢^{かんべう}とか何でも美味^{うま}さうな名^なのつく小便使^{せうべんしい}が遣^やつて来て、大尻姫^{おほげつひめ}の尻^{けつ}
やないが、そこら中^{ちゆう}に小便^{せうべん}やら糞^{ばば}を放^{ひつ}かけさがして、流石^{さすが}の大尻姫^{おほげつひめ}も大尻^{おほげつ}に帆^ほ
かけて、アーメニヤヘスタコラヨイヤサと逃^{にげ}出^だしたり。後^{あと}に松茸^{まつたけ}、椎茸^{しいたけ}、干瓢^{かんべう}
まが酒^{さけ}の爛^{かん}を須佐之男命^{すさのをのみこと}とか云ふ、酒^{さけ}の好^{すき}な神^{かみ}さまを祀^{まつ}り込^こむで、ツル……ギと
かカメとかを御神體^{ごしんたい}にして居^をつた。さうして月^{つき}とか鼈^{すつぽん}とか、花^{はな}とか、何^{なん}ぢや六^むつ
かしい女^{をんな}の神^{かみ}がお宮^{みや}のお給仕^{きふじ}を勤^{つと}めて居^あたが、世^よが段々^{だんだん}曇^{くも}つて來^きたので、コーカ
ス山^{さん}も厭^{いや}になつたと見え、三人^{さんにん}の娘神^{むすめがみ}は、巨^{おほ}きな大蛇^{をろち}となつて、雲^{くも}を起^{おこ}して天^{てん}に
舞^{まひ}上^あり、一疋^{いつびき}の大蛇^{をろち}は呉^{くれ}の海^{うみ}の橘島^{たちばなしま}に巢^すを構^{かま}へ、綺麗^{きれい}な別嬪^{べつびん}に化^ばけて居^をると云ふ
事^{こと}、モ一つは此^{この}琵琶^{びは}の湖^{うみ}の竹島^{たけじま}に大蛇^{をろち}となつて降^おりて來^きたといふ事^{こと}だ。それから
モ一つの鼈^{すつぽん}とか、雪^{ゆき}とか云^いふ女神^{めがみ}は是^{これ}また白蛇^{しろへび}となつて、瀬戸^{せと}の海^{うみ}の一つ島^{しま}に住^{ぢゆう}

居きよをして、素すてき的な別嬪べつびんと現あらはれ、多た數くさんの家來けらいを連つれて住すむで居をつた。そこへ天教てんけう山ざんから變性へんじやうなんし男子おとこのお使つかひで、天菩比命あめのほひのみこととやらが、ドツサリと強つよそな家來けらいを連つれて、サルチニヤの島しまを攻せめ圍かこみ、火ひをつけて焼滅やきほろぼして了しまつたさうだ。ナント偉えらい事ことが出來でたものじゃないか

鶴公つるこう「馬鹿ばか云いふな、サルチニヤは喧嘩けんくわぢやない、男をとこの方は喧嘩腰けんくわこしで、亂暴らんぼうな事ことを行やりよつたが、女神めがみの方は澤山たくさんな御馳走ごちそうを拵こしらへて、これはこれはよう來きて下くださいました。何なにも御座ございませぬがお酒さけなつと充じうぶん分に召めしあがれと云いつて、相あひて手てにならなかつたのだ。一方いつぱうが相あひて手てにならねば喧嘩けんくわぢやない

丁てい「理窟りくつを言いふな、それでも半はんぶん分ぶん喧嘩けんくわだ

鶴公つるこう「男をとこが多た數くさんの家來けらいを連つれて、女をんなに喧嘩けんくわを吹ふきかけに往いつても、一いつぱう方ぱうが相あひて手てにならねば間まの抜ぬけたものだ。暖簾のれんと腕押うでおしするやうなもので、力ちからの抜ぬけた事ことだらう

斯かく話はなす傍かたはらに、目めを塞ふさいで靜しづかに聽きいて居あた石凝姥神いしこりどめのかみは、

「オー、是これは大變たいへんだ、道聽途說だうちやうとせつとは言いひ乍ながら匹夫ひつぶの言げんにも信しんずべき事ことありだ。い

よいよ嚴靈と瑞靈の誓約が始まつたらしい、まさか違へば天の岩戸隠れにならうも知れない。ヤア時置師神殿、行平別殿、此處でお別れ申す。我は是よりアルプス山に上り日の像の八咫鏡を鍛たねばならぬ。天の目一箇神も大方出かけて居るであらう。貴神は是より竹島に渡つて、秋月姫の安否を探り給へ。さらば……」

と云ひ棄てて、雲を霞とアルプス山目蒐けて進み行く。

時置師「ヤア、石凝姥の宣傳使も、重大な使命を帯びて居られるのだから仕方がない。何だか此處で別れるのは、物足らぬ様だが、これも御神業の一部と思へば結構だ。サア初さま、船が出さうだ、船の中で又ゆつくりと話さうかい」

と云ひ乍ら船に向つて進み行く。百數十人の乗客は、先を争うて琴平丸に乗込んだ。船は眞帆に風を孕ませ乍ら、凧ぎ渡つたる湖原を、船底に浪の琴を弾じつつ、東北指して一目散に迂り行く。

船の一方に座を占めたる小賢しき四五人の男、車座になつて四方八方の話に耽つて居る。時置師、行平別の宣傳使も何喰はぬ顔にて、その傍に雑談を聞き居たり。

甲「この間もあまり世の中が悪くなつて治まらぬと云ふので、善い神様は皆天に上り、龍宮に集まり、地上は魔神計りの暗黒界、どうする事も出来なくなつたと云つて、コーカス山の素盞鳴尊様が高天原とかへ、お越し遊ばしてからと云ふものは、彼方にも此方にも、地震が揺る、海嘯が起る、悪い病は蔓延する、河は干る、草木は枯れる五穀は實らず、大變な事になつて來た。そこで天の高天原の撞の御柱の神様が、素盞鳴尊様に何でも悪い心があるとか言つて、大變御立腹なされ、弓矢を用意し、劍や鉞を設け備へて、素盞鳴尊様を討滅さうとなさつたさうだ。そこで、素盞鳴神さまは「私は決して決してその様な汚穢い卑劣しい心は持ちませぬ。モウ此地の上が厭になりましたから、母神の御座る月の國へ歸りたい。それ迄に姉神様に一目お目に掛りたさに來たのだ」と仰有つても、姉神様はお疑が深うて、容易に納得遊ばさず、たうとう、安の河原（太平洋）を中において、天の眞名井（日本海）に靈審判とか誓約とか遊ばすので、此頃は大變な事だ。サルチニヤの一つ島に、素盞鳴尊様の瑞靈の石柱、深雪姫様が多紀理姫神となりて、この世の爲に神様をお齋り遊ばして御座つた所が、姉神様はこれを疑ひ、自分の

御珠みたまに感かんじてお生うまれになつた天菩あめのほひのみこと比命ひのみこととか云いふ血染ちぞめせうじん燒盡せうじんの神かみさま様さまを遣つかはして、全島ぜんたうを燒滅やきほろぼし、最後さいごになつて、深雪みゆきひめさま姫ひめ様さまは案あんに相違さうゐの美うつくしき瑞靈みづのみたまの神かみさま様さまであつたと云いふ事ことが分わかり、アフォンとして歸かへられたといふ事ことだ。この湖うみの竹たけの島しまにも、秋月あきづきひめ姫ひめと言いふ瑞靈みづのみたまの中なかの一人ひとりの綺麗きれいな神かみさま様さまが鎮しづまつて居ゐられるのを今度こんどは天津彦根命あまつひこねのみことと云いふ、菩比命ほひのみことの弟神おとうとがみが現あらはれて、竹たけの島しまの宮殿きうでんを破はく壊わいしたり、人民じんみんを惡者わるものと見み做なし、蝨殺しひみしに屠ほぶり殺ころすと云いつて行いかれたさうだ。又またサルヂニヤの深雪みゆきひめさま姫ひめ様のやうに柔やはらかく出でられて、アフォンとして歸かへられるだらう」

乙おつ「それは妙めうな事ことだなア、神かみさま様さまでもそんな酷ひどい喧譁けんくわをなさるのか。さうすれば我々われわれが夫婦ふうふ喧譁げんくわをするのは當然あたりまへだなア。一體いつたいこの邊へんは何どの神かみさま様さまがお守かま護まひ遊あそばすのだ」

甲かふ「きまつた事ことだよ。天あめの眞名まな井いから此方こつちの大陸たいりくは殘のこらず、素盞すさのをのみこと鳴尊なるのみことの御支ごし配はい、天てん教山けうざんの自轉倒島おのころじまから常世國とこよのくに、黄泉島よもつじま、高砂島たかさごじまは姉神あねがみさま様さまがお構かまひになつて居ゐるのだ。それにも拘かはらず、姉神あねがみさま様さまは地教山ちけうざんも、黄金山わうごんざんも、コーカス山ざんも全部みんな自じ分ぶんのものにしようあそと遊あそばして、種々いろいろと畫策くわくさくをめぐらされるんだから、弟神おとうとがみさま様さまも姉あねに敵對てきたいもなあそらず、進退しんたい維これ谷きはまつて此地このちの上うへを棄すてて月つきの世界せかいへ行ゆかうと遊あそばし、高天原たかあまはらに

上のぼられて、今いまや誓うけひ約ひとかの最さい中ちゆうださうぢや。姉あね神がみ様さまの方ほうには、珠たまの御み徳とくから現あらはれた立り派つぱな五いつは柱しちゆうの吾あかつ勝つ命の、天あめ菩の比ほ命の、天あま津つひ彦こね根の命の、天あま津つひ彦こね根の命の、活いく津つひ彦こね根の命の、熊くま野の久くす須す毘び命のと
いふ、それはそれは表面うはへは美うつくしい女をんなの樣やうな優やさしい神かみ様さまで、心こころは武ぶ勇ゆう絶ぜつ倫りん、勇ゆう猛まう突とつ
進しん、殺さつ戮りく征せい伐ばつ等とうの荒あらい事ことを爲なさる神かみ様さまが現あらはれて、善ぜんと惡あくとの立た別わけを、天あめの眞ま名な
井いで御み靈たま審しん判はんをして御ご座ざる最さい中ちゆうだと云いふ事ことぢや、姉あね神がみ様さまは玉たまの如ごとく玲れい瓏ろうとして透す
き通とほり愛あいの女めが神がみの樣やうだが、その肝かん腎じんの御み靈たまから現あらはれた神かみ様さまは、變へん性じやう男なん子しの靈みたまで、
隨ず分ぶん烈れつしい我がの強つよい神かみさまだと云いふ事ことだ。弟おとう神がみ様さまの方ほうは、見みるも恐おそろしい銳えい利りな
十とつ握つかの劍つるぎの靈みたまからお生うまになつたのだが、仁じん慈じ無む限げんの女めが神がみ様さまで、瑞みづ靈のといふ事ことだ。
此こ處こで天あめの安やす河か原はらを中なかに置おいて、眞ま名な井いの水みづに其その玉たまと劍つるぎをふり滌すすいで善ぜん惡あくの立た別わ
けが出で來けると云いふ事ことだよ。それだから、三あ五な教ひけうが昔むかしから、「神かみが表おもてに現あらはれて善ぜん
と惡あくとを立た別わける、此この世よを造つくりし神かみ直な日ほひ」とかナんとか言いつて居ゐるのだ」
時とき置お師かし「一ち寸よつと皆みなさまにお尋たづね致いたしますが、御ご姉やう弟だいの神かみ様さまが、誓うけひ約ひなさると云いふ事こと
は、何ど處こでお聞きになりましたか」

甲か「イヤどこでも聞ききませぬ、何なんだか最さい前ぜんから頭あたまが重おもくなつたと思おもへば知しらず識し

らずに、私の口からあんな事を喋つたのですよ。怪體な事があればあるもの
なア」

乙「オイ貴様。現に貴様の口から云つたぢやないか。何だ、しらじらしい。とば
けよつて、正直な貴様に似合はぬ、何故そんな無責任な事を言ふのだ」

甲「それだと言つて仕方がないわ。俺の心にもない事を言ふのだもの……」

丙「モシモシお客さま、此奴はこの頃の陽氣で、どうかして居ります。何申すか
分りませぬから、どうぞ取上げて下さいませすな」

時置師「イヤ結構です、大變に参考になりました。全く此方が言はれたのであり
ますまい、神様の我々に對するお示しでせう」

丙「ヘーン、貴方も一寸、云うと濟まぬが、どうかして居やませぬか。こんな
氣違の言ふ事を一も二もなく鵜呑にして、あまり輕卒ではありますまいか」

甲「わしは秋月姫命の使神である。その方は我言葉を氣違と申したが、尤もだ。
汝はウラル教の間諜だから、我直言がきつく耳に障ると見えるワイ」

丙「コラ、何を呆けよるのだ、良い加減に馬鹿な眞似をしておけ」

斯く話す折しも、船はチクチクと竹の島に近づき居る。忽ち起る矢叫びの聲、
関の聲、阿鼻叫喚、地獄の慘状を見るが如き、竹島の磯端に激烈なる慘劇が演ぜ
られつつある光景、手に取る如く見え來たる。

(大正一一・三・一一 舊二・一三 松村眞澄録)

第二十六章 秋月皎々 (五二二)

心も廣き琵琶の湖

中に漂ふ竹の島

神素盞鳴大神の

瑞の御靈と現れませる

十握劍の分靈

秋月姫の神司は

島の頂上を搗き固め

珍の御舍千木高く

仕へ奉りて皇神の

瑞の御靈を朝夕に

齋いつき奉まつらせ天地あめつちに
 拂はらひ清きよめて麗うるはしき
 朝あさな夕ゆふなに眞ま心をこころ
 市いち杵き島しま姫ひめ神かみ司つかさ
 天津あまつ祝のり詞との太ふ祝のり詞と
 眼がん下かに響ひびく関ときの聲こゑ
 穩おだやかならぬ物もの音おとと
 上のほりて眞ま下したを眺ながむれば
 雲うん霞かの如ごとく群むらがりて
 島しまに住すまへる百もも人びとを
 その勢いきほひに辟へき易えきし
 その慘さん状じやうは中なか々に
 處とこ狭せきまで茂しげりたる
 折をりから吹ふき來くる潮しほ風かぜに
 塞ふさがる四よ方もの村むら雲くもを
 神かみの御み稜いづ威づを照てらさむと
 籠こめて祈いのり願のりの神かみ嘉よ言こと
 夜よも吳くれ竹たけの宮みやの奥おくに
 宣のらせ給たまへる折をりもあれ
 沖おきの嵐あらしか波なみの音ねか
 足あしもいそいそ高たか樓どのに
 思おもひも掛かけぬ戦いくさ士びと
 鋼まが鐵ねの銚ほこを打うち振りつ
 當あたるを幸さいはひ斬きりまくる
 右うわう往さわう左さわう往さわうに逃にげ惑まどふ
 他よ所その見みる目めも憐あはれなり
 小を笛さの簫やぶに火ひ放はなてば
 火ひは煽あふられて濛もう々もうと

破竹の音も騒がしく
宛然修羅の戦場と
忽ち變る神の島
見るに忍びぬ次第なり。

秋月姫は立ち上り、

「ヤアヤア、敵軍間近く押寄せたり。高倉別はあらざるか、龍山別は何處ぞ」と呼はる聲に、高倉別は目を擦り乍ら忽ちこの場に飛むで出で、

「只今お召しになつたのは何の御用で御座いますか」

秋月姫「汝高倉別、速に高樓に上り相圖の鼓を打てよ」

ハツと答へて、高倉別は飛鳥の如く高樓目がけて馳上り、

「神聖無比のこの島に向つて攻め來る大軍は果して何者ぞ。ウラル姫の部下の魔軍か、但は天教山の神軍か。何は免もあれ、防禦の用意」

と其儘ヒラリと一足飛び、

「ヤアヤア龍山別はあらざるか。敵軍間近く押寄せ來り亂暴狼藉、竹藪に火を放つて只一戦にこの神島を屠らむとする憎き計畫と覺えたり。ヤアヤア諸人共、防

禦の用意

と呼ばれば、龍山別は聲に應じてこの場に現はれ來り、

「思ひ掛けなき敵の襲撃、敵は何者なるや、一先づ偵察仕らむ」

高倉別は早く行けよと下知すれば、ハイと答へて龍山別は、栗毛の馬に跨り、

八十曲りの坂道を手綱を搔い繰り、シトシトと坂下さして進み行く。高倉別は館

の内の人数を残らず招集めたるに、集まるもの男女合せて僅に四十八人。

「ヤア皆の者共、雲霞の如き大軍本島に攻め寄せたり。斯くなる上は衆寡敵せず、

體を以て體に對し、力を以て力に對する時は勝敗已に明々白々たり。如かず、汝

等は口を清め手を洗ひ、呉竹の宮の前に致つて恭しく神言を奏上し、宣傳歌を唱

へて神の守護を受け、寄せ來る敵を言向け和せよ。我はこれより奥に進み秋月姫

の御身の上を守護し奉らむ」

と言ひ捨て奥殿目がけて進み入る。一同は命の如く身體を清め呉竹の宮の前に端

坐し聲も朗かに天津祝詞を奏上したりける。秋月姫は高樓に登り、寄せ來る敵に

打向ひ悠悠々迫らざる態度を以て聲淑かに天津祝詞の神嘉言を奏上し、終つて天地

に向ひ祈願の言葉を奏上し給ふ。

秋月姫 仰げば高し久方の天津御空を知食す

神伊邪那岐の大御神 大海原を知食す

神伊邪那美の大御神 神素盞鳴大神と

現れ出でませる大空の光も清き月照彦の

神の命や足眞彦 少名彦神、弘子彦の

神の靈の幸ひに 醜の軍を言向けて

この竹島に寄来る 百の仇をば平けく

いと安らけく鎮めませ 十握の劍の威徳にて

勢猛り進みくる 荒ぶる神も程々に

生言靈の御光に 照し給ひて天が下

四方の國には仇もなく 穢れも罪も枉事も

薙拂へかし神の風 神が表に現はれて

善と惡とを立別ける

善を助けて惡神を

言向け和す神の道

唯何事も人の世は

直日に見直し聞直し

世の枉事は詔り直す

誠の神の在しませば

島に塞がる村雲を

霽して誠の日月を

照させ給へ逸早く

此世を造りし大本の

皇大神の御前に

畏み畏み祈ぎ奉る

と歌ひ終り、高樓より降り來る折しも、高倉別は馬に跨り急ぎ館に立歸り、

秋月姫神に申し上げます。當山の寄せ手はウラル彦、ウラル姫の魔軍ならむと

思ひきや、撞の御柱大神の珍の御子なる五柱の一神、天津彦根神、鋼鐵の銚を打

揮ひ竹藪に火を放ち、狼狽へ騒いで逃げ廻る島人を一人々々引捕へ、見るも悲惨

なその振舞、建物破壊し生物を屠戮し亂暴狼藉至らざる無く、群がる數萬の軍

勢に對し、味方は僅に老若男女を合して四十餘人、人盛なれば天に勝つとやら、

もう斯うなる上は是非に及ばず潔く自刃を遂げ、名も無き敵の奴輩に殺されむは末代の恥、我より冥途の魁仕らむ

と早くも兩肌を脱ぎ、短刀を脇腹に突き立てむとする一刹那龍山別は、宙を飛むでこの場に現はれ來り、高倉別が短刀を矢庭に引奪り聲を勵まして、

「ヤア高倉別殿、貴神は尊き神に仕ふる神司、この場に及んで神より受けし貴重なる生命を自ら捨てむとし給ふは何事ぞ。今の今迄全心全力をつくし、力およば

ずして後に運命を天に任さむのみ。是人を教ふる我々の採るべき道には非ざるか。少時思ひとどまり給へ。善惡邪正を鏡にかけし如く明知し給ふ誠の神はいか

等捨て給はむや。自殺は罪惡中の罪惡なり。貴神は何故に斯かる危急の場合に臨みて神に祈願せざるや

高倉別「ア、貴神は龍山別殿、俄の敵の襲來に心も眩み一身の處置に迷ひ、神を忘れ道を忘れたるこそ我不覺、恥かしさの限りなれ。然らば仰せの如くこれより

高樓に登り、天地の神に祈願を凝らさむ」と悠々として高樓目がけて登り行く。

天津彦根神は數萬の神軍を率ゐて勝に乘じ表門に迫り來たる。館の老若男女は悲鳴をあげて前後左右に逃げ廻るにぞ勝誇つたる神軍は潮の如くに門内に亂れ入る。奥殿の高樓には莊嚴なる一絃琴の音爽かに天津祝詞の聲清々しく響き居る。天津彦根神は祝詞の聲に心和ぎ茫然として耳を傾け聞き入りぬ。暫くにして太刀、弓矢を大地に投げ付け兩手を拍つて共に神言を奏上する急變の態度に數多の戰士は、大將軍のこの舉動に感染しけむ、何れも武器を捨て大地に端坐して兩手を拍ち天津祝詞を聲高々と奏上する。

時置師神、行平別神は宣傳歌を歌ひながら神軍の後方に立つて面白可笑くし手を振り足を轟かし歌ひ舞ふ。秋月姫は高倉別、龍山別を従へこの場に現はれ、長袖しとやかに、

「とうとうたらりや、とうたらり、たらりやアたらり、とうたらり」
と扇を開いて地踏み鳴らし舞ひ狂ひ玉ふ。高倉別、龍山別を初め神軍の大將天津彦根命、時置師神、行平別神は中央に現はれ、秋月姫と諸共に手拍子足拍子を揃へ、敵味方の區別も忘れて狂ふが如く踊り廻る。

この時天上に群がれる黒雲は科戸の風に吹き散りて、天日の光晃々と輝き始め
素盞鳴命の疑は全く晴れ渡つた。天津彦根神は喜び勇むで數多の將卒を引連れ、
琵琶の湖を渡りて天教山に凱旋せり。後に残りし時置師神、行平別神は、或は殺
され或は負傷に悩む島人に一々伊吹の狭霧を施し、死したる者を生かし傷つける
者を癒やし、焼けたる林は天の數歌を歌ひ上げて再舊の如く青々と緑の山に化せ
しめける。

茲にまた高光彦の宣傳使は時置師神、行平別神と共に竊にこの島に現れ來り、
森林の中に身を潜めて天の數歌を歌ひこの慘状を平和に治めたる勇神なり。秋月
姫は高光彦と結婚の約を結び、永くこの島に留まりて神業に参加し給ひぬ。又、
中の弟玉光彦は瀬戸の海の一つ島なる深雪姫を娶り、萬壽山に立ち歸り父磐樟彦
神の後繼者となりて永遠に神業に参加し給ひけるとなむ。

(大正一一・三・一一 舊二・一三 北村隆光録)

第二十七章 航空船〔五二三〕

ウラル彦命、ウラル姫命は自ら盤古神王と稱し、ウラル山、アーメニヤの二箇所に根據を構へ、第二の策源地としてコーカス山に都を開き、權勢雙ぶ者なき勢なりしが、三五教の宣傳使の爲に、コーカス山の都を追はれ、再びウラル山、アーメニヤに向つて遁走し、數多の魔神を集めて捲土重來の神策を講じ居たりき。然るにアーメニヤに近きコーカス山に、神素盞鳴命武勇を輝かし、天下に君臨し給へば、流石の魔神も手を下すに由なく、美山彦、國照姫をしてアーメニヤを死守せしめ、自ら黄泉島に渡りて第二の作戰計畫を廻らしつつありける。

ウラル彦、ウラル姫は、元來純直至誠の神であつたが、美はしき果實には、惡蟲の襲ふが如く、少しの心の油斷より八岐の大蛇、惡狐、惡鬼の憑依するところとなり、是等の惡神に使役されて、心にもなき邪道を辿りつつ、誠の神に向つて叛旗を翻すに至つたるなり。美山彦も一旦月照彦命、足眞彦命の爲めに言向け和され善道に立返りしが、再び邪神に憑依され、忽ち心魂くらみ國照姫の言を容れ

て、また又もやウラル彦ひこの部下ぶかとなり、あくぎやくぶだう惡逆無道の行爲かうゑを専らせんぱとするに至りいたたるなり。
茲こゝにアーメニヤの神都しんとには、へうめんみやまひこ表面美山彦はウラル彦命ひこのみことと稱し、くにてるひめ國照姫はウラル
姫命ひめのみことと稱してきよせい虚勢を張り、あまた數多の魔神を集めてこの都みやこを死守し、よもつじま黄泉島と相待つ
てくわいてん回天の事業を起さむと企て居たりき。

あななひけつ三五教の宣傳使、はふりべのかみ祝部神は月照彦神の化身と共に、わうこんざん黄金山を立出で筑紫の國の
【ヨル】の港みなとを船出ふなでして、よもつじま黄泉島の魔神を剿討すべく進み行く。此船このふねは筑紫丸と
名づくる大船おほふねなり。筑紫丸は龍宮島りゆうぐうじまを経て黄泉島よもつじまに沿ひ常世とこよの國に通はむとする
ものなれば、とこよ常世の國に渡る船客せんきやくがその大部分だいぶんを占め居たり。祝部神はふりべのかみは月照彦神
と共に、つくしまる筑紫丸の船客せんきやくとなり、すうじふにち數十日の海路うなぢを續つづく。海中かいちうには種々の變異へんい起り、
島しまなき所に島現しまあらはれ、あるひ或は巨大なる岩石がんせき俄にはかに海中かいちうに出没しゆつぱつして天日てんじつ暗く月光げつくわうも無く、
風かぜは何となく腥なまぐさく、え得も言はれぬ不快ふくわい極まる航路かうろなりける。船中せんちうには色々いろいろの雜談ざつだん
が例れいの如くごと始まり來きたる。

甲かふ「モシモシとよ豊さま、あなた貴方は何處どこまで行きゆますか、かいじやうかう海上かいじやうに變異へんいが續出ぞくしゆつしては、
餘あまり遠乗とほのりも危きけん險ですよ。私わたくしも常世とこよの國くにまで參まゐる積つもりで出でて來きましたが、この調てう

子では先が險難でなりませぬ。龍宮島迄行つたら又次の船を待つて歸る事にしよ

うと思つて居ますよ」

豊「さうですな、貴方は常世國へ何の爲めにお越しになるのですか」

甲「實は家内も小供も一緒に乗つて居ますが、私はコーカス山の山麓の琵琶の湖

の畔に住むもの、何だか世の中が變になつて來て何とも譬方のなき風が日夜吹き

巻り、息がつまりさうになりますから、遠く常世の國へ移住でもしたらよからう

と思つて參りましたが、もう斯うなれば何處に居るも世界中同じ事の様に思ひま

す」

豊「常世の國は數千里を隔てた、海の向ふの廣い國、そこまで行けば日も照り月

も輝き、立派な果物も實り、清鮮な空氣も流通して居るでせう。私も豊の國の者

ですが、豊の國には白瀨川の大瀑布があつて、魔神が棲居を致し、日夜毒氣を吐

き人民は残らず蒼白い顔になつて、コロリコロリと死ぬもの計り、あまり世の中

が恐ろしくなつたので、黄泉島か、もつと足を伸ばして常世の島へ渡らうと思つ

て、一族を連れて來たのです。何でも黄泉島が此世の境と云ふのですから、黄泉

島に渡れば昔のやうな清らかな海も、島も見られませう」

丙「私も常世の國へ遁げて行く者ですが、黄泉島はこのごろ大變な地震で、日々二三十間づつ地面が沈没しかかつて居るやうですな。人の噂に依れば、もう六分通り沈むで仕舞つたさうですよ」

甲「黄泉島でさへもさう云ふ按配だから、俄に海の中に無かつた大きな島が出来たり、岩が立つたり、大蛇が澤山に遊び廻るのは當然でせう。兔も角怪しい世の中になつて来たものだ。かうなつて来ると今まで馬鹿にして聞いて居た、三五教の教が戀しくなつて来る。たとへ大地は沈むとも誠の神は世を救ふとか云つて、宣傳使が廻つて来ましたが、我々は「何、馬鹿な、大地が沈むなぞと、そんな事があつたら、日天様が西からお出ましになる」と笑つて居ましたが、この頃は西からどころか、何處からもお昇りなさらず、黄泉島の様な大きな島まで六分まで沈むとは、本當に常世の國だつて我々のこの船が着く迄には、どうなつて居るか分つたものぢやない」

晝とも夜とも判別のつかぬ常暗の世の海面、船は海面に出没する大巖石を右に

避け左にすかし、船脚もゆるやかに盲人の杖なくして荒野を行く如き有様、波の
まにまに浮かび行く不安至極の航路なりける。

忽ち暴風吹き来り、山嶽の如き波立ち来つて、筑紫丸を呑まむとする危険の状
態に陥り、船客一同は互に手を合せ何事か頻りに小聲に祈り、祝部神は立つて歌
ひ初むる。

神が表に現はれて 善と悪とを立別ける

朝日は隠れて光なく 月は地に落ち影もなし

大海原に蟠る 八岐大蛇や醜神の

醜の猛びを皇神の 依さし給へる言靈に

伊吹き拂へよ四方の國 大海原の醜神も

言向和す三五の 道を傳ふる宣傳使

世は常暗となるとても 黄泉の島は沈むとも

常世の國は永遠に 波の随々漂ひて

あまてら
天照します大神や

くにはるたち
國治立の大神の

みたま
御靈の恩頼を蒙らむ

かむすきのをのおほかみ
神素盞鳴大神の

ふか
深き恵みを白浪の

うへ
上に漂ふ民草は

よもつ
黄泉の島の日に月に

しづ
沈むが如く忽ちに

うきせ
浮瀬に落ちて苦しむ

あ
嗚呼諸人よ諸人よ

かみ
神の教にまつるひて

なほひ
直靈の御靈研き上げ

あさゆふ
朝夕神の御前に

いの
祈れや祈れ善く祈れ

われ
我はこの世を救ひ行く

あななひけう
三五教の宣傳使

つきてるひこ
月照彦の守りにて

まが
この世の曲を祝部の

かみ
神と現れ黄泉島

ひらさか
その比良坂にさやりてし

やまたをろち
八岐大蛇を言向けて

まが
この世の曲を掃き清め

よびと
世人を助くる神司

かみ
神が表に現はれて

ぜん
善と悪とを立別ける

この世を造りし神直日

こころ
心も廣き大直日

ただなにごと
唯何事も人の世は

直日に見直し聞直し 身の過ちは詔直せ

神は汝を守るらむ 嗚呼惟神々々

御靈幸はひましませよ

不思議や暴風は俄に止みて、浪風ぎ渡りし間もあらず、西北の風またもや吹き
来つて筑紫丸は矢を射る如く黄泉島に向つて疾走せり。豫期に反して早くも黄泉
島は間近くなりぬ。忽ち黄泉島は轟然たる音響をたて、見る見る海中に沈まむと
する恐ろしさに、船客一同はこの光景を見て、アレアレと驚きの目を睜る。

祝部神「ヤア船中の方々、吾々は最前歌つた如く三五教の宣傳使、たとへ黄泉島
は沈むとも、言靈の神力を以て、再び元の如く海面に浮かばせ見む、信仰の力は實
に尊きものである。皆の方々には我が祈りの靈験を見て心を改められよ」

甲「貴方は宣傳使様、如何に御力があるとは云へ、あの島が浮き上りませうか、
若しも浮き上つたら吾々は三五教に一も二もなく歸依致します。どうぞ一つ浮し
て見て下さいませ」

祝部神はふりべのかみ 神力しんりきは偉大あだいなものだ。サア御覽ごらん」

と云いひながら拍手はくしゅをなし天津祝詞あまつのりとを奏上そうじやうし、鎮魂ちんこんの姿勢しせいをとり、汗あせをダラダラ流ながして一生懸命いっしやけんめいに靈れいを送おくつて居ゐる。黄泉島よもつじまは益々ますます巨大きよだいなる音響おんきやうを出だし速度そくどを早はやめ、海中かいちゆうに沈しづみ行くゆくのみなりける。

祝部神はふりべのかみ「ヤア、こりや神かみさまが聞き損そこなひをなさつたナ。今いま一度いちど願ねがつて見みませう」とまたもや一心不亂いっしんふらんに祈いのりかけた。黄泉島よもつじまは何なんの頓着とんちやくも無なく、刻々こくこくに海中かいちゆうに沈しづみ行くゆく。船中せんちゆうの人々ひとびとは一齊いっせいにドツと聲こゑを上げて嘲笑てうせうする。

祝部神はふりべのかみ「オイ皆みなのもの謹慎きんしんをせぬか。お前まへたちの量見りやうけんが悪わるいものだから、俺おれの鎮ちん魂こんがチツトも利きかない。皆揃みなそろつて俺おれが神言かみごとを奏上そうじやうするからその後あとに従ついて來くるのだ。神様かみさまを馬鹿ばかにして居をると、思おもわぬとこへ暗礁あんせうが出來できて、船ふねが覆くつへつて仕舞しまふぞ。この船ふねには幸さいはひに月照彦神つきてるひのかみの御守おまもり厚あつき祝部はふりべの宣傳使せんてんしが乗のつて居をるものだから、どうなりと浮ういて居ゐるのだ。俺おれが黄泉島よもつじまに上陸じやうりくしたが最後さいごこの船ふねは危あやふくなるぞ」

乙おつ「何なんとマア小ちひさい男をとこに似にず大法螺おほほらを吹ふく奴やつだなア。この法螺ほらには時化しけの神かみも吹ふ

きまぐられて鎮まつてしまふ。アレアレ宣傳使の祈りは利き過ぎたと見えて、黄泉島は益々鳴動激しく急速度を以て沈むぢやないか」

「莫迦を云ふな、島が沈むのぢやない。海嘯が来て居るのだ。波が高くなつて居るのを氣が付かぬか」

甲、乙「モシモシ宣傳使様、この廣い海の中、盪か何ぞの様に高くなつた、低くなつたと云ふ見當はどうしてとれます。成程水が高くなれば島は沈むやうに見えるのは當然だ。然し俄にかう高くなる道理がないぢやありませんか」

祝部神は、

「島が沈むか波が高くなつたか、二つに一つだ。アハ、ハ、ハ、ハ」

と氣樂さうに笑つて居る。船は漸く黄泉の島近くになつた。

祝部神「サア船頭、黄泉島に船を着けて呉れないか」

船頭「メツサウもない。刻々に沈むで行くあの島、どうして船が着けられませう」

祝部神は

「エーイ氣の弱い船頭だなア」

と云ひながら神を念じ神言を唱へつつ身を躍らしてザンプと許り海中に飛び込み、
黄泉島目がけて遊び行く。

甲、乙、丙、
「ヤア、法螺を吹く丈け随分膽玉の太い宣傳使だ。信仰の力と云ふものは、エライものだなア。アレ丈け一生懸命に島を浮かして下さいと頼むのに、チヨットも聞いて下さらぬ神様を信じて未だ信仰を止めず、危険極まる黄泉島に遊びで行くとはあきれたものだ。生命知らずと云ふのは、マアああいふ人の事かい。ヤアヤア偉い速力ぢや。たうとう此長い海面を向ふへ着いてしまったよ」
「又もや颯風吹き来り波高く帆柱を折り、船はいやらしき物音を立てて、今や破壊せむとする。船頭も船客も一度に蚊の泣く如く、天に哭し地に歎き、刻々沈み行く船の上を前後左右に駆廻り、狼狽へ騒ぐ有様は目もあてられぬ悲惨の光景なりける。」

祝部神は島陰に立つて言霊を力限りに宣り始めたり。アーオーウーエーイの聲に連れて、今や沈没せむとする筑紫丸は、何物かに惹かるる如く急速力を以て、黄泉島に近づき来たる。祝部神は又もやアオウエイの言霊を宣り初めければ、不

思議しぎやほとんど沈没ちんぼつせむとする船ふねは、ポカリと水音みづおと高く浮上うきあがり、何時いつの間まにか浸しん水すゐせし水みづは跡形あとかたもなく除のぞかれ居ゐたりける。

祝部神はふりべのかみ「ヤア、皆みなさま、御神徳ごしんとくが分わかつたかな」

甲乙丙かふおつへいを初め船客せんきやく一同いちどうは嬉うれし涙なみだに暮くれ一言いちごんも發はつし得えず、兩手りやうてを合せ祝部神はふりべのかみに向むかつて生神いきがみの意いを表へうし合掌がつしやうするのみなりき。祝部神はふりべのかみは又またもやウンウンと力ちからを込こめたるにぞ、ウの聲こゑに黄泉島よもつじまは静々しづしづと浮上うきあがり始めはじめたり。又またもやウ、の聲こゑに連つれて島しまはウ、と浮上うきあがりたり。

祝部神はふりべのかみ「皆みなの人達ひとたち、この島しまが浮上うきあがると云いうた時とき、笑わらつただらう。どうだこれで分わかつたか」

甲かふ、乙おつ、丙へい「イヤモウ確たしかに分わかりました。今いま迄までの御無禮ごぶれいどうぞ御赦おゆるし下くださいませ」

「ヨシヨシ分わかつたらそれで可よい、神様かみさまの御神徳ごしんとくを忘わすれてはならぬぞ。サア今いまの間うちに早はやく常世とこよの國くにに往いつたら可よからう。愚圖ぐづぐづ々々して居をるとこの島しまは又またもや沈没ちんぼつの恐おそれがある。曲津神まがつかみの棲すむ黄泉島よもつじまはどうしても、海中かいちゆうに沈しづめてしまはねばならぬのだ。何千里なんぜんりも廻まはつた此島このしま、一度いちどにドブんと沈しづんだ時ときは、この海原うなばらでも天てんに冲ちゆうす

る如き巨浪が立ち上る。さすれば如何に堅固な大船でも一たまりもあるまい。サア早くこの島の沈没せぬ間に風を送つてやるから、常世の國へ向つて走り行け。東風俄に吹き來つて筑紫丸は帆を膨らせながら一瀉千里の勢にて波上を滑り行く。船中の人々は黄泉島の祝部神に別を惜み、手を拍ち笠を振り袖を振りなぞして姿の見えぬまで名残りを惜みけり。

島の曲津神は祝部神の言靈の息に恐れて、雲を霞と比良坂さして逃げて行く。祝部神は足を早めて飛鳥の如く、黄泉比良坂の坂の上に月照彦の冥護の下に登り行く。

坂の上には、日の出神の用ゐ給ひし千引の岩がある。この岩の上に端坐して神言を奏上する折しも、大音響と共にさしもに廣き黄泉島は海中に忽然として没し、残るは千引の岩のみ。折から荒浪は千引の岩を洗ひ、祝部神の身體をも今やさらはむとする時、天空を轟かして此處に降り來る天の磐樟船あり。見れば日の出神の遣はし賜うたる堅牢無比の神船にして、正鹿山津見神が乗つて居られる。祝部神は、

□ ヤア貴神は正鹿山津見神^{ましかやまづみのかみ}□

□ ヤア貴神は祝部神で御座るか。サア早くこの御船に乗らせ給へ^{はふりべのかみ}。サア早くこの御船に乗らせ給へ^{みふねの}□
祝部神は、

□ 全く救ひの船だ、有難し忝なし^{まじた}□

と磐樟船にヒラリと身を托し、中空高くかすめて天教山を目蒐け、一瀉千里の勢
にて天を轟かしつつ阿波岐原に漸く降り着きにける。

俄に聞ゆる松風の音に目を開けば、豈圖らむや、十四日の月は西山に沈み、高
熊山の霧立ち昇る巖窟の傍に瑞月の身は端坐し居たりける。

(大正一一・三・一一 舊二・一三 谷村眞友録)

第二十八章 三柱の貴子（五二四）

神代の太古、伊邪那岐命よりお産れ遊ばした天照大御神様、この神様は日の大神様と申上げて、本部綾部に御祀りしてあります所ところの神様であります。このへんから申上げます。

伊邪那岐命が

「筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐ヶ原に於て禊身し玉ふ時、左の御目を洗ひ給ひて成りませる神の御名は月讀命」

といふことが書いて御座います。目といふものは吾々肉體から申しますと、右と左と両方に持ちて居りまして物を視るといふことの上に最も大切なものであります計りか、眼は心の窓と申します位重要なもので御座います。所が一步進んで考へて見ますと、總てこの宇宙間に形を持つて居るものは森羅萬象残らず目すなはち眼目といふものがなくてはならぬ。實際凡ゆるものに眼目があると云ふ事は

吾人は常に之を認め得るのであります。姿こそ人間のやうな姿ではないけれど、他の動物に於てもこの眼をもつて居ります。禽獸蟲魚草木の類に至るまで此眼のないものはありませぬ。また一つの文章を読みましても、この中にも必ず眼目といふものがあります。御勅語の中にも眼があります。

皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ、汝臣民克ク忠ニ克ク孝ニ

これが教育勅語の眼目であります。また戊申詔書には、

「淬勵礪ノ誠ヲ輸サバ國運發展ノ本近クスニ在リ」

これが詰り眼になつて居る。その通り初め天地をお造りになるに當つても、この宇宙を治める爲にはどうしても、眼といふものが必要であるといふので、そこで伊邪那岐命は天地の主をお創めになつたのであります。すなはち伊邪那岐命は、先づ天の主をこしらへたい、この靈界の主宰者をこしらへたいと思召しになりまして左の目を洗ひ給うた、この左の目といふのは日であります。太陽神であつて上である。右の目といふのが太陰神であつて下であります。言靈の天則から申し

ますと左は男、右は女と、これは既に神様の御代から定まつた掟である。然るにこの左の目を洗うてお生れになつたのが日の大神、天照大御神であつて、右の目を洗うてお生れになつたのが月讀命、さうすると目からお生れになつたのは、變性男子女子でありました。左の目をお洗ひになつて直ぐお生れになつたのが變性男子の天照大御神でありました。これで詰り左を宇宙靈界とし、右を地球として、天上天下の君をお生みになつた譯であります。

「次に御鼻を洗ひ給ひしときに成りませる神の御名は建速須佐之男命」

「はな」は初めに成るの意義で即ち初めである。物質の元であります。花が咲いて而して後から實を結びます。人間の身體が出来るときましても、先づ胎内に於て人間の形の出来る初めは鼻である。それから眼が出来る。繪師が人間の繪を描きましても、その輪廓を描くの何より先に鼻を描く、鼻は眞中である。鼻を先へ描いて然る後に目を描き口を描いてそこで都合好く繪が出来るのである。この初めて出来た統治の位地にお立ちになるのが須佐之男命であります。俗に何でも物の完成したことを眼鼻がついたと申します。神様も此世界をお造りになつ

て、さうしてそこに初めて眼鼻をおつけになつたのであります。

「此時伊邪那岐命太く歡喜して詔り給はく」

愈天地が完全に出來たから、神様は非常にお喜びになつた。これまでに神様は随分澤山な御子達をお産みになつて居りますが、衝立船戸の神様から十二柱あります。その次に三柱お生れになつてをるので都合十五柱であります。男神様は我はかやうに澤山の子を産むだが、しかし今度の様な眼鼻になる所の子は初めてである。

「吾は御子生みて、生みの果に三柱の貴子得たり」

と仰せられました、やがて、

「其御頸珠の玉の緒母由良に取りゆらかして」

即ちむかしの勾玉と申したやうな、高貴な人が飾りとしてかけて居つた頸珠であります。丁度今で申しますと大勲位章とか、大綬章とか、一等勳章とか云ふ意味の、曲玉のやうなのを掛けて居られたかと思はれます。

そこでこの玉を自分からお取り脱しになつて天照大御神にお渡しになつた。母

由良にとりゆらかしてといふことは何でも非常に喜んで物を渡すときには、自然に手や身體が揺れる。一面から云へば揺つて渡す。頂くときにも亦揺つて頂く、今は然う云ふやうなことでは御座いませぬけれども、本當に嬉しいときには然うなつて來るのであります。さて之を揺りよい音鳴りをさせながら天照大御神に賜ひまして詔給はく、

「汝が命は高天の原を知らせ」

と高天原を主宰せよと仰せになつて珠をお授けになつたのであります。

「かれ其御頸珠の名を御倉板擧之神と申す」

この御倉板擧之神といふことは、言靈學上から見ても、神様の方で申されまする曆　この世界には恆天曆、太陽曆、太陰曆の三つの曆が常に運行循環して居るのであります。で、この御頸珠をお授けになつたといふのは、所謂御倉板擧之神、即ち恆天曆、太陽曆、太陰曆をお授けになつたのであります。

「次に月讀命に詔給はく「汝が命は夜の食國を知らせ」と事依さし給ひき」

右の眼よりお生れになつた月讀命に夜の主宰をせよと仰せられた。知らせとい

ふことは、大事に守護り能く治めよといふ意味で、太陰の世界を主宰せよと仰有つた。高天原は全大宇宙である。夜の食國は晝の從である。それで月讀命はどこまでも天照大御神を扶けて宇宙の經綸に當れと、斯う云ふ詔であります。

次に建速須佐之男命に詔給はく「汝が命は海原を知らせ」と事依さし給ひき」須佐之男命は鼻からお生れになつた方でありませぬ。海原といふのは此地球上のことでもあります。地球は陸が三分の一しかありません。三分の二といふものは海であります。地球を總稱して大海原と申すのであります。斯うして伊邪那岐命様は深いお考へから夫々其知ろしめす所を、各々にお分けになつて、汝は高天原を、汝は夜の食國を、汝は地球上即ち大海原を知ろしめせと、御神勅になつたのであります。今日は天照大御神の三代の日子番能邇々藝命が、どうも此お國が治まらぬといふので天から大神の神勅を奉じて御降臨になつて、地球上をお治め遊ばして、さうして我皇室の御先祖となり、其後萬世一系に此國をお治めになつてあるのであります。それより以前に於きましては、古事記によりますと須佐之男神が此國を知召されたといふことは前の大神の神勅を見ても明白な事實であり

ます。

「故各々依し給へる御言の隨に、知らしめす中に、速須佐之男命、依さし給へる國を知らさずて、八拳髯胸前に至るまで啼いさちき」

須佐之男命は大神の仰に隨つて地上に降臨遊ばされた。地上を治める爲めに、お降りになりましたけれども、その時この地上は亂れて居つて、神代にも丁度今日のやうな世があつたものと見えます。で今日のやうに政治であらうが、宗教であらうが、教育であらうが、何から何まで一切のものが行き詰つて了うて、もう行きも戻りも上げも下しも出来ぬ様になつて居つた。それで須佐之男命様は、この世の中を安らげ平けく治めて大神を安堵させ奉る事が出来ないから非常にお歎きになつて、「八拳髯胸前に至るまで」長く長く髯が延びて胸前の所まで下つて来るまで御心配をなすつた。人といふものは髯を拵へたり髪を整へたり、いろいろのことをして、容貌を整へなくてはならぬけれども、此國を治めようといふ事に、餘り御心配を遊ばしたのでありますから、知らぬ間にこの髯が八拳に長く伸びて居つたのであります。

「泣きいさちき」

といふのは、世の中の一切悉くのもものが、もうどうしても、これから進むで行くとか、開けて行くとか、どうしたらよいかといふ方法がない、手のつけやうがないといふまでに非常に非常に行き詰つて了つた状態を、お歎きになるさまに形容したのであります。

「其泣き給ふ状は」

どういふ工合であつたかといふと、

「青山を枯山なす泣き枯らし」

今まで山などの草木が青々と生ひ繁つて居たのに、世が行き詰つた爲に枯れて了うた。枯らして了うた。山がすっかり一變して枯山となつてしまつた。これは今日の状態によつて似て居るではありませんか。今まで十年計畫、百年計畫といふやうな風にいるいろいろな事業が企てられた。何會社が立つの、或は何事業が起きたと、無茶苦茶に四五年前から本年の春までは偉い勢で、好景氣を謳歌して、青々とした山の如くに有頂天になつて居りましたが、青山がいつまでも天空につ

かへないが如くに、なんぼ木が伸びたつて天につかへる氣遣ひのないやうに、一朝行きつまれば最早さう云ふ勢はすつくり枯れて了ふ。今年の春からこの方、元も子もなくなつて、青山は枯山になつた。どうしても伸びる方法もない、火の消えたるが如き有様になつて了つたのであります。

「河海は悉に泣き乾しき」

山が枯山となつたと同じく、河も海も悉く乾いて了うて、一滴の水もなくなつたといふのであります。今日の世の中に譬へて申しますれば、郵船會社とか、商船會社とか其他いろいろの海運業も追々と仕事がなくなつて二進も三進も行かなくなつた。すると此海河の労働仕事に従事して居るものは、稼殖の途のなくなるのは勿論、稼業に離れる、職に離れるといふことになつて來ると一家は子供に至るまで、悉く泣き乾しになる。最早や食ふ道がないやうになると、もう乾干になるより仕様がなない。總て海に稼いで居る者も、河に従事して居る者も、其他一切のことに従事して居る者も、みんな泣き乾しになつて了うたのである。

「是を以て惡神の音なひ、狭蠅なす皆沸き、萬の物の妖悉に發りき」

神代に於ても世が行き詰つて來れば、そこにいろいろの不祥なる事件が起つて來たものと見えます。

畏くも明治天皇陛下が、

之ヲ古今二通ジテ謬ラズ之ヲ中外二施シテ悖ラズ

と仰せられましたやうに、眞理といふものは何れの時代にも適應するので御座います。既に古事記の明文にある所で御座います。今日の状態を考へて見れば、丁度此岩戸開き前の状態と克く似て居る。世がどん底に行き詰つて勞働しようにも仕事がない、仕事がないければ妻子眷族を養ふことが出來ない。生活といふことが出來なくなるとそこで悪神の音なひとなり、いろいろの騷動が起つて來る、人間の心が荒んで來る。衣食足つて禮節を知る、今まで善い魂を持つて居つたものも、だんだん悪い魂の力に押へられて悪化して了ふ。食ふか食はぬか、死ぬか生きるか、喰うて死ぬか食はずに死ぬか、斯う云ふ苦しい立場になりますと、人心は日増しに悪化して善くないことが往々始まる。甚だしきは警察へ行つて御厄介になつた方が樂で、養なつて呉れて安全だといふものが出來る。監獄に入れば食はし

て呉れる、金銭はなくても可いといふ具合に自暴自棄的に悪神の音なひが始まる。此音なひといふのは、神様の御眞意に背いた所の、いろいろの論説が出て来るといふので、あちらからも此方からも異端邪説が叢り起ることであります。然うした結果が、うるさい所の五月蠅のやうにブンブンといろいろの事が湧いて、

『萬の物の妖悉に發りき』

一切のものに災禍が起つて来る。外交の上に於きましても、内治の上に於きましても、商工業の上にも、一切萬事、何も彼にも、世の中のありと凡ゆるものに向つて、みな災禍が起つて来るのであります。そこで天から伊邪那岐大神が之を御覽になつて、

『速須佐之男命に詔給はく』

仰有るには、

『何とかも、いましは、事依させる國を治さずて泣きいさちる』

そなたは、此大海原の國を治めよと言つてあるのに、何故それを治めぬのか、世の中を斯う云ふ難局に陥らせたのか、何うして騒がしい世の中として了うたの

か、と大變にお責になつたのであります。すると須佐之男命は、誠に相濟まぬ事であります。兔も角これは私に力が足らぬからであります。私が悪いのでありますとお答へになつた。併し斯うなつて來ては如何なる人が出て來ても、此時節には敵はない。治まるときには治めなくても治まるが、治まらぬときに之を治めるといふ事は難かしいものであります。人盛んなれば天に勝ち、天定まつて人を制す、惡運の強い時には如何なる神もこれを何うも斯うもする事が出來ない。良の金神様も此時節の勢には敵はぬと仰せられて、それで三千年間あの世に隠れて、今日の神政成就の時節を待つて、現在に顯はれ天の大神様の御命令を奉じて、三千世界の立替立直しをなさらうといふのであります。大神様でさへもさう仰せに成るのでありますから、況して須佐之男命が大變に行き詰つた地上を治めようとなさつてもどうして治まらう筈がありません。然らば何故須佐之男命御一人では治まらないのであるかと申せば、それは今日文武百官がありました、亦た政黨派が互に相争ひ、一方が斯うすれば一方が苦情を持ち出して思ふやうにならぬ如く前に申しましたやうに既にいろいろの神様達が澤山あつて、其神々様が各自に

天津神の御心を取り違へて、所謂體主靈從に陥つて居られたので、一人の須佐之男命がどれ程誠の途を開かうとなすつた所で、更に耳に入れるものがない、各自に勝手な眞似をなさる。丁度強情な盲と聾との寄合のやうであります。そこに千仞の谷があつても盲は顛覆へるまでは知らぬ顔をしてをる。どれ程雷が鳴つても聾は足下に落ちるまでは平氣である。それに強情を張つて誰が何と注意しても聽かない。神代の人もそのやうに體主靈從で、どうしても命の命令を聽かなかつた。それで須佐之男命は、これは取りも直さず自分の責任である、自分の不徳の致す所である、到底自分の力では及ばないのであると、自らをお責めになつて、

「あは妣の國、根の堅洲國に罷らんと思ふが故に泣く」

私はもうお暇を頂いて、母の國に歸らうと仰せられたのであります。根の堅洲國と申すのは母神の伊邪那美命がおいでになつてある所であります。尤もこれまでの或る國學者達は根の堅洲國といふのは地下の國であると云つて居りますが、併し一番に此伊邪那美命は月讀命と同じく月界に御出でになつたのでありますから、月界を根の堅洲國と言つたのであります。で須佐之男命は自分の力が足らな

いのである、不徳の致す所であるからして自ら身を引いて、根の堅洲の國へ行かうと仰有つて、一言も部下の神々の不心得や、其悪い行状を仰せられなかつた。如何にも男らしい潔白なお方で御座います。所が伊邪那岐命は非常に御立腹になつた。

「然らばみまし此國にはな住みそ」

其方のやうな此海原を治める力量の無いものならば、二度と此國に住むではならぬ。勝手に根の堅洲國へ行つたがよからう。一時でも居つてはならぬぞとお叱りになつたけれども、伊邪那岐命は須佐之男命の心中は疾くに克く御存知である。自分の子がどうして此國を治める事が出来ないか、どうして自分の珍の兒の言ふことを萬の神々が聽かぬか、腹の底では充分に御存知であります、それを彼此仰有らない。心の中には千萬無量のお悲しみを持つて居られますけれども、他に多くの神々に傷をつけるといふことは考へ物である。それで須佐之男命に刑罰を與へて罪人としたならば、その他の八百萬の神、これに隨いて居る所の神等はそれを見て皆改心するであらう、その悪かつたことを悟るであらうと思召して大

神様は自分の子を罰せられたのでありまして、普通の者の出来難いことで御座います。その廣大なるお情深い御心は、誠に勿體ない次第でありませぬか。此須佐之男命を罪に問うたならば、あれこそ吾々の爲めに罪せられたのである、誠に濟まないことであるから、吾々は悔い改めて本當の政治をしなければならぬ、改心を早く致して命の罪を赦されむ事を八百萬の神々が思ふであらうと思召して伊邪那岐命は此處置をお取り遊ばしたのであるが、矢張體主靈從に陥られた八百萬の神達は容易にそれがお解りにならず、あれは當然である、政治の主權をあんな者が握つて居つては國の治まらう筈がない、あれが居なくなれば又善い神様が來るに違ひない、否吾々の力で充分に世を治めようといふやうな頗る冷淡な間違つた考へを有つて居つたのであります。寔にこんな世の中を治めようとするには竝大抵の事ではないので御座います。

(大正九・一〇・一五 講演筆録)

(大正一一・三・五再録 谷村眞友録)

第二九章 子生の誓（五二五）

そこで須佐之男命がお父さんの伊邪那岐命に申上げられましたのは、然らば私は根の堅洲國に参ります。併しそれにつきましては、高天原に坐す姉君の天照大御神に一度お暇乞ひを致して参り度と存じます。高天原に上りますと申されて、
『乃ち天に参上りますときに、山川悉く動き、國土皆震りき』
天にお上りになるといふ此天は大本で言へば高天原で、今日に譬へて見たならば國の政治の中心で現代日本の高天原は東京であります。神界にも政治の中心が高天原にあつたのは當然で御座います。そこでいよいよ高天原に上り給はむとするとき山も川も悉く動いた。國土皆震ひ出しました。即ち物質界の上にも精神界の上にも、大地震があつたのであります。併しこれは形容であつて、社會萬民總てのものが今更のやうに驚き、國土の神々が一度に震駭した。今日の言葉で言へば内亂が起つたといふやうな意味で非常な騒ぎであります。須佐之男命がこれから根の堅洲國においでになるに就ては、今度お暇乞ひの爲に高天原にお上りにな

るといふので、國中非常な大騒ぎで、終に騷亂が起つたのであります。一方天照大御神様は、今度須佐之男命が天に上るに就て、國中大騒ぎであるといふことを聞き召されて、大いにお驚きになつて、

「あが汝兄の命の上り來ます由は、必ず美しき心ならじ、我が國を奪はむと欲すにこそ」

と詔り給うて弟の須佐之男命が海原を治さずして、高天原に上つて來るといふことであるが、これは必ず美しい心ではなからう。我此主宰する所の高天原を占領に來るのであらうと仰せになつて、

「御髪を解き御美髪に纏かして」

男の髪をやうに結び直して大丈夫の装束をして數多の部下を整列せしめ、戦ひの用意をなさつたのであります。元來變性男子の靈性はお疑が深いもので、わしの國を奪りに來る、或は自分の自由にする心算であらう、斯う御心配になつたのであります。丁度これに似たことが、明治二十五年以來のお筆先に非常に澤山書いてあります。變性女子が高天原へ來て潰して了うと云つて、變性女子の行動に

對して非常に壓迫を加へられる。また女子が大本全體を破壊して了うといふやうなことが、お筆先に現れて居ります。それで教主初め役員一同、教主の教の通りに此皇國の爲め、靈主體從の神教を説いて日夜務めて居るので御座いますが、併し大本教祖も變性男子の靈魂であつて矢張疑が深いといふ點もあります。天照大御神様は、疑ひ深くも弟の美しい心を、これは悪い心を以て來たのではあるまいかとお疑になつたのであります。教祖もさう云ふ工合に變性男子の神界の型が出來て居るのであります。さうして、

『左右の御美髪にも御鬢にも、左右の御手にも、各八坂の勾玉の五百津の御統眞琉の珠を纏き持たして、背には千入の靱を負ひ』

矢筒や弓をお持ちになりて、

『伊都の竹鞆を取り佩して弓腹を振り立てて』

弓を一生懸命に、ギョツト満月の如く引き絞つて、

『堅庭は向股に踏みなづみ、沫雪なす蹶散かして、伊都の男健び踏み健びて待

ち問ひ給はく』

男健びといふのは、角力取りが土俵に上つてドンドンと四股を踏んで、全身の勇氣を出す有様であつて、弟が軍勢を引き連れて来たならば一撃の下に討ち亡ぼして了うて遣らうと、高天原の軍勢を御呼び集めになつたのであります。

如何にも女神の勇ましさと、偉い勢を形容してあります。弟の須佐之男命が上つて来るのは、高天原を攻め落さうと思つて来るのではないかと、非常に御心配になつてそれに対する用意をしてお待ちになつたのであります。今日世人や新聞雑誌記者や既成宗教家や學者などが、大本が何か妙なことを考へて居るのではあるまいかと、變な所へ氣を廻して居ると同じことでもあります。そこで、

「何故上來ませると問ひ給ひき」

汝は海原を治めて居ればよいのである。然るに今頃何が爲めに高天原へ出て来たかとお問ひになつた。すると須佐之男命が答へられた。私が今來て見れば、大變な防備がしてある。大變な軍備がして有りますが、これは私に對する備へでせうが、私は決して然う云ふ穢い考へは持つて居りませぬ。ただ父君伊邪那岐命が何故その方は泣くかとお尋ねになりましたから、實状を申上げるのはどうも辛う

御座いますし、親様に心配をかけるのは畏れ多いと思つて、私は母の國に參らうと思ひますと申し上げました所が、父の大御神は以ての外のお怒りで、此國を治めるだけの力無きものなら、勝手に行けと仰有つて、手足の爪を抜き、鬚をぬき、髪の毛を一本もないやうに、こんな風にせられました。で私はこれから母の國に參りますといふことを姉上に申上げに參つたのであります。然うしますると天照大御神様は、果して然らば、汝は何によつてその心の綺麗なことを證明するか、證據を見せて貰ひ度いと仰せられた。そこで須佐之男命は、

「各誓ひて御子生まな」

誓ひといふことは、誓約のことです。若しも私が悪かつたならば斯々、善かつたならば斯々といふ誓ひであります。

「故爾に各天の安河を中に置きて誓ふときに」

天の安河といふのは、非常に清浄な所を意味するのであります。總て河の流れのやうに、少しも滯らない留まらない所は綺麗であります。物を溜るといふことは腐敗を意味します。この綺麗な清らかな、公平無私な所を、天の安河といふの

であります。それを眞中にして、本當の公平無私なる鏡を茲に立てて、さうして
両方から誓約をせられました。どう云ふ誓約であるかといふに、須佐之男命は十
拳の劍を持つて居られた。劍といふものは男の魂であります。昔から我國では刀
を武士の魂又は大和魂と申して居ります。女の魂は鏡であります。乃ちお前の魂
である所の劍を渡せと天照大御神が仰せられたから、それをお渡しになると、天
照大御神は三つに折つて、

「天の眞名井に振り滌ぎてさ嚼みに嚼みて吹き棄つる氣吹の狭霧に成りませる
神の御名は」

第一番にお生れになつた神は多紀理姫命、次に市寸島比賣命、次に多氣津姫命
の三女神で現に竹生島に祀つてあります。安藝の宮島に祀つてありますのは市杵
島姫命であります。次に多紀理姫命、多岐津比賣命、この三人の女神がお生れに
なつた。今度は須佐之男命、この神様は非常に怖い、繪で見る鐘馗さんみたいな
暴悪無類の神様のやうに見える、おまけに劍まで佩ひて居られる、その劍をお調
べになると、三人の綺麗な姫様がお生れになつて居るのである。この三女神は竹

生島その他の神社に祀つてあります。三女神の神名を言霊上より解釋すれば「多紀理姫命は尚武勇健の神」市寸島姫は稜威直進、正義純直の神」多氣津姫命は突進的勢力迅速の神様」では眞正の瑞の御魂の靈性であります。この竹生島とは竹生と書きまして昔から武器の神様としてあります。即ち武器といふのは、竹が初まりであつて、先づ竹槍を造つた。そして竹で箭を造り、弓を拵へることを發明したといふやうな工合に、今の武器の初めは竹であつた故に武の字をタケと讀むのであります。そこで今建速須佐之男命の持つて居られました劍、つまり須佐之男命様の御靈である所の刀からは三人の姫神がお生れになつた。刀を持つて居るから建速と申すとも言ひます。多紀理比賣は手切姫で斬る。多岐都比賣は手で突くといふ意味にもなります。伊突姫も突刺す意味である。すると槍とか劍とかは伊突き、手切り、手斷突の働きになつて居ります。兔に角立派な綺麗な極從順な鏡の如き姫神様でありました。それで之れを瑞の靈とも、三人の靈とも申します。三月三日の節句を女の節句として祝ひますのも然う云ふ所から出て居ります。それから今度は須佐之男命が天照大御神の御用ゐになつて居ります珠、平

和の象徴たる所の飾りの八坂の勾瓊を御受けになつて、天の眞名井の綺麗な水にお滌ぎになつて、

「さがみにかみて吹き棄つる氣吹の狭霧に成りませる神の御名は」

玉と云ふものは元來清く美しい光り輝く眞善美のものであつて、刀の如くに斬つたり突いたりするものではありません。實に平和に見えるものであります。こ

れは左とか右りとか澤山ありますけれども長くなりませんから委しく申上げませぬ。

而して氣吹の狭霧になりませるとありますのは、此處はつまり鎮魂であります。

初め先づ鎮魂して各自の靈を調べるのであります。吾々の靜坐瞑目して致して居

ります所の鎮魂と同じ意味であります。如何なる守護神が現はれてゐるか、靈魂

の集中を審めて見るので御座います。そこでお生れになりましたのが、正勝吾勝

勝速日天の忍穂耳命、不撓不屈勝利光榮の神、次に鎮魂してお生れになつたのが

天の菩卑能命、血染燒盡の神。次が天津日子根の命、破壊屠戮の神。次に活津彦

根命、打撃攻撃電撃の神。次が熊野久須毘命、兩刃長劍の神。都合五柱の男の命

がお生れになつたのであります。天照大御神は姿は女である。女の肉體をお有ち

であつたので御座いますが、その靈は以上述べた如く實に勇壯無比の男神でありました。鎮魂の結果お生れ遊ばしたのは五柱の男の神様の靈性が現はれた、それで姿は女であつて男の御靈を備へて居られますから、天照大御神を變性男子と申し、嚴の御魂と申し、須佐之男命は姿は男であつても女の靈をおもちであつたら變性女子と謂ひ瑞の御魂といふので御座います。而して前の三女の靈に對して、この五柱の命を五男の靈とも申します。之を佛教では八大龍王と唱へまして、京都の祇園では八王子というて御祭りになつて在ります。

茲で初めて須佐之男命は表面怖い暴逆な神様であるけれども實は極く優しい、善い心の神様であるといふことが解り、これに引きかへ天照大御神は極く優しい、鏡からぬけ出たやうな玲瓏たるお方でありませけれども、前の言靈解の如き御靈があつたのであります。

ここで一つよく考へなければならぬ事は天照大御神のお言葉に、
「言向け和はせ」

と書いてありますが、言葉を以て世界を治めよといふことになります。さうしま

すと天照大御神は外交の難しい事について御子孫にお示しになつたのでありまして、どこまでも此珠を以て充分に平和を旨として治めて行かなくてはいかぬといふ御心でありました。然るに須佐之男命は根の堅洲國へ行くについても、武備を非常に盛んにして軍艦を澤山に拵へ、大砲を澤山造るといふ、所謂武装的平和のお心である。斯う考へますと、今の外國の主義が須佐之男命のと同じである。主靈従である。天照大御神は日本國になつて居るといつてもよいと思ひます。日本人の心の中には武備がある。大和魂がある。けれども表面には武装がないのである。いざといふ場合には稜威の雄健び、踏健びをしなくてはならぬがその間には常に極く平和に落着いて居る。然るに外國は始終刀を有てゐる。外に向つて十拳の劍を握つてゐるけれども、愈戦ふとなれば、あちらは三人の女の神様であるのに反して、表面弱い如くに見えても五人の男の神様の靈性が出て來るのである。この靈および身魂のことに就てはお筆先にも出て居ります。身魂の善惡を改めると申されてあります。

是に天照大御神、須佐之男命に告り給はく

後から生れた所の五柱の神はわしの有つて居る珠から出て来たものであるから
自分の子である。所謂自分の魂から出た男神はみな自分の子である。それから先
刻生れた姫御兒はその種が汝が魂十拳の劍から出たのだからこれは汝の子である
と仰有つた。これで身魂の立て分けが出来た。須佐之男命は變性女子で、天照大
御神は變性男子であるといふことが明かになつた。所が須佐之男命は、姉天照大
御神は今迄は私の心を疑うて御座つたが、これで私の清明潔白な事は證據立てら
れた。私の心の綺麗な事は私の魂から生れた手弱女によつて解りませう。あの弱々
しい女子では戦をする事は出来ずまい。斯う考へたならば最前あなたは、私が
高天原を奪りに來たらうと仰られたがあれは間違ひでせう。私の言ふことが本當
でせう。

「これによりて言さば自ら我勝ぬと言ひて、勝さびに天照大御神の營田の畔離
ち、溝埋め、亦其の大嘗聞し召す殿に屎まり散らしき」

この言葉は少いけれども、この意味は、當時須佐之男命様にも尚ほ澤山の臣下
が在つた。茲に須佐之男命に反對するものと、味方するものとが出来て來たので

迷ひが起つたのであります。須佐之男命がお勝になつて、増長なさつたといふよりも寧ろ、私の綺麗な心は解つた筈である。然るに尚悪いと仰せになるのは心地が悪い、不快であるといふので終に自暴自棄に陥つたのであります。やけくそを起した結果が、田の畦を壊したり、溝を埋めたり、御食事をなさる所へ糞をやり散らして、いろいろ亂暴のあらむ限りを、須佐之男命に味方する系統の者が行つたのであります。天照大御神は此状態を御覽になり、弟は決してあの多量の糞をまいたりする筈はない、酒に酔つて何か吐いたのであらう。畔を離ちたり、溝を埋めるのは、丁度今でいふ耕地整理のやうなもので、いらぬ畔や溝を潰して澤山米が出来るようにする爲めだらうと、所謂直日に見直し詔り直して、一切のことを總て善意に御解釋されて所謂詔り直し給うたのであります。何でも善い方に解して行けば波瀾は少いもので御座います。天照大御神も善意に解して居られましてたけれども、御神意を悟らぬ神等の亂暴は愈長じて遣り方が餘りに酷くなる。八百萬の神様方がどうしてもお鎮まりがない。世の中が大騒ぎになつた。彼方でも此方でも暴動が起る。無茶苦茶な有様になつた。そのうちに、

☐ 天照大御神、忌服屋に坐まして、神御衣織らしめ給ふときに、其の服屋の頂を穿ちて、天の斑馬を逆剥ぎに剥ぎて墮し入るときに、天の御衣織女、見驚きて梭に陰上を衝きて死せき☐

斯う云ふ事件が起つたので御座います。ここで機を織るといふことは、世界の經綸といふことであります。經と緯との仕組をして頂いて居つたのであります。すると此經綸を妨げた。天の斑馬暴れ馬の皮を逆剥にして、上からどつと放したので、機を織つて居た稚比賣の命は大變に驚いた。驚いた途端に梭に秀處を刺し亡くなつてお了ひになつたのであります。さあ大變な騒動になつて來た。

(大正九・一〇・一五 講演筆録)

(大正一一・三・六 舊二・八 谷村眞友再録)

第三〇章 天の岩戸(五二六)

今迄耐へに耐へておいでになつた天照大御神は、餘りの事に驚き且お怒り遊ばして是ではもう堪らぬといふので、天の岩屋戸を建てて直様その中にお入りになり、戸を堅く閉してお籠りになつて了つた。是も亦形容でありまして、小さく譬て見ますれば、この東京市は市長が治めて居る。然るに到底私の力では東京は治まらぬ、仕方がないと云つて辭職して了ふ。市役所に出て來ない様になる。一國に就て言へば總理大臣が私の力でこの國は治まらないからと言つて辭職して了ふ。一國にしても一市にしても、主宰者が居らぬでは外の者にはどうする事も出來ないと云ふ其人に辭職されて了うたなら其國なり其市なりはどうでせう。詰り此只今でいふ辭職といふのが、天の岩屋戸へ天照大御神がお籠りになつたと同じ様なことであります。

「即ち高天原皆暗く葦原の中津國悉に闇し」

眞暗闇では何うしようにも方針がつかない、葦原の中津國の大政府が仆れた爲に其所在地たる高天原を初め全國が火の消えたる如くになつて了つた。下の方の者では施政の方針は分らない。どうもかうも手のつけ様がない。

「茲に萬の神のおとなひは、五月蠅なす皆湧き、萬の妖悉に發りき」

今度はもう晝も夜もない眞暗がりぢや。斯うなつて來ると世の中はどうなり行くか、丁度今日に就て考へて見ると面白い。政治は勿論教育も經濟も、内治も外交も滅茶苦茶である。一切萬事眞暗がりの世になつてゐる。どこにどうしようにも見當がつかない。斯うなつて來ると、此に發して來るのは各階級の風俗の紊亂であります。不良人民が殖ゑ竊盜が横行し、強盜が顔を出す、神代に於ても、萬の妖が總ての事に、彼方にも此方にも五月の蠅の如くに發生して來たのである。之を天の岩屋戸隠れと申すのでありますけれども、今日の世態を考へますと、恰も神代に於ける岩屋戸の閉てられた時と同じやうに思はれます。

「是を以て八百萬の神」

はどうする事も出来ないから、

「天の安河原に神集ひに集ひて」

相談をなされた。之を高天原即ち天上の議場に集まつたのだと云ふ人もあります。平等なる神々様が、物を洗ふ、流すと云ふ意味の公平無私なる土地に集まつたの

であります。安やすということとは安全あんぜんと云いふことで、この安やすらかなる地ち點てん即すなはち風水火ふうすゐくわなり飢病きびやうせん戰せんなりその他た總すべての禍災くわさいを防ふせぐことの出來できる、然しかも何等なんら壓迫あつぱくを被かつることのない場所ばしよであります。さうしてこの清きよらかな場所ばしよへは、上下じやうげ貴賤きせんの區別くべつなく總すべての人々ひとびとが、國くにを憂うれひ、國家こくかを救すくはなくてはならぬと云いふ、潔きよらかな精神せいしんを以もつて集あつまつて來きたのであります。

□ 高御産巢日たかみむすびの神かみの御子みこ、思兼おもひかねの神かみに思おもはしめて

この思兼おもひかねの神かみは今日こんにちでいうと樞密院すうみつゐんの議長ぎちやうといふ様な役目やくめであります。一いち番思ばんしり慮よの深ふかい人ひと、さうして神かみの教をしへを受うけた人ひと、この人ひとに天あまの岩屋戸いはやどを開ひらき天下てんかを救すくふべき方法ほうはふを尋たうねまして、その結果けつくわ、

□ 常夜とこよの長鳴鳥ながなきどりを集つどへて鳴なかしめて

常夜とこよといふのは常闇とこやみの世よの事ことであります。即すなはち永遠無窮えいゑんむきつに日月じつげつと共に、國事こくじに就つて憂うれひ活動くわつどうをして居をる神かみ、此等これらの神等かみたちを集あつめて泣なかせるといふのは各自めいめいに意見いけんを吐はかせると云いふ事ことである。その結果けつくわ、

□ 天あめの安やすの河かはの河上かはかみの天あまの堅石かたいはを取とり、天あまの金山かなやまの鐵かねを取とりて、鍛人かぬち、天津麻あまつま

羅を求めて、伊斯許理度賣の命に科せて鏡を作らしめ^四

この堅い石を取るといふことは、皇化萬世動かぬ岩に松といふ、天から下つた所の教を取るといふことである。天の金山の鐵を取るといふことはどちらも力ネである。鍛人、これは鍛冶屋といふ意味でありますけれども、總て世を治めるに必要な道具、一切の武器などを拵へたのであります。次に鏡を造らしめる。鏡は人物の反映である。靈能の反映である。故に歴代の天皇は之を御祀りになつて居る。鏡は皇室の寶物になつて居るのであります。鏡は神であります。さうして言靈であります。言靈七十五音を眞澄の鏡と申します。三種の神器の一を八咫の鏡と申すのは即ち七十五聲の言靈であります。それから言靈が日本人のは非常に圓滿清朗であるといふのは、是は日本の國に金の徳があるからであります。地の中に金といふものが多い、外國と違つて黄金の精が多い。故に日本人の音聲は清いのであります。鳴物でも金が入つて居ると善い音が出ます。金の多いと云ふ事の爲に天の金山の鐵を取りてと出て居るのであります。それから伊斯許理度賣命に鏡を作らしめるとは、伊斯許理度賣命の伊は發音であつて、斯許理といふのは

熱中すること、一生懸命に國の爲に奔走する神、さういふ神を寄せて言靈の鏡を作らせたのであります。次に、

「珠を作らしめ」

又

「天の香山の眞男鹿」

の角を取つて占なはしめることになつた。天の香山といふのは鼻成山と云ふ意義で、神人を生かす山の事でありませぬ。此

「天の香山の眞男鹿の肩を打抜きに抜きて」

さうして何ういふことをしたらよいか神勅を乞はれたのであります。今の神占は殆どそんなことはありませんが、昔は鹿の骨を火に焼いて、その割目で吉凶を占うた。實際八百萬の神が集まつて、種々雑多なことをして國の爲にどうしたらよいかと考へた。其中には易を見る神もあつたので御座います。易を見て方針を決めたり、其他いろいろに考へ、四方八方から考へて行つた結果、そこで初めて、岩屋戸を開くに就ては祭典をして天神地祇を祭らなくてはいかぬといふこと

に決つた。先づ、

「眞賢木を、根拔に掘て、上枝に八咫の勾珠の、五百津の御統麻琉の玉を取り著け、中枝には、八咫鏡を取りかけ、下枝に、白丹寸手、青丹寸手を取り垂でて」
つまりこれは今日で言ふ神樂であります。伊勢神宮では昔から十二組の大神樂があります、これは岩屋戸開きの事をお示しになつて居るのであります。

前にも申上げましたやうに現代の世態を考へますと今日は所謂世界の大神樂を奏しなくてはならぬときであります。あのお神樂のときに出て参ります翁獅子、あれは既に大きなおそろしい面をした獅子を被つて、刀を口にくはへ毛を下らして居る。この形は何であるか。眼は金、鼻の孔も金、齒も金、而も其口を動かして、本當に恐ろしいやうであるけれど、眞中には人が入つて操つて居るばかりか、頭の方こそ立派だが後の方には尾も何もない。だんだらの條のやうなものが入つてゐる布に過ぎない。そこにも人が隠れて居て前の者と調子を合せて操つて居る。これが獅子舞の眞相であります。所で今日の世界の外交術は皆この獅子舞であります。表面は非常に大きないはゆる獅子口を開けて、今にも噛みつきさ

うにして、怖ろしいやうであるが、中に入つて見ると、人が獅子の口を開けて舞うてゐるのである。ちやうど今日は神樂をあげてゐるのである。それから大神樂のときに藝人が鞆を上げたり、下したりする。これは靈の上り下りを示して居るのである。また一尺位の兩端に布切れの付いた妙な棒のやうなものを上げたり下したりする。これは世の中の柱が、上のものは下敷となり下のものは上になりて行く、即ち立替をするといふことを示してあるのである。それから盆の上や傘の背に一文錢を轉がせて一生懸命きりきり廻して居る。これは何をして居るのであるかといふと、今日の世の中は金融が逼迫して、一文の金も一生懸命に走り廻つてゐる。千圓の財産でもつて一萬圓も二萬圓もの仕事をしてゐる。だから一朝經濟界の變調が起るとポツツリ運轉が止つて了ふ。そう云ふ工合に金融が切迫してゐると云ふ事を表してゐる。次に劍の舞をやつて居る。頭を地につけて反り身になつて一生懸命にやつてゐる。これはいはゆる危険な相互傷き倒れると云ふ戰爭をして居る意味である。それから茶碗に水をつぎ込み長い細い竹の先にのせて、下から藝人がキリキリ廻して居る。あの通り危い。茶碗が落ちたらポカンと割れ

る。無論水はこぼれる。所が落ちないのはこのキリキリ廻して居る竹の所が要であるからで、すなはち要を握つて居るからであります。要と云ふものは中心である。いはゆる神であるからして引つくり覆らぬ。又おやまの道中と云ふ事をやります。いはずが神樂が出来て、獅子舞姿でおやまの道中をして居る眞似をする。ちやうど今日の世の中の様に男の頭の上に女が上つて居るやうな工合になつて居る。それから獅子の後持といふのがある。さうしておやまの道中には傘をさして妙な獅子舞を致しますが、今日の世の中に於きましても男が下になり女が上になつて之を使つてると同じ事でありませんが、またこの獅子舞は達磨大師の眞似をして見せる。足を下にして大の字になつたり、逆様にひつくり返つたりして見せる。上になつたり下になつたりキリキリ舞をしてゐる。後持が大の字になつて見せたり逆様になつて見せたりする。上のも大の字、中のも大の字、あとのも大の字逆様ぢやと申して一生懸命やつてゐる。一方では大神樂の親父と云ふのがあつて、片方で藝人の眞似をしては邪魔をしたり、いらぬ口を叩いたりして、頭をポンと敲かれたり、突かれたりしてお客さまを笑はせる。笑はせる丈ならよいが大變な邪魔

をする。この親父は唾や聾の眞似をして舞もせず邪魔をする。今日の世の中に
もかう云ふ獅子舞の親父がある。元老とか何とか言うて、若い屈強盛りの者が一
生懸命に藝當をやつてゐる所へ口嘴を出したり、邪魔をしたりする、時には頭を
ポンとやられる。さうして一番しまひに貳圓なり五圓なりの金をせしめる、藝を
すませて、親父はアババと言うて歸つてしまふ。このアババは言靈から申し
ますと、總ての物の終り、大船が海上で沈没をした時や、開いた口が閉がらぬ様
な困つて失望したとき、どうもこうも出来ぬやうな苦境に陥つてしまつたと云ふ
時の表示であります。兔に角、今日の世の中は大神樂を廻して居る時であります。
神代の岩戸開きの神樂と、今日の世の神樂とは餘程變つて居りますけれども、そ
の大精神に於ては同一であります。

神樂舞の時に躰子が太鼓を打つのは大砲や小銃弾や爆裂弾の響き渡る形容であ
り笛を吹くのはラツパを吹き立てる形容であり、銅鉢を左右の手に持つてチヤン
チヤン鳴らし立てるのは、世界が兩方に別れて互に打合ふといふ事の暗示であり
ます。

そこで、

「天の宇受賣命、天の香山の天の蘿を、手次に繋けて、天の眞析を鬘として、天の香山の小竹葉を手草に結ひて、天の岩屋戸に空槽伏せて」
いろいろの葉を頭につけたり、葛を襷にかけたりして、岩屋戸の前へ行つて、起きたり逆様になつたり、足拍子を取つてどんどんどんやつた。

「踏み動響し、神懸して、胸乳を掻き出で、裳紐を陰上に押し垂れき」

岩屋戸を開く爲に、宇受賣の命が起きたり、逆様になつたり、一生懸命に神懸りをやつた。神懸りに就いてはここには省略する。これはその人一人の事ではありませぬ。宇受賣と云ふのは、女の事を申しますが、俗に男女と言はれる女であつて、男のやうな強い人をオスメまたはオスシと言ひます。これは宇受賣から初まつたのである。女は女らしくしななければならぬので御座いますけれども、然し乍ら、天の岩屋戸の閉つたと言ふ様な國の大事の際には、女だとして女らしくして居られない場合があります。男も女も神様がなされました様に一生懸命になつて國事に奔走せなければならぬ。總て女と云ふ者は人の心を柔げる所の天職を有

つて居ります。今誰も彼も、皆の者が岩戸開きの爲に心配をしてゐる。顔をしかめて考へ込んでゐるその際に、宇受賣命、すなはち男勝りの女が出て来て、とんだり、跳ねたり、腹匍うたり、面白い事をして見せたり、いはゆる國家的大活動をした爲に、

「かれ高天原、動りて八百萬の神、共に咲ひき」

一度にどつと笑つた。非常に元氣づいて國家の一大難局を談笑快樂の中に治めて了つたのであります。現代に於ても女の方も活動して下されまして岩戸の開く様にせなければならぬと存じます。昔もさうでありました。

「ここに、天照大御神、怪しと思ほして、天の岩屋戸を細目に開きて、内より告り給へるは」

岩屋戸に隠れてゐられました大神様は、今私は岩屋戸に隠れて了つた以上は、葦原の中つ國も、天地も共に眞闇になつて、さぞ神々は困つてゐるであらう、と思ふに何故か岩屋戸の外で、太鼓を打つ、鐘を叩く、笛を吹く、どんどん足拍子がする、宇受賣の命が嬉しさうに噪ぐ、八百萬の神たちが一緒になつてどつと笑

ひ樂ぶ。餘り不思議に思はれて中から仰せになつた。

「吾が隠れますに因りて、天の原自ら闇く、葦原の中津國も皆闇けむと思ふを、何て天宇受賣は樂びし、亦八百萬の神、諸々笑ふぞ」

何故そんなにをかしいか。すると天宇受賣命が、

「汝が命に益りて、貴き神坐すが故に、歡咲ぎ樂ぶと申しき」

何でもその國に大國難が出来たときは皆なの顔色は變るものである。お筆先に

も「信仰がないと正勝のときには大方顔色が土のやうになるぞよ」とあります。

信仰が出来て神諭の精神が解り神の御心に叶へばやれ来たそれ来た、勇むで大

國難を談笑遊樂の間に處理する事が出来るのである。私は永年閒御神諭を拜し、

かつ御神意を少し許り了解さして頂いただけでも、心中平素に安く樂しき思ひに

充ち、如何なる難事に出會しても左迄難事とも思はず、何事も神の思召と信じて、

人力のあらむ限りを安々と盡さして頂いて居ります。凡て事業は大事業だとか、

大難事だとか思ふやうでは、回天の神業は勤まらない。三千世界の立替立直しに

對しても夫れが完成は淨瑠璃一切り稽古する位により思つて居らないのですから、

實に平氣の平左で日夜神業に面白く楽しく奉仕して居ります。然う云ふ工合に、
總ての神様が信仰の下に、喜び勇んで元氣よく活動されたのであります。それで
何故、諸々笑ふぞとお尋ねになつた。そこで、あなたに優つた偉い神様がおいで
になつたから喜び勇んで居りますと答へられた。

すでにその前に天の兒屋根命、これは祭祀のことを掌つた神様、後には中臣と
なつて國政を料理した藤原家の先祖であります。この神様がその時天神地祇にお
供へをしたり、太玉命が太玉串を奉つて神勅を受け、一方占の道によつて、萬事
萬端、ちやんと手筈が整つてあつたので御座います。所へ案の如く天照大御神様
は、

「愈奇しと思ほして」

そつと細目に戸をお開けになつた。するとそれがパツと鏡に映つたので、

「天の手力男神、其手を取りて引き出しまつりき」

その間に布刀玉命が注連繩をその後引ひき渡して、此處より中にはもうお入り
下さいますなと申した。これで天地は照明になつた。この鏡に天照大御神の御姿

が映つたとありますのは、つまりは言靈で御座います。八咫の鏡は今も器物にして祀られて天照大御神の御神體でありますが、太古は七十五聲の言靈であります。各々に七十五聲を揃へて來た。すなはち八百萬の誠の神たちがよつて來て言靈を上げたから岩屋戸が開いたのであります。天津神の靈をこめたる言靈によつて再び天上天下が明かになつたのであります。決して鏡に映つたから自分でこのこ御出ましになつたと言ふやうな譯ではありません。つまり獻饌し祝詞を上げて鎮魂歸神の靈法に合致して、一つの大きな言靈と爲して天照大御神を、見事言靈にお寄せになつたのであります。それから注連繩、これは七五三と書きます。その通り、この言靈と云ふものは總て七五三の波を打つて行くものであります。さうして注連繩を引き渡してもう一邊岩屋戸が開いた以上は、再び此が閉がらぬやうにと申上げた。

「かれ、天照大御神、出で坐せる時に、高天原も葦原の中津國も自ら照り明り

言靈の鏡に天照大御神の御姿が映つて、總ての災禍はなくなり、愈本當のみる

くの世に岩屋戸が開いたのであります。そこで岩屋戸開きが立派に終つて、天地
照明、萬神自ら樂しむやうになつたけれども、今度は岩屋戸を閉めさせた發頭人
をどうかしなければならぬ。天は賞罰を明かにすとは此處で御座います。が岩屋
戸を閉めたものは三人や五人ではない、殆ど世界全體の神々が閉めるやうにした
のである。で岩屋戸が開いたときに、之を罰しないでは神の法に逆らふのである。
併し罪するとすれば總ての者を罪しなればならぬ。總てのものを罰するとすれ
ば、世界は潰れて了ふ。そこで一つの贖罪者を立てねばならぬ。總てのものの發
頭人である、贖主である。佛教でも基督教でも斯う云ふので御座いますが、とに
かく他の總ての罪ある神は自分等の不善なりし行動を顧みず、勿體なくも大神の
珍の御子なる建速須佐之男命御一柱に罪を負はして、鬚を斬り、手足の爪をも拔
き取りて根の堅洲國へ追ひ退けたのであります。要するに大本の教は變性男子と
變性女子との徳を説くのであります。變性男子の役目と云ふものは總て世の中が
治まつたならば餘り六ヶ敷い用は無、統治さへ遊ばしたら良いのであります。
之に反して變性女子の役はこの世の續く限り罪人の爲めに何處までも犠牲になる

所の役をせねばならぬので御座います。岩屋戸開きに就てはこれからさきに申し上げますと尚いろいろのことがありますけれども、今日はまづ岩屋戸が開いて結末がついた所まで申上げておきます。

（大正九・一〇・一五 講演筆録）

（大正一一・三・七 舊二・九再録 高熊山御入山二十五年記念日 松村眞澄

谷村眞友録）

（昭和九・一二・九 王仁校正）

））））））））））

靈界物語 第一二卷 靈主體從 亥の卷

終り